

協力隊現地訓練強化拡充計画 調査報告書

平成2年2月

国際協力事業団
青年海外協力隊事務局

JICA LIBRARY



1083484[4]

21353

協力隊現地訓練強化拡充計画 調査報告書

平成2年2月

国際協力事業団
青年海外協力隊事務局

国際協力事業団

21353

ま え が き

協力隊の現地訓練をより効果的に実施するため、平成元年4月より青年海外協力隊事務局内に関係各課及び広尾・駒ヶ根両訓練所よりなる調査作業部会（事務局：派遣第二課）を設置し、各国の現地訓練の現状把握、そしてそれに基づく検討を重ねてきました。さらに、同年8月～9月に第一次現地調査団（3チーム）及び11月～12月に第二次現地調査団（2チーム）を派遣しました。

本資料は上記の調査の成果をとりまとめたものです。本資料が、各在外事務所及び関係各位において、現地訓練の検討をさらに深める為の執務参考用として役立つことを期待します。

平成2年2月

国際協力事業団
青年海外協力隊事務局長

中 村 武

目 次

1. 調査目的等	
(1) 調査目的	3
(2) 調査方法	3
2. 調査結果（総論）	
(1) 現地訓練（特に正式な語学訓練）の期間について	9
(2) 現地訓練中の宿泊施設	11
(3) ホームステイの活用方法	12
(4) モデル訓練プログラム	13
(5) 派遣前訓練と現地訓練の連係について	14
(6) 提 言	15
3. 現地調査結果	
第一次現地調査	21
(1) タンザニア・ケニア・ザンビア	21
(2) ネパール	35
(3) PNG・ソロモン諸島	39
第二次現地調査	47
(1) インドネシア・西サモア・フィジー・フィリピン	47
(2) バングラデシュ・マレーシア	67

資 料 編

1. 現地訓練の強化・拡充について（発信；昭和63年5月12日）	69
2. 現地訓練調査（実施状況の推移）（平成元年10月9日現在）	70
3. 現地訓練実施状況一覧表：英文（平成元年10月30日現在）	71
4. 協力隊の現地訓練の現状（各国毎の資料；現地訓練プログラム概要等）	74
（平成元年8月～9月現在）	
5. 他国のボランティアの現地訓練の現状	121

1. 調查目的等



1. 調査目的等

(1) 調査目的

協力隊は、現地語学訓練を「任国において言葉の運用能力を高め、風俗習慣を学び、協力活動への心構えを醸成させる」ことを目的として、昭和48年度から実施してきた。

昭和49年度から、中南米地域派遣の隊員を対象にグアテマラにてスペイン語研修を始め、その後、昭和59年に訓練場所をメキシコ・クエルナヴァカに移し実施してきた。また、アフリカのフランス語圏派遣の隊員を対象に、昭和57年からフランス・ヴィシーにて、フランス語研修を開始した。また、その他地域の諸国においてそれぞれの任国の事情に応じ、プログラムを開発し、現地訓練を実施してきた。

また、協力隊運営委員会（昭和62年）においても、語学訓練を効率を高めるために、国内での訓練を基礎的なものに留め、国、地域、あるいは語学別の訓練を整備、現地において訓練する方が良いとの提言がなされた。

これらの状況と提言を踏まえ、昭和63年度派遣前訓練の期間に関し、従前の約90日間を2週間短縮し、77日間として、現地訓練をより強化拡充することを目的として、以下の指針に沿い、各在外事務所で検討を進めることとした。

1. 語学修得に重点を置く。
2. 期間を1ヶ月とする。

（資料1. 昭和63年5月11日付発信文書；「現地訓練の強化・拡充について」参照）

以上の経緯に基づき、今年度は各国の現地訓練の強化・拡充の実態を確認し、上記方針に沿った内容の実施促進を図り、併せて更なる改善方法を探ることを目的として、本調査を実施するに至った。なお、フランス語圏及びスペイン語圏については、訓練期間・訓練内容等について他国の現地訓練と比較した場合、十分な訓練が実施されていると判断し、今回の調査の対象外とした。

(2) 調査方法

(2)－1. 調査作業部会の編成

調査実施に際し、下記の通り調査作業部会を編成し、月1回の割で会合を持ち、現地訓練計画の検討を進めた。

（調査作業部会の構成）

部会長	派遣第二課長
委員	調査役
	派遣第一課

派遣第二課（調査作業部会事務局）

広尾訓練所

駒ヶ根訓練所

(2) - 2. 調査工程

第一回調査作業部会（平成元年6月1日）において、調査目的、調査方法、及び調査スケジュール（表1、表2）等、調査の基本方針を確認した。その後、その調査方針に基づき調査作業部会において検討を重ねつつ、調査を実施した。その調査工程概略は次の通りである。

ステージⅠ

- ① 既存の現地事務所からの「現地訓練の現状」に関する報告、平成元年度実行計画、隊員報告書を情報源として、各国別データをフォーマットに整理した。
- ② 各国別データの記入されたフォーマットを各在外事務所へ送付し、記述内容のチェック、必要に応じて加筆修正を依頼した。

ステージⅡ

各国別データの補足収集を要する国、あるいは、隊員から現地訓練の改善要望の強く、早急に現地事務所と協議を要する国について現地調査（第一次現地調査）を実施した。

ステージⅢ

ステージⅠ及び、ステージⅡの調査を踏まえて、各国の基本データの再整理を行ない、資料2の「現地訓練調査（実施状況の推移）」としてとりまとめた。

ステージⅣ

本調査の総括を目指し、下記目的に基づく現地調査（第二次現地調査）を実施した。

現地調査目的

- 1) 現地訓練の改善要望の強い国において改善策を調査する。
- 2) 「講義内容の重複」や「講義の準備不足」等の現地報告の理由・背景は、現地の語学講師等が現地訓練の趣旨・位置付けを十分理解出来ていないと考えられるので、現地事務所および現地の講師と改善策を協議する。
- 3) 他のボランティア派遣機関（USPC、CUSO、DED他）の現地訓練の実態調査を行ない、JOCV訓練と比較・検討し、参考資料をとりまとめる。
- 4) 非常に効果の高い現地訓練の実態調査を行ない、他国の場合との比較検討を行なう。（フィリピン、マレーシア）

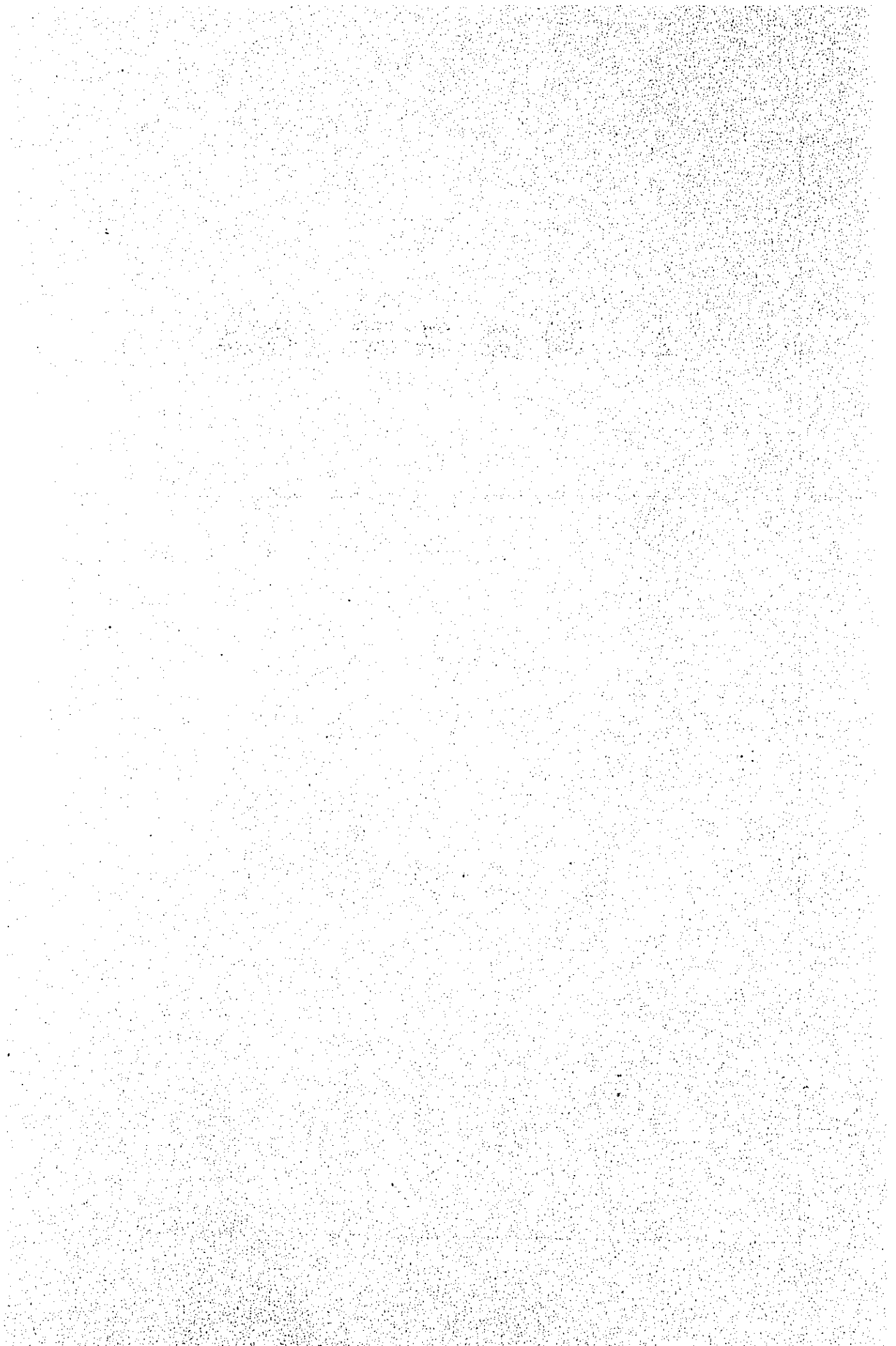
ステージⅤ

ステージⅣの現地調査結果を踏まえ、本調査報告書を取りまとめた。

現地訓練強化拡充計画調査

	1989年4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月
I 資料分析 各事務所実行計画 隊員報告書 各事務所の提言 年次報告 派遣前訓練計画 帰国隊員アンケート 運営委員会議事録 第三国ボランティア機関 訓練 中期展望委員会資料							
II 作業部会開催 調査計画検討 調査方針確認	▲	▲	▲	▲			
III 資料作成 各国別問題点整理 重点調査項目 クエスチョネア 代替案							
IV 現地調査 団員決定 現地調査			▲				

2. 調査結果（総論）



2. 調査結果（総論）

はじめに

協力隊の現地訓練は、広尾及び駒ヶ根訓練所にて実施される77日間（標準）の派遣前訓練を受けて、協力隊員の各任国にて約1ヶ月間（標準）実施される。現地訓練の内容は通常、(1) 着任時オリエンテーション、(2) 語学訓練、(3) 異文化適応訓練 から構成される。

協力隊全派遣国の現地訓練の現況を概観すると、本調査を開始した平成元年4月（63/1次隊隊員報告書等を分析）と比較すると、本調査の中間とりまとめを行なった平成元年9月（63/2次及び3次隊の隊員報告書等を分析）の時点では、ほとんどの国において、現地訓練は、その内容および効果において明らかに改善が進んでいる（資料2参照）。以下の記述は、上記の比較・分析作業の過程で「現地訓練の効果を左右する要素とは何か」を検討した内容を中心にとりまとめたものである。

「どのような現地訓練内容が最適か」という問いについては、各国毎に現地訓練を実施する上での環境（適切な訓練施設及び講師の確保等について）の違いがあり、全協力隊派遣国に共通する一種類の現地訓練プログラムを提示することは出来ない。従って、最終的には、各国でそれぞれの環境に応じた最適現地訓練計画を立てる必要がある。しかしながら、どのような訓練計画を立てるにしても、訓練計画策定の「考え方」の基本として、留意すべきと思われる点があくつかあり、作業部会ではそれらの点について議論を重ねてきた。

今後も随時、各国毎に、現地訓練の効果をより高める方法を探る目的の下に、必要に応じた現地訓練内容の見直しがなされると思われるが、その際に本資料の議論が参考として役立つことを願う。

(1) 現地訓練（特に正式な語学訓練）の期間について

別表の通り、殆どすべての国が、現地訓練の総期間を4週間とっているが、正式な語学訓練の期間から見ると、それぞれ2週間、3週間、4週間の3タイプに分かれる。

2週間のタイプの国の特徴は、計8カ国の内、5カ国（ガーナ・リベリア・フィジー・トンガ・ソロモン）が、派遣前訓練の際の履修語（英語）とは別の現地語（ピジン英語等）訓練を実施している点である。ソロモンの例を見ると、語学テキストが丁度2週間で終了するように編集されており、その意味において2週間の期間の妥当性があると言える。また、ガーナは教師隊員に対してさらに3週間の教育実習を付け加えている。これは、現在までの実施報告によると、相当効果も上がっていることから、隊員の職種毎の語学のニーズの違いに着目した現地訓練の一つの特別メニューとして、他の国の参考例として検討に値する。一方この場合、本邦訓練期間を短縮した分、言語学習不足を現地で語学訓練の補

語学訓練の適正期間等の検討用ペーパー

89年10月9日現在
協力隊事務局派遣第二課

講義形式語学訓練が2週間の国

国名	宿泊施設	語学訓練期間の設定理由等	全訓練期間
スリランカ	N Y S C	N Y S Cトレーニングセンター。他、オリエンテーション1週間、語学旅行1週間。	4週間
リベリア	隊員連絡所	使用テキスト(リベリア英語会話)が丁度、2週間で終了するように編集されている。	4週間
タンザニア	隊員連絡所		4週間
ザンビア	隊員連絡所	他、オリエンテーション2週間、ホームステイ1週間。	5週間
フィジー	隊員連絡所		4週間
トンガ	隊員自宅		4週間
ソロモン諸島	隊員連絡所	使用テキスト(ビジン英語会話)が丁度、2週間で終了するように編集されている。	4週間
ガーナ	ホテル	他、語学旅行10日間、教師隊員はさらに3週間の教育実習訓練。	4週間

講義形式語学訓練が3週間の国

国名	宿泊施設	語学訓練期間の設定理由等	全訓練期間
モルディブ	隊員連絡所	ディヴィヒ語訓練。ホームステイ1週間(第三週目)。	4週間
ネパール	隊員連絡所	ホームステイ第1週、語学旅行第4週。	5週間
フィリピン	ホテル		4週間
エチオピア	隊員連絡所	アムハラ語だけなら現状の18日間で充分(事務所長見解)。語学旅行1週間。但し、教室型の隊員に英語訓練が必要ならば別。	4週間
ケニア	隊員連絡所	3週間目あたりから、隊員の気持ちの中に「早く現場にでたい焦り」が見られる。(高橋所長出張報告)	4週間
P N G	語学訓練所在 ワウ	テキストが2週間用。平/1から3週間にしたら講義が間延びした感じで、必ずしも効果的ではなかった。	4週間

ホームステイのみで3週間訓練(講義形式語学訓練は、まだ実施していない)

西サモア	ホームステイ	英語、西サモア語	3週間
ヴァヌアツ	ホームステイ	ビスラマ語	3週間

講義形式語学訓練が4週間の国

国名	宿泊施設	語学訓練期間の設定理由等	全訓練期間
バングラデッシュ	A T I 施設	A T I : 農業研究所	6週間
ブータン	隊員連絡所	英語、ゾンガ語各2週間	4週間
中国	ホテル		4週間
インドネシア	ホームステイ		4週間
マレーシア	ホームステイ	午前中語学3時間、午後は各種現地の青年団体との交流行事。オリエンテーション1週間。	4週間
タイ	語学学校	語学学校ドミトリー。現地訓練終了後、1カ月間ホームステイを継続しながら職場に通う。	5週間
ジョルダン	隊員連絡所	アラビア語	4週間
シリア	隊員連絡所	アラビア語	4週間
マラウイ	ホテル	英語、チェワ語、各2週間	4週間

強で行なうとした、頭初のネライと違う点も併せ考えてみる必要がある。

3週間のタイプの国、計5カ国の内で、ぶっ通しで語学訓練を実施しているところは、エチオピア(2.5週間)・ケニア・PNGの3カ国だが、3週間目あたりから隊員の間には「早く現場に出たい焦りがでる」(ケニア・エチオピア)、「講義が間延びした雰囲気となる」(PNG)などの現象が見られる。モルディブ・ネパールでは語学訓練の第3週目に現地体験旅行の1週間を入れ、気分を転換させその後最後のまとめの1週間を置いている。この旅行を語学訓練の間に入れる方式はリフレッシュ効果があると言える。

4週間のタイプの国、計10カ国の内で、一種類の語学をぶっ通しで訓練を実施しているバングラデシュ・中国の隊員から「期間が長すぎる」と言う感想が寄せられている。同じ4週間のタイプの他の国をみると、マレーシア・シリアでは、午前中を語学学習に充て、午後を現地青年団体との各種行事・野外活動に充てている。また、フィリピンでは、語学訓練期間4週間で2週間毎の前半・後半に分け、その中間に1週間の任地訪問を入れている。これらマレーシア・シリア・フィリピンの訓練プログラムは、プログラム内容に変化を持たせていることが、隊員の気持ちをフレッシュに保たせる効果があるのか、これらの国の隊員からは、「期間が長すぎて、能率が落ちる」という感想は出ていない。また、ブータン・マラウィでは英語と現地語をそれぞれ2週間ずつ訓練している。この場合、マラウィでは「隊員は現地語に意欲的に取り組むが、英語と両方の訓練でどちらの語学にしても、中途半端な印象を受けている様子」が多少なりとはいえ窺える。

これら3タイプの現地語学訓練の現状と効果を比較・検討すると、必ずしも語学訓練期間の長短がその語学訓練の効果に直接結び付いているとは一概に言えない。現地語学訓練の効果は、訓練プログラム・訓練時間・講師の指導技術・教材(テキスト等)・講座内容の適否と不可分の関係にある。また、もう一つ重要な要素として、訓練中の宿泊施設の学習環境が挙げられる。事務所付属の隊員宿泊所を利用する場合は、どうしても隊員は隊員仲間同士の間で日本語で話す誘惑に抗し切れず、結果、講義形式訓練の3週間目あたりから、訓練中の隊員の間には「早く現場に出たい」焦りがでる傾向にある。こうした場合、事務所は隊員に対して語学訓練への熱意を継続させるために、強い動機付けの工夫が必要となる。

(2) 現地訓練中の宿泊施設

現在、現地訓練期間中の宿泊施設として、隊員連絡所、ホームステイ、語学訓練所付属宿泊施設、ホテル等が使われている。そして、その中で、現在殆どの国は、隊員連絡所を現地訓練期間中の宿泊施設として使っている。一方、語学訓練の効果から考えると、ホームステイは、次節で見る通り大変有効な方法と言える。しかしながら、隊員派遣国の中には、治安、その他「ホームステイ先が、隊員慣れして、お客さん扱いして訓練にならない時がある。そして、特に小国の場合、代替のホームステイ先の発掘が困難」等の理由によ

り、現実問題としてホームステイ先を見つけることが難しい国がある。従って、現地訓練期間中の宿泊施設として、ホームステイに固執することはできない。

上のような状況をふまえながら、宿泊施設と語学訓練の効果との関係を分析し、現地語学訓練の環境整備の方法について考えてみたい。

全訓練期間を通じて、隊員連絡所に隊員を宿泊させた場合、隊員は、「先輩隊員や同僚の隊員と、どうしても日本語で話す機会が多くなり」、結果、集中的な語学訓練の目的を遂げることが、非常に困難な状況に陥る場合が少なくない。高橋広尾訓練所長の現地調査報告で報告されているが、通常、新隊員は現地訓練の3週間目あたりから、現地訓練に対する緊張の持続が難しくなってくるようだ。その一種のたるみ状況に対処するため、従来、ホームステイを実施していなかった国が、現地訓練期間中の宿泊施設としてホームステイを、たとえ一週間でも取り入れたり、あるいは、任国体験旅行を取り入れた場合、殆ど全隊員が、冒頭に述べた「ホームステイ効果」が挙げたことを訓練終了後の感想として述べている。

(3) ホームステイの活用方法

ホームステイは、隊員が現地の文化を直接体で学び、さらに語学のプラクティスを通し、コミュニケーションへの自信をつけ、あるいは自分の弱点等に気付く素晴らしい機会である。中流レベルの家庭にホームステイ先を確保することが出来れば、隊員が以後2年間、最も接触する標準的な家庭の様子、人々の生活・考え方を知ることが出来る現地訓練に非常に有効なプログラムである。

ホームステイを実施する場合に、注意を要する点は、「正式な語学訓練」のプログラムと取り合わせた場合に、相乗的効果が現われる。従って、何の事前準備も与えず、隊員をホームステイさせたとすれば、現在までの隊員報告等からの経験に基づくと、約5日間程経つと、一応の身の回りの事、日常生活に慣れてしまい、その後の期間の効果は減じる。隊員は「もう充分と感じる」と次のような報告を寄せている。

ア) 毎日退屈な日々を送りました。スワヒリ語しか話せない家族の中で、私は無口でした。ボディランゲージでなんとかやってみたものの、やっぱり難しく、はっきりした意思表示がお互いできずにいて、気まずい思いでした。

着いた次の日から帰る日を指折り数えてました。確かに、真の民衆というものの生活を知るには、もってこいのことでしたがあまりにも退屈過ぎました。一日中ぼーっとしている日もめずらしくありませんでした。

イ) ところでホームステイ先での感想は、とにかく仕事の手伝いなど一切なく暇な時間が多く、時間をどう使うか苦勞しました。ほとんど本を読むか、手紙を書くか、トレーニングをしているか、最初は近所の高校生と一緒に家の周辺を色々見学しましたが、

2, 3日で全部見てしまいその後はやりませんでした。

従って、ホームステイを実施する場合、次の点の工夫が必要である。

- ① 日中、「正式な語学訓練」を行ない、夜、ホームステイさせる。
- ② 現地訓練期間中の最初の2週間程度は「正式な語学訓練」を実施した後に、ホームステイを実施する。
- ③ 異文化適応の過程の一つの「ショック療法」としてホームステイを現地訓練の冒頭に実施する場合は、現地訓練全体のプログラムをはっきり隊員に示し、ホームステイの目的をよく理解させておく。

もし、ホームステイが不可能な場合は、現地の中流レベルの家庭を日中に訪問し、家庭生活を体験させる「ホーム・ビジット」を企画すれば、ある程度ホームステイと同様の効果を期待することができる。

(4) モデル訓練プログラム

現地訓練の総期間は、隊員の総派遣期間（2年間）の内に位置付けているので、ある程度、現地訓練期間の制約を設ける必要がある。現在、慣習的に1カ月間（約4週間）を標準としている。

本調査の結果、効果的な現地訓練プログラムの基本型として、次の図に示すA型、B型、C型の三例を挙げる事が出来る。

A型（2週間の講義形式語学訓練タイプ）

週	1	2	3	4
	オリエンテーション	語学訓練 (2週間)	体験旅行あるいはホームステイ	オリエンテーション

B型（3週間の講義形式語学訓練タイプ）

週	1	2	3	4
	語学訓練		体験旅行あるいはホームステイ	語学訓練 まとめ

C型（4週間の講義形式語学訓練タイプ）

週	1	2	3	4
午前	語学訓練			
午後	異文化学習、青年団体との交流他			

(解説)

A型は、午前および午後を通じ、一日中(8AM～4あるいは5PM)講義形式の語学訓練を実施する型で、語学訓練を2週間終えた後、翌週1週間、体験旅行等(国内武者修行・任地訪問・ホームステイ)を通じて語学のブラッシュアップを狙う。同時に、異文化社会を積極的に体験させることによって、現地の生活に自発的に参加する意欲を養うことも狙う。

B型は、A型にさらに1週間の語学訓練を課し、計3週間の語学訓練を実施する型である。前半2週間の集中的語学訓練で、隊員の語学訓練への積極的な参加能力は、限界に達するので、プログラムを1週間、切り替えて、隊員をリフレッシュさせ、後半1週間の語学のまとめ訓練を課す。この型では、3週間めの体験旅行等が、隊員に「自分の語学力の弱さ」を実感させ、その結果、隊員が第4週めの語学訓練に前半以上に積極的に参加する動機を得ることを狙いとする。

C型は、集中的語学訓練を午前中(8AM～12PM)に実施し、午後は、気分転換を図り、他のプログラム(異文化学習・青年団体との交流)を組み入れる。

(5) 派遣前訓練と現地訓練との関係について

隊員の現地訓練の感想及び要望では、派遣前訓練と現地訓練との継続性の欠如を問題点として挙げる声が強い。調査作業部会において現地調査結果をも踏まえ、その原因・理由等を調査したところ、問題の主原因は、協力隊側と現地語学訓練担当の講師陣の間の協力隊事業の理解や派遣前訓練の内容の理解度の差、さらに現地訓練の狙いについてのコミュニケーション・ギャップにあると言える。従って、派遣前訓練と現地訓練との関係の緊密化のためには、本邦サイド及び現地サイド双方からのアプローチが必要であると考えられる。

まず、本邦サイドで実行可能な事として、平成ノ2次隊より、現地事務所が派遣前訓練と関係をもたせた講義計画を立てることができるよう、広尾・駒ヶ根両訓練所より、派遣前訓練の内容(テキスト・ティーチングプラン)と隊員の派遣前訓練の成績を現地事務所に現地訓練開始前必着として送付することとした。これらの資料を現地語学訓練の担当講師に利用してもらい、授業内容や指導方法について、派遣前訓練の内容を踏まえた現地訓練が実施される事が期待される。

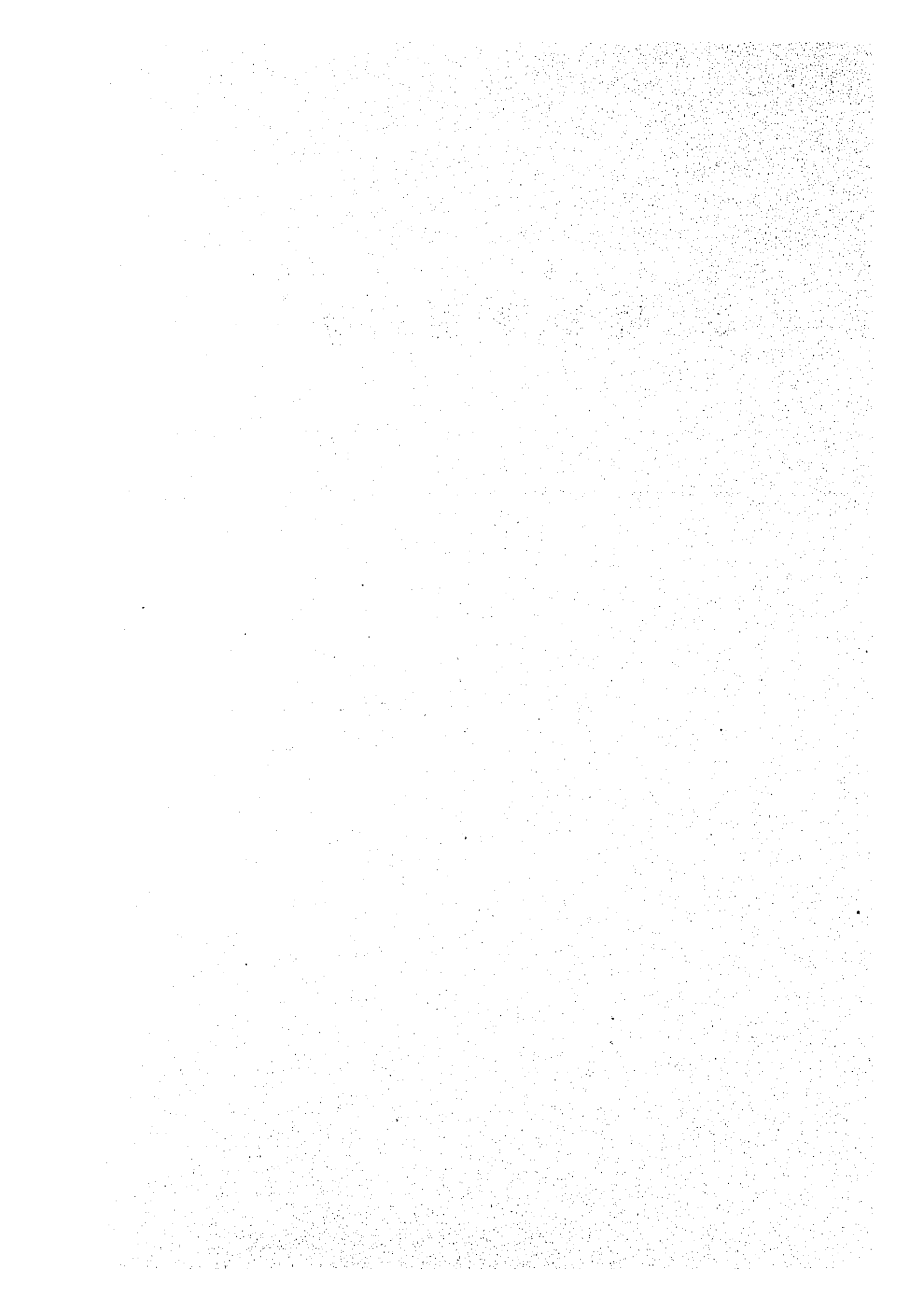
現地サイドにおいては、現地訓練を担当する現地の講師陣と可能な限り頻繁に話し合う機会を持ち、常に協力隊派遣の基本理念や協力隊の派遣前訓練の内容等について、先方の理解を十分に深めておく必要があるだろう。

(6) 提 言

将来、より効果的な現地訓練を確立してゆく為に、今後さらに次のような事項について、調査・検討を行なうことが望まれる。

- ① 現地訓練の事後評価及び、その本邦の派遣前訓練及び現地訓練へのフィードバックの方法の確立。
- ② 派遣前訓練で学習する言語と現地訓練で学習する言語及び、隊員活動で使用する言語との関係について、現状の整理。両訓練間において同じ言語を学習する場合と異なる言語を学習する場合の、それぞれの場合における適正な現地語学訓練のプログラムの検討。
- ③ モデル訓練プログラムをさらに精密に仕上げ、それをベースにした現地訓練実施要綱の作成。
- ④ 隊員の任期の中間時点での語学訓練（約1～2週間程度）の実現へ向けての検討。
- ⑤ 現地訓練用の独自の研修施設・宿泊施設の確保についての検討。
現在の隊員連絡所の設置目的は、(1) 隊員の集会・保養・相互研鑽の場所、(2) 地方勤務隊員が首都へ出たり、新任隊員が着任した場合の一時的簡易宿泊所としての機能を果たすことである（隊員ハンドブック参照）。従って、語学学習の場としては、現在の隊員連絡所は必ずしも適当な環境とは言えない国が多い。そういう国については、既存の施設（隊員連絡所）の改善を含めて、現地訓練用の独立の研修施設・宿泊施設を確保する方向で検討を進めて行く必要がある。
- ⑥ 本調査結果を踏まえて、確保すべき予算面の検討。

3. 現地調査結果



3. 現地調査結果

(第1次現地調査)

1. タンザニア・ケニア・ザンビア
調査期間：平成元年8月7日～8月25日
調査者：広尾訓練所長 高橋成雄

2. ネパール
調査期間：平成元年8月22日～9月1日
調査者：駒ヶ根訓練所長 渡部正剛

3. P. N. G. ・ソロモン諸島
調査期間：平成元年8月16日～8月26日
調査者：広尾訓練所長代理 大塚保広

(第2次現地調査)

1. インドネシア・西サモア・フィジー・フィリピン
調査期間：平成元年11月26日～12月16日
調査者：派遣第二課長代理 辻岡政男

2. バングラデシュ・マレーシア
調査期間：平成元年12月10日～12月20日
調査者：駒ヶ根訓練所 大塚正明

現地訓練強化拡充計画調査に係る現地調査報告

1. 出張先 : タンザニア, ケニア, ザンビア

出張者 : 広尾訓練所長 高橋成雄

期間 : 平成元年8月7日 ~ 8月25日

出張報告書

(1) はじめに

タンザニア、ケニア、ザンビア3カ国の事務所が実施している現地訓練の内容と期間については、概ね共通し、順次拡充改善されている。しかし、カリキュラムの内容と全体の運営の面での検討、改善を要するもの、隊員（受講生）の学習環境の整備の問題など、解決すべき諸問題がある。現地で語学訓練をする方が、即、効果が上がるという考えに立っているが、それには必要な条件整備が必要であることは当然のことであるが、この当然の問題についての注意と配慮の不足を感じた。もう一つの側面は、隊員（受講生）の精神的な動き、任国に着いた隊員は出来るだけ早い機会に配属先で仕事にかかりたい（行きたい）という焦りに似た心の動きが相当潜在的に強いことを考慮に入れる必要がある。こうした幾つかの問題を考えてみると、当面、現地語学訓練に係わる諸条件整備に努める必要がある。また、将来の語学訓練の再検討の上でも考慮すべき点である。

(2) 隊員の言語力に係わる問題について

各事務所の報告では、隊員の語学力不足によって、どうにもならないとされる問題は1～2を除いて概ね無いとしている。特にタンザニアの場合、初期3カ月位言語力不足による苦労はあるが特に問題ないとしている。英語を中心としているケニア、ザンビアでも概ね問題なしとしているが、語学訓練終了時の講師のコメントによれば不安が残る。言語力不足で問題として挙げられた例は、職訓関係の隊員であった。一般的に、現地適応するまでに、3カ月～半年かかるのが普通とされる。この適応するまでの過程で、生活上、業務上、具体的にどういう問題が起こり、どう対応しているのか正確な情報が少ないので、もう少し正確に実態を把握してみる必要がある。この結果を本邦訓練の運営に反響し得れば、更に成果を上げ得ると思われる。その他、一般的には、隊員の言語力不足と他の要因、本人の性格、資質と相互に関連して問題が発生することが多いことを指摘している。こうした事柄から、語学力アップと同時に隊員の資質について、選考、訓練で指導、チェックが必要である。

また、現地事務所が訓練中に指導を必要として要望された要点：協調性、自己管理能力、安全意識の他、日本人としての常識、組織の一員として行動する。

この裏返しで、ボランティア＝自由、勝手に振舞う（行動する）のが当然とする風潮や事務局は隊員の支援者の立場だからなんでも事務所がやってくれるものという誤解が見られるので注意して指導願いたいとの要望が注意を引いた。

(3) 現地訓練について

視察した3カ国の現地訓練は各事務所の努力で徐々に改善されつつある。期間は、ケニアの40日間、タンザニア、ザンビア共に1カ月。内容は、現地事務所による、①オリエンテーション諸手続き、②現地語学訓練(研修)、③現地訓練(ホームステイ、小旅行)の3部構成で共通している。

◎現地語学訓練……………期間は2週間、実質授業日数10日が標準的。ケニアが13日間で、タンザニア、ザンビアより長い。その長い分はスワヒリ語の学習に充てられている。授業時間数では、40時間前後で、タンザニアだけが1日2時間20時間の授業となっているので、もう少し増す等の工夫が望まれる。

○授業の期間、時間数について

将来は別として、当面、事務所の事情、学習施設等を考慮してみると、現行2週間を標準にして各国の事情に応じ漸増する方向で考えるということになるだろう。期間の問題もさることながら、語学訓練のカリキュラムと運営、指導の充実への努力が必要であろう。

○実施の方法

現地事務所が講師を委嘱実施(タンザニア、ザンビア)と語学教育(研修)所に委託(ケニア)の2つのタイプになっている。

授業内容は、概ね、本邦(広尾、駒ヶ根)訓練は基礎学習が中心。現地訓練では実用的、隊員の生活、業務に関わる諸問題を素材としていることは、極めて妥当であると考えられるが、運営、講師、指導方法、テキスト等、充実が求められる。

○視察3カ国に見られる共通の問題

① 宿泊の問題。各国とも隊員連絡所(ドミトリー)に宿泊。それぞれ車で研修先に通学(タンザニアの場合はドミトリーの会議室)している。このパターンは、日本での訓練の延長、隊員同士は日本語中心の生活となるだけでなく、勉強に必要な施設も不十分。こうしたことが、ケニアの例に見られる不満が語られる遠因となっているようである。現地事務所側も、この点承知し、改善に努めているものの適当な施設、トランスポート、治安上の問題もあり苦慮している。

② 隊員の学習意欲。一般的に高い。しかし、隊員の気持ちを直に聞いてみると、任国に着任して1カ月も拘束を受けることについては、心持ちの上で焦りの様なものがある。現地訓練の必要性を認めながらも、一日も早く仕事にかかりたい気持ちが強い。したがって、言語訓練についての内容や、やり方について否定的な反応がおり得る。その裏には、言語力の不安もあるが、行けばなんとかなるという安易さ

も伺える。

(4) 現地訓練の拡充と本邦訓練の連携について

語学訓練を含め、訓練の見直しを考える場合の原点は隊員の派遣国であり配属先である。派遣された隊員が任国で生活し、期待されている任務を果たし、開発に貢献するという隊員活動に必要なとされる資質や力があるかを選別し、必要な事柄を身に付けるために訓練を行なう。この考え方に従って改めて現地で隊員活動上問題になっていることをもっと具体的に把握する必要がある。こうした事情を踏まえ、訓練所として早い機会に実態調査を実施したいと考える。語学訓練では、かつて昭和52年頃隊員の語学学習に関する答申を得て、サバイバルレベルの設定と指導内容等、この答申に準拠して現在に至っているが、最近、入所時の候補生のレベル設定、訓練期間の短縮、現地語学訓練の実施、拡充という新しい変化に対応するために、現地語学訓練を含む結合した語学訓練の内容等、再構築が必要である。

○当面の措置

情報の提供が必要である。今回、教科書リスト、E. P. テスト関係、ファイナルテスト（各レベルごと）等、事務所を通じそれぞれ語学指導担当関係者に配布した。

今後も継続的に情報の提供を続けると共に、本邦語学講師または専門家による具体的な教科内容の指導を行なう。また、現地語学講師を本邦訓練講師として1～2年経験する機会を考えてみるのも一案である。いずれ将来としては、第3国による訓練を実施することを念頭に置きつつ、当面現地訓練の拡充と本邦訓練の連携を強化する。このために専任の担当が置かれることが望まれる。

1. タンザニア

(1) 隊員の言語（スワヒリ語について）

タンザニア事務所の説明および関係者の話を総合すると、同国における隊員の語学力不足からどうしようもないとされる問題は概ね発生していないと考えてよいようである。勿論、着任初期では業務上の語学力不足はいなめない事実であり、これを克服するためにそれぞれ苦勞しているが、その期間はおおよそ3カ月程度のようなものである。ザンジバル配属隊員の数名は自費でスワヒリ語学校に1カ月通学して勉強している。この隊員によれば、同学校入学時のテストの結果、上・中・下のクラスの内中級と判定されたと報告を聞いた。ちなみに、同隊員の広尾訓練所の成績が全体の中級であったことは、広尾訓練終了隊員のスワヒリ語の実力を示すものとして参考になろう。また、配属先によって同時に英語力を

求められることもある。この場合、各自隊員の努力によることとなる。

(2) 現地訓練について

同事務所では、現地訓練実施に関し、基本方針を明示している。このように、実施の狙いを明確にする意味で、他の参考としたい。

内容は、① オリエンテーション、② 語学研修旅行、③ 語学訓練の3部から構成され、全体の期間1カ月の内2週間の語学研修旅行、そして2週間（実質10日間）の語学訓練が実施されている。この語学訓練は、昭和63年度第3次隊より始められ、今回2回目である。

○語学訓練

内容は日常生活上起こり得る諸問題を中心に組まれている。講師は日本人でダルエスサラーム大学に6年間留学している木村先生（女性）。毎日、午後2時間の授業で教室は隊員ドミトリーの会議室。

○授業参観と感想

8月9日 午後2:00～4:00

前日講師が出した宿題を隊員が発表。それに基づく実践的な会話を学ぶ。当日の宿題は、体の各箇所をスワヒリ語で調べる。これを黒板に書かれた体の部分に隊員がスワヒリ語で記入する。講師がこれを確認した後、講師が医者で隊員が患者になって自分の病気や症状を医者に訴え説明する。

イ) テーマは、隊員が必ず直前すると想定される問題だけに、授業を受ける側も必要性を感じていると考えられ、実用的で適当と思われる。一方、1日2時間の授業に講師の都合もあもうと思うが、もう一つ検討が欲しいところである。

ロ) 隊員13名にたいし、講師1人では人数が多すぎて成果が上がらないのではないか。特に、会話になるとどうしても小グループが望ましい。

ハ) 宿泊所と教室が一緒というのは便利であるが、宿泊所では日本語を使うことになるので検討を要する。

木村講師も、大学の勉強の都合もあり来年までとの事情にあるようである。いずれにしても、木村講師を軸に現地人講師を補充する等によって、小グループ制にする必要がある。研修室が宿泊所と一緒という、広尾の延長の所で、どうも環境として望ましくない。また、隊員の中には、広尾でタンザニア人の講師に学び、現地では日本人講師というのはどうかとの声も聞かれた。もう一つの点は、隊員の気持ち。これは、視察3カ国に共通する問題である。それは、現地訓練に1カ月も拘束を受けているので、1日も早く任地に行きたいという気持ちが極めて強いことを考慮すべきである。

以上の諸問題については、タンザニア事務所も十分承知している。今後、改善を図るた

め、同国のスワヒリ語研修機関を直接調査し、その選定を急いでいる。

授業時間数の検討を必要とするが、期間2週間は将来は別として、当分事務所の事情その他を考えると一応の限度と考えられる。なお、今回、広尾訓練所から訓練所使用の資料、テスト用紙等を提供。今後とも情報の提供が必要である。木村講師から、訓練中もう少し語彙を増して欲しいとの注文があった。

(3) 現地語学研修機関について

タンザニア事務所では、いくつかの候補を挙げ検討しているが、今回次の2カ所を訪問した。

① ザンジバル

The Institute of Kiswahili and Foreign Language

ザンジバル教育省所管、隊員の他、他の一般日本人の受講者もある。実績等を見ると少人数の受け入れをしている。JOCVが使用する場合、一番難しいのは宿泊設備が併設されていない点にある。

② ダルエスサラーム

サルベーション・アミー(KIU)

Kiswahili Language and Cross culture Service

かつて、JOCVがこの施設を使用したことがあるとの説明あり。研修所としては、3カ所内の一つで、ピースコーをはじめイギリス、ドイツ、スイス等各国ボランティアのスワヒリ語の研修を実施している。ダルエスサラーム郊外で敷地も広く、宿舎、校舎、食堂が設置されている。説明によれば、教師陣もしっかりしている由で、委託の可能性も高いように思われた。

各国ボランティアが実施しているスワヒリ語の研修期間は概ね2週間で、1年後に約1週間のブラッシュアップを行なうのも参考になろう。タンザニア事務所の判断に任される問題であるが、他機関も併せ調査の上、委託研修の方向で取纏めることが望ましいと思う。

(4) タンザニア事務所から(主に次長との打ち合わせから)

- ① 目下語学力の不足による隊員の問題は無いが、むしろ隊員の資質に依ることの方が多
いので次の点に留意の上、指導願いたい。
 - ・自己管理、自分の考えで行動する尺度。
 - ・協調性、配属先、隊員間の人間関係。
 - ・安全にたいする心構え、特に交通事故防止のため。
 - ・その他、ケニアでも日本人としての常識、組織の一員として行動すること。中には、

ボランティアだから自由勝手に行動する様な風潮がある。また、事務局は隊員の支援者、何でもやってくれるという誤解が見られるので、指導上注意して欲しい等の要請があった。

- ② 同事務所の運営上、経協関係業務がパンク状態にある。
- ③ 戸井田事務所長

JOCVで、現地語主義を政策とするのは大変良いことであるが、帰国後の活用についてもっと考えるべきとの問題提起あり。この問題は古くて新しい問題である。日本社会ではその機会は少ないが、JOCVではシニア試験の対象としているが、例えばJICA職員(中途採用)の採用時の語学試験にも加える、あるいは、地域専門家等でまず家元から活用、登用の道を開いたらどうか等の意見交換があったので参考までに附記した。

2. ケ ニ ア

一般的に着任初期に見られる語学力による隊員の苦労は避け難く、特に教室型隊員の授業に支障が起こる等の問題が1～2ある。他はほとんどある期間を経て、それぞれハードルを越えているので、目下の所、語学力不足でどうにもならない問題は無いとの説明であった。問題が生じている事例は、語学力の不足や、本人の性格等、他の要因と連動している場合が多いことが指摘されているが各国共通していることである。

この初期における隊員の生活、あるいは業務に具体的にどうという問題があり、それをどう越えたのかの実態が、もう一つはっきりしないので、いずれこの辺の実態を正確に把握することによって、派遣前訓練と現地訓練の進め方に反映出来るのではないかと思われる。

(1) 現地訓練について

全体の期間は40日。内容は、①オリエンテーション、各種手続き等、②語学研修13日間実施、③現地訓練11日間。語学研修先は、Nairobi Cultural Institute (ナイロビ市内で隊員はドミトリーに宿泊し、学校まで毎日JICA事務所が車で送迎している)。

○研修日程と内容について

すでに隊員は語学研修を終え、ホームステイを主体とした現地訓練に入っていたので直接授業を見る機会はなかった。語学研修の期間は、全体で17日間、この中に準備日、土曜日、日曜日を除く実質研修日数が13日間で、タンザニア、ザンビアの実質10日間より3日間長い。1日の授業時間は1時間30分の授業3回で、計4時間30分となっている。授業内容は、前半、日常生活に必要な事柄が中心、後半はケニアの文化、風俗、ボラン

ティアとしての責務等で構成され、討議あるいは社会見学等がグループごとに行なわれている。最後の4日間、スワヒリ語の学習が組まれているのが特長。

イ) 英語 9日間＝約40時間

ロ) スワヒリ語 4日間＝18時間

なお、理数科教師は別の内容によって実施。グループ分けはテストによる。

(2) 語学研修所訪問 (Nairobi Cultural Institute)

佐藤 C. C. の案内で同研修所を訪問、施設を見学。研修所はナイロビ市であるが、郊外という感じ。説明によれば、一般の住宅を利用したので、全体として大きい建物ではない。教室として使える部屋も、3～4。いわゆる研修所として見るともう一つの違い。

同研修所、N. C. I. の責任者、Joseph Amisi (Director) を表敬。施設案内の後、JOCV 隊員の語学研修について説明があった。要点は以下のとおり。

同氏によれば、授業の内容を出来るだけプラクティカルなもの、具体的なシュミレーションを想定し、小グループで行なうとのこと。また、授業は教室の他に一般社会の学校、新聞社等の見学を通じ、研修効果を上げる努力をしている。生徒である隊員の語学力の差が大きく、毎回それが変わること、全体としてボキャブラリーが不足している。教師隊員の場合、教壇に立つ場合、語学力不足の点が気になる。スワヒリ語を後半に入れているが、隊員の上達が極めて早く、驚いている。

広尾訓練所に望むこと。

情報が全く無いので、経験上、①ボキャブラリーを増すこと、②会話力をもう少しつけること、③映画等、視聴覚的手法をもっと取り入れたらどうか等の意見が述べられた。

情報の提供について

確かに従来、訓練所が作成した個人評定表のコピーが事務所に送られている。しかし、この評定表に記入される言語の記録も情報として使い難いので、今回、①各レベルごとの最終テスト、② E. P. テスト (English Placement Test)、③使用教科書リスト等を持参したので参考にしよう、また、どんな情報を必要とするか連絡しよう要請。

感想

やゝ施設が気になるが N C I 側のカリキュラム、運営に関し、説明を聞く限りでは関係者の熱意もあり、内容も基本的に当分この内容で良いのではないかの印象であった。しかし、後述するように隊員側の否定的な同研修にたいする反応に、改めて現地語学訓練の難しいことを痛感した。

(3) 隊員との現地語学訓練についての懇談（佐藤 C. C. 同席，8名の隊員が出席）

先ず，菅原隊員（自動車整備，63／3）が，現場型で地方に配属される場合，現地語学訓練は最初からスワヒリ語を勉強した方が良いとの発言。続いて，他の隊員から現地語学訓練の成果はあまり上がっていない。むしろ，この期間，広尾で勉強した方が良い。それぞれ任国で勉強する方が言葉が上達するという考え方に誤解があるとする意見が全員から述べられた。全く予期しなかった反応にいささか戸惑うことになったが，改めて現地語学訓練の必要性について説明。主な意見は以下のとおり。

- ① 講師について，日本人に教えた経験が無く，英語で教える（資格？）ことのできる人材が不足している。
- ② カリキュラムに応じたテキストが無く，指導法が確立されていない。（文法を英語でやられうんざりした）
- ③ ドミトリーでは勉強できない。やるならもっとしっかりした体制と条件整備を望む。

感想と意見

- ① 集まった8人の反応が他の隊員の意見を反映しているのか，もう一つ確認の要があると思う。
- ② NCI側のカリキュラム，運営の方針を聞く限り，基本的な問題があると考えにくいですが，実際の授業等の面で十分活かされていないのではないかと。こうした反応を踏まえ，もう一步突っ込んだ調査と分析の上事務所の対応を望みたい。
- ③ スワヒリ語の取り扱いは，ケニア事務所の判断に任すべき課題であるが，必要に応じてスワヒリ語コースを採用しても良いのではないだろうか。
- ④ ドミトリーの問題は，各国共通の課題である。ホームステイ等，その可能性も検討を要請したい。

ケニア隊員との意見交換を通じ，考慮すべき点

- ① 任国で語学訓練を行えば成果が上がるという考え方は正しいが，当然のことであるが，それにふさわしい環境整備（条件）が必要であり，特に将来長期実施を考える場合に十分検討しなければならない課題の一つである。
- ② もう一つの側面，訓練を受ける隊員の心の動きに注意が必要である。授業内容とも関連すると思われるが，本邦訓練を終えた隊員が，任国に到着してみるとできるだけ早い機会にそれぞれの配属先，任地に行き，仕事にかかりたいという気持ちが相当強く働いている。したがって，1カ月も無理に拘束を受けているとする潜在意識がある。このことは，タンザニアの新隊員ももらしている。こうした，はやる心と，もう一つは行けばなんとかなるという，安易な考え方も感じられるので，この点も考慮に入れて現地訓練を計画，運営する必要があるだろう。

ケニア事務所の要請

現地語学訓練については、積極的に実施しているが、さらに今後、本格的に実施することになれば、人的補強を考えて欲しい旨、要請があった。

3. ザンビア

(1) 隊員の語学上の問題点について

同国事務所の説明では、他の2カ国と同様、語学上どうにもならない隊員は目下無い旨、説明あり。ザンビア滞在中、視察先で語学力について話に出たのだが、ルサカ市内エブリフォーン・カレッジで配属初期に語学力のハンディがあり、3～4カ月を要すると語っている。ザンビア大学獣医学部の隊員は、日本人専門家がいるという条件が、仕事だけでなく、言葉の面でも入り易い環境であるが、会議になるとついていけないのが実情の様である。地方隊員の場合、配属先では隊員の活動も含め、特に問題ないとしている。しかし、一方、現地語学訓練の各隊員に関する講師の評価を見る限り、配属先で語学力不足による諸問題が起り得ることを示唆しているようである。

(2) 現地語学訓練について

ザンビアにおける現地訓練は、他の2カ国と同様、3部構成で実施されている。

現地訓練（地方の村落にホームステイ） 9日間

語学訓練 10日間（1日4時間授業）

現地語学研修（国によって訓練、研修との用語が不統一、その国事務所使用語をそのままとした）

授業内容：授業内容はタンザニア、ケニアと概ね同じプラクティカルなものとなっているが、強いて特長として挙げるなら、生活上必要なテーマの他にレポートの書き方等隊員の業務上必要な点に絞っている点で、参考にして良いと思う。

研修場所：ザンビア大学教育学部

講師：ザンビア大学教育学部講師 3名

語学講師との懇談

大芝 C C 同席、出席講師 Dr.Chisanga（31才、女性、JOCV 語学指導4回）、Mr.J.Luangala（40才、男性、JOCV 語学指導2回）、それぞれ感じの良い先生であった。特に大きな問題の指摘は無かったが、

- ① 各隊次によってレベルの差が大きい。
- ② 平成元年1次隊は全体としてよかった。
- ③ 隊員の学習意欲は高いが、中には指示に従わない隊員もいる。
- ④ 隊員をとおして日本について学ぶ機会となるので、講師としても極めて有意義である。
- ⑤ 今まで、隊員の語学学習に関する情報が無かったので、今回の資料提供は極めて有難いので今後とも続けて情報提供を求めたい等の感想が述べられた。

後述のように、ザンビアの場合も、研修中、ザンビア大学関係者で隊員のホームステイを引き受けられるか、その可能性について問題提起。これに対し、良いアイデア、可能性はあると思うとの回答を得たので今後具体的に協議することになる。

(3) 現地語学訓練に対する隊員の反応

隊員を集めて、意見を聞く機会がなかったので、ドミトリーで新旧隊員や配属先の感想を取纏めると以下のようである。

- ① 授業内容が実践的で、生活上、また業務上直接必要に迫られる問題が中心だったので有意義であった。
- ② 教材が難しかったとする者若干あり。グループによる反応の違いが見られる。
- ③ 期間は、現在の2週間（10日間）が丁度よい。（基本的には、早く配属先に行きたい。そこで実践的に勉強したいとの気持ちがある。）
- ④ 半年後に、改めて語学ブラッシュアップの機会を設けたらどうかの意見があった。

(4) 感想と所見

- ① 細かく見れば、いくつか問題もあろうが、現行の語学研修は宿泊所の問題を除いて概隊員の反応は良い。それなりの成果を上げている。要因は上記の授業内容によるところが大きいと考えられる。また、一方で、語学力の低いグループの中には、テキストを読むのに辞書を引くのに手一杯という一面もあるので、こうした点をどう取り扱うか、運営と指導上のテーマである。
- ② 語学訓練の期間について
隊員の反応と、精神的な動き、また、受け入れ先の事情を考えると、現在のところ2週間が限度かな、というのが素直な印象である。事務所側も、将来拡充するとすればスタッフの補強を求めている。
- ③ すでに他の2カ国で見たようにザンビアの場合も語学訓練期間の宿泊をどうするのかの問題がある。事務所側は、ホームステイの実現に向け検討を進めているが、これも市

内の治安、トランスポートをどうするかの問題も残されている。ザンビアのドミトリーの場合、他の2国に比べ部屋数が少なく、極端に狭い。新隊員の宿泊部屋を覗いて見ると、各隊員の荷物と届いたアナカンの中で、身動きがとれず長期滞在は無理。その上、机、椅子もない。学習環境は劣悪。加えて、隊員の数が増えていることもあり、通常の場合（訓練のない時）でも狭いという印象で、ザンビア事務所ではドミトリーの移転を強く希望している。その必要を強く感じた。

④ 現地訓練（ホームステイ）

地方隊員に依頼し、村落の家庭に受け入れしてもらっている。隊員は、いろいろな面でショックも大きく、ザンビアの生活、風俗、習慣を学ぶ点では成果を上げている。ホームステイ先で使う言葉と配属先で使う言葉が違くと、ホームステイ先で地元の言葉を覚えようとする意欲が薄れるとの意見が聞かれたが、この点は配慮していい点であろう。

⑤ 事務所では語学上の問題はないとしているが、ケニア同様、語学訓練の後の評価を見る限り、必ずしも安心とは言い難いようである。

現地訓練強化拡充計画調査に係る現地調査報告

2. 出張先 : ネ パ ー ル

出張者 : 駒ヶ根訓練所長 渡 部 正 剛

期 間 : 平成元年 8 月 22 日 ~ 9 月 1 日

平成元年8月22日から9月1日にかけて、ネパールに出張した。目的は、将来の現地訓練のあり方を検討するのに先立って、現状を把握することであった。

この期間は当年度第1次隊13名が現地に到着し、オリエンテーションも兼ねて現地語学訓練を実施中で、いわば「仕上げ」の時期であった。ネパール事務所では、凡そ次のようなスケジュールに基づき、着後、赴任前訓練を実施していた。

第1週目	オリエンテーション
第2週目	ホームステイ（於ゴダワリ）
第3週目	語学訓練
第4週目	フィールド・トリップ
第5週目	語学訓練
第6週目	省庁表敬、赴任の準備
第7週目	赴任開始

つまり、総期間約50日中、語学訓練に充てる期間は4週間（ホームステイ1週間、教室での学習3週間）である。従来は、ゴダワリに約1カ月ホームステイさせ、そこで語学学習を行っていた訳であるが、受け入れ家庭の衛生状態が極めて悪く（特に飲み水）、病人が続出し、語学の研修どころではなかったとの苦い経験から、今回のような日程に組み直したとのことである。ゴダワリは、カトマンドゥから約50km離れた村で、13軒の民家に1人ずつ受け入れてもらい、実生活を通じネパール人の一般家庭の暮らしぶりを理解し、語学不足を悟らせるのが主たる狙いである。ここを訪ね、民家の中を見てみたが、屋根の低い小さな2階屋で床はすべて土間。隊員の寝室は、良い部屋の提供を受けている様であったが、家畜と同居、トイレが無い、飲み水が無い等の条件を見ると、いきなり長期間の滞在は病人が発生してもうなずけるような気がした。

教室での語学学習は、第3週と第5週にセットされているが、第2・第4週の実生活体験を通じ、自分の語学不足を自覚させ、それを踏まえ教室での勉強に活況を促そうという狙いである。新隊員はこの貴重な体験を通じ、新たな心構えもできて、語学学習の1つのバネになっているのも確かなようで、現地事務所の配慮がうかがえる。

教室での学習は、事務所敷地内別棟の図書室を教室とし、2クラスを編成していた。午前9時～12時、午後2時～5時と3人のネパール人講師が担当していた。いずれの講師も短期間ではあるが、日本での滞在経験もあって、日常生活に必要な日本語の理解はあるものの、初めてということもあり若干不慣れな点も散見された。

学習内容は、駒ヶ根訓練所（K T I）で使用したテキストを利用し、復習を中心として語彙のより幅広い活用と応用、手紙文、公用文の書き方等具体例を教材としていた。物不足の折、道路を隔てたホテルに投宿しての学習ではあるが、積極的な発言、理解力もあっていい

雰囲気であった。一般的に、任国に到着してしまうと気力が衰え怠惰な方向に傾斜していくものだが、特にそれもなく、K T Iでの基礎がしっかり出来ているが故の自信とも思え、基礎学習の大事さを痛感した。

かかる現地訓練に接し、考慮すべき課題が2、3あるので以下に列記し、ご検討を得たい。

- (1) 現地訓練が長期になればなる程、隊員の自己管理に限界が生じてくる。意識を高めた状態で、長期間維持させるためにどんな手法を考案しなければならないかの研究。
- (2) 派遣前訓練の延長線上で語学学習を行なうとすれば、当然ながらK T I講師と同等以上の講師の雇用が必要となる。発掘には相当の時間と費用が求められる。かかる状態に鑑み、事務所長から1つの提案があった。つまり訓練所語学講師を訓練終了と同時に現地に派遣してこれに充てるか、現地側講師と定期的な交換をし、実効を上げられないかという物である。実行にあたっては、困難が予想されるが、一考に値しよう。
- (3) 現状のカリキュラムを見る限り、1日の時間数が長すぎる印象がある。効果的な学習について研究が必要である。カリキュラム、内容にまで立ち入って語学学習の骨子を組み立てる必要がある。言葉を換えれば、現地訓練をどのように位置付けるかにかかっている。
- (4) 現地事務所が人的不足から隊員に対する支援が不十分な環境もあって、かかるプログラムを新規に制度化するならば、訓練専従要員の配置が不可欠である。

すでに活動を開始している幾人かの隊員の職場を訪ね、本人およびネパール側関係者から隊員の活動ぶりや併せ語学の進捗状況を聴取したが、この件は今後の出張といささか目的を異にするので省略することと致したい。

現地訓練強化拡充計画調査に係る現地調査報告

3. 出張先：P. N. G.，ソロモン諸島

出張者：広尾訓練所所長代理 大峯 保 広

期 間：平成元年 8 月 16 日～8 月 26 日

1. P. N. G.

(1) ホームステイ方式で実施できないか

ポートモレスビー市内では、現地語学訓練に適した場所がなく、現在はワウの生態研究所で3週間語学訓練が実施されている。全員が同一宿泊所で寝泊りしていることから、宿舎内で日本語が話され、せっかくの語学訓練が効果十分とは言えないため、ワウの研究所近辺でのホームステイ実施の可能性を事務所側と話し合ったが、事務所側はワウ地域の住民の生活環境が悪く（電気がない、食事内容が悪い等）、語学の上達にはホームステイは適当でないとの判断をしており、ホームステイより他の方法（住民との交流）を考えたいとしている。

(2) 教材の購入（テキスト、辞書、テープ）

現在は市内の書籍店で買い集め、隊員に配布（支給）しているが、今後隊員の数が多くなれば、不足する可能性もあるとの状況から、今後はメキシコ研修の様に終了した時点で希望者には実費を徴収し、希望をしない者は事務所へ返却させる方向で対応し、事務所には常時15～20セット確保しておくのがベターではないかと思われる。

(3) ピジン語の使用頻度および日常会話をマスターするに必要な時間

現地訓練の内、語学については63/3次隊までは2週間少々であったが、時間が短かったとの考えから、元年度1次隊より3週間（61時間）と設定された。しかし、現行の教科書では、14～15日間で終わってしまい、後半の授業は何となく内容の無い（雑談的）ものになったとの隊員の意見であり、これは反省点として講師側に3週間の設定した指導カリキュラムが確立されていなかった点であり今後はこうしたことの協議が必要であろう。なお、隊員および事務所の意見としてピジン語の日常的会話を覚えるには基本的文法のみで10～14日間位で終わり、他は単語を増すことで実際の場で使用する方が上達が早いとの意見が多かった。また、使用度合いについて、日常生活では殆どピジン語であるが業務上どうしてもピジン語が必要とされるのは40%近くの隊員であり、英語を業務上必要とする隊員が50%いる。また、地方によっては、モツ語、ロロ語を使用する隊員もいる。

(4) ホームステイのみの隊員と語学訓練を取り入れた隊員

63/1次隊までは、ホームステイのみで現地訓練が実施され、63/2次隊よりホームステイを廃止してワウでのピジン語訓練を実施してきたが、やはりピジン語を習った隊員は任国への溶け込みが早く、以前の隊員のように集団的動きが見られなくなったとの事務所の見解がある。但し、一方では広尾での英語と現地でのピジン語の学習により習得語学が

中途半端になっている面もあり、公文書が英語であるところから、この辺を整理する必要があるだろう。

(5) 英語力の弱い隊員のピジン語学習について

現在は、英語によるピジン語の授業が行なわれているが、今までのところ英語が弱くピジン語学習に支障をきたす隊員は派遣されていないので、特に問題は生じていない。また、隊員の間では広尾で英語をしっかりやっておかなければピジン語学習も不十分になるとの意見が多くみられた。

(6) 現地訓練の将来の方向

現地事務所の考えは、現在の訓練方法に設定してまだ1年と経っていないところから、現在の方法で当分実施し、語学力の不足で業務に支障をきたす状態になるようであれば、大洋州の派遣国を取纏めフランス、メキシコ等で実施されているような方法でオーストラリアで実施することも一案ではないかとの意見を持っていた。

(7) 他の援助期間の現地訓練状況

アメリカのP/Cがワウで約2カ月実施しているとの事務所の回答であったが、事務所もその内容や、はっきりした期間についてはおさえていない趣である。また、他のオーストラリア、ニュージーランドの援助機関は現地訓練を実施しておらず、業務についても英語のみで実施しており、隊員間の噂では一部の者を除いて現地語を話すという姿勢は見られないとの意見である。

(8) 経 費

経費については、当国は他の派遣国に比べ高過ぎるのではとの事務局内部の意見であるが、特に事務所の説明ではワウまでの航空費が上乘せとなるため、経費がかさむとのことである。また、一般的に物価が高く、ちなみに1PNGキナ=1.15米ドルとなっている。英語の個人レッスンは1時間10キナとなっている

(9) 講 師

現在までのところ、Mrs. Helen Yamuを中心にお願いしており、Mrs. Yamuが不都合の場合、Mr. Demmy Wele（元中等学校教師）をお願いしているが、将来的に常時確保できるかどうかは不明であり、今後教師の手配が困難となる場合もありうる。

(10) 隊員活動の問題点

現在までのところ、特に問題となっている隊員はいない。それぞれに協力活動を行なっているが、少々積極性に欠ける面がみられる。

2. ソロモン諸島

(1) 現地訓練の現状

ソロモン諸島からの現地訓練強化拡充に関する報告書は、語学（ピジン語）2週間、ホームステイ2週間とのごく簡単なものでありその内容が不明であったが、今回の調査で以下によりその内容が把握できた。

(2) 語学（ピジン語）訓練について

① 教材（テキスト）

テキストは市販されているものに、適当なものがないということから、②に述べる、Mr. Dixon Malo が U S P C への指導経験を生かし、作成中で平成元年2次隊から使用可能である。元年1次隊まではその都度ペーパーを作り配布していた。

② 講師のレベル

現地事務所雇人として契約している、Mr. Dixon Tarny Malo 氏を講師としている。Mr. Dixon は、フィジーの南太平洋大学漁業学科を卒業し、隊員のC/P等をした後、U S P Cのピジン語講師を1年間勤めている。語学の専門家ではないのでその指導技術については疑問であるが、事務所の意見ではJ O C Vの都合に合わせて適任者を確保するのは非常に難しいとのことであった。

③ 時間数

現地訓練の初日をオリエンテーションとし、2日目からピジン語の授業を開始し、2週間、約50時間実施されている。尚、この期間中にJ I C A研修員との懇談会（ピジン語による）が設定されている。

④ 授業の実施場所

J O C V事務所内の会議用机を利用しているが、調整員やスタッフの事務室もあり、また、調整員と打ち合わせに来る先輩隊員等の出入りも頻繁にあり、語学の授業環境としては適当でない感じがする。

⑤ 宿泊場所

事務所1階の隊員用ドミトリ－を利用しているが、先輩隊員と同宿になる場合があり、先輩を積極的に利用して学習しようとする隊員と、その逆の隊員との間では大きな差が

ある。

⑥ 経 費

4週間の現地訓練のうち、前半2週間の語学については直接経費を必要とせず、ホームステイ時の移動の交通費、日当、教材費(?)が支給されているが交通費実費は別としても、日当、教材費の支給についてはP. N. G.に於ても同様であるが、海外手当との関連で整理する必要があり、各国共通の支給基準を設ける必要があろう。

(3) ビジン英語の使用頻度および日常会話をマスターするに必要な時間

63年1次隊よりビジン語を取り入れた現地訓練を実施しているが、ビジン語については約10日間実施されている。ソロモン諸島のビジン語テキストは、P. N. G.ほど整備されたものでなく、現行では10日間位で基礎的なものは終了してしまう状態である。事務所および隊員双方ともビジン語については、10日間程でその後のホームステイ2週間と合わせれば日常会話は十分学べるとの見解である。また、使用頻度については、システムエンジニア、電子計算機の隊員が業務上英語を使用する以外はほとんどビジン語を使用しており、P. N. G.よりはその頻度は高いと思われる。

(4) 英語力の弱い隊員について

現在までのところ、特別に英語力の弱い隊員が派遣されていないので、ビジン語学習についても問題はない。

(5) 現地訓練の将来の方向

現地訓練が現在の語学2週間、ホームステイ2週間となって間もないので、当分の間この方向で続けていきたいと事務所は考えている。ただし、ホームステイ先の選定がだんだん困難(同一地域で何日も行なうと、その地域への慣習等の影響を与えかねないとの懸念から)となっている。もし、現地訓練を語学中心と考えるならば、P. N. G.でも話として出ているように、オーストラリアで大洋州の派遣国をまとめて行なうことも良策であるとの事務所の見解である。

(6) 広尾訓練に対する意見

- ① 協力隊員としての心構えができないままに派遣されてきている(報告、生活態度に問題あり)。
- ② 多額なお金や隊員活動にとって贅沢な物品も多く持ち込んでおり、地域住民に対し悪影響を与えかねない。
- ③ 国際協力、地域開発等について知識が乏しく、①とも関連して何しに來ているのか分

からない隊員が見かけられる。

(7) 他の援助国の現地訓練状況

USPCが1カ月実施している他は、ほとんど現地訓練は実施されていない。

現地訓練強化拡充計画調査に係る現地調査報告

1. 出張先 : インドネシア・西サモア・フィジー・フィリピン

出張者 : 派遣第二課長代理 辻 岡 政 男

期 間 : 平成元年 11 月 26 日 ~ 12 月 16 日

1. インドネシア

(1) パジャジャラン大学の協力隊現地語学訓練担当講師との協議（概要）

① 先方出席者

Prof. Dr. J.S. Badudu

Livain Lubis

Syofyan Zakaria

Wiwi Martalogawa

② 日 時

1989. 11. 28 AM 9:00～10:30

③ 先方に協力隊のインドネシア語の派遣前訓練（於駒ヶ根）の概要を説明し、その後既に現地訓練を経験した隊員の感想・提案等を基に、より効果的な現地訓練を実施する目的の下に先方と意見交換し下記の結論を得た。〈先方への提供資料；JOCV英文事業概要、JOCV派遣前訓練概要（Basic Policy of JOCV Training and Pre-service Training Program 1989）〉

ア) 「パ」大学が現地語学訓練の講義体系（シラバス）を作成する。なお、我が方（辻岡）から先方へ駒ヶ根で使用しているインドネシア語テキスト及び Teaching Plan、新隊員の成績表を手渡した。

イ) 「パ」大学が一般教養講座（歴史・文化・政治他）の講義レジュメ（Hand-out）を作成する。

ウ) 現地語学訓練の冒頭に隊員の語学力を測定する Placement Test を実施し、その結果に基づいて講義を行なう。

エ) 語学の教材の改善を行なう。

例えば、現在まではインドネシア小学生用の国語教科書のコピーが教材の一部として使われていたが、その中には必ずしも隊員が日常生活上の会話で使用しない川表現、Phraze 等があり、それらを省く。そして、より Practical な日常生活、隊員協力活動に結び付いた語学教材を使ってもらう。

オ) 2時間授業の中間に10～15分程の休憩を入れ、授業のリフレッシュを図る。

(2) 他国のボランティアの現地訓練概要

① VSO（英国）

ア) 事業概要

ジャカルタ事務所（本部）スタッフ計7名

（内記：Director 1名、Field Officer 3名（うち1名インドネシア人）、事務職員

3名)

隊員数63名(英語教師が多い, 他技術系)

1) 現地訓練

ジャカルタ, Y I L C (Yogyakarta Indonesian Language Course) にて1982年から実施。(それ以前はガジャマダ大学に現地訓練を依頼, 大学の授業形式の語学訓練を行っていたが, 1982年からY I L Cでより実用的訓練を狙う。)

(a) 訓練目標

コミュニケーション能力の向上

(b) 訓練期間

英語教師隊員 6週間

その他職種隊員 10週間

(* その他職種隊員 8週間 通常のインドネシア語

2週間 技術指導の際必要なインドネシア語及びボキャブラリー)

(c) 宿泊施設

市内に専用住宅(2段ベットの部屋×3室)×2軒

(d) 食 事

朝食はパン・コーヒー等その住宅で済まし, 他は外食(屋台・ワロン等で)

(e) Y I L Cの講師

20才代のガジャマダ大学等の学生(いろいろな学部の学生を雇用)

(f) 教育(教授)法

Silent Method, コミュニケーション能力開発重点

当初2週間, 基本ボキャブラリー, 文法, 構文でサバイバル・コミュニケーション訓練。その後, 徐々に文化・技術関係の話題を盛り込んでゆく。従って, 決ったテキストは使用せず, 多くの教材(Reading Method, 写真・絵・ゲーム等)から生徒に必要な教材を適宜選び使用。

② C U S O (カナダ) 1985 ~

ア) 事業概要

ジャカルタ事務所(本部), 隊員数15名

スタッフ5名(内記: Director, Assistant Director, 他3名事務所員)

90年1月イリアンジャヤに新(追加)事務所開設予定(その際, あと1名 Assistant Director 着任)

イ) 隊員数15名(1年半後25名)

主な分野(方針) 環境・農業

ウ) 現地訓練

ジャグジャカルタ・REALIA

(a) 訓練期間

8週間

(b) 宿泊施設

ホームステイ(中流家庭)

(c) 講師の経歴(プロフィール)はVSOのYILCに類似。

(d) 教授法は、VSOのYILCに類似。

(3) 今後のインドネシアにおける語学訓練

- ① 当面は、現行のパジャジャラン大学委託の方式に基づき必要な改善要望をJOCV側から先方に随時提示し、現地語学訓練を図る方法が妥当と思われる。
- ② ホームステイはあくまで中流家庭を目標とすれば現地訓練にとって大変有意義と思われる。

2. 西サモア

(1) JOCVの新訓練内容

- ① 今次隊(元/2)から講座方式で2週間導入。

第1週	第2週	第3~4週	第5週
オリエンテーション	語学	ホームステイ	語学

ポイント：事務所(調整員)と今回訓練にて注意を払うべき事項として以下の点を話し合った。

ア) 従来ホームステイのみの研修も隊員の評判は一応良かったが、今回語学の講義形式の授業を2週間取り入れ、ホームステイを4→2週間にした結果、どのような成果が表われるか期待したい。

イ) オリエンテーション及び語学訓練中、隊員宿泊所で合宿するか？

日本語を話す弊害、タルミをどれだけ防御できるか？

ウ) 講師はUSP(南太平洋大学農学部+通信教育科)ではなくNU(国立大学)にアプローチしたが、講師謝金(5,000US\$/2週間要望)の関係で無理。アメリカ平和部隊の講師や現地職員のコネで講師確保。全員教師経験者、かえってPracticalな授業を期待。

エ) 教 材

アピアのアメリカ平和部隊開発のテキストを一部コピー借用。今後、協力隊独自のテキストの開発を検討。

(2) 他国のボランティアの現地訓練概要

① U S P C (アメリカ平和部隊) 1967 ~ (現在53名)

ア) 概 要

職員 12名 (米国人 4名 Director, Training Officer, 2 Medical Officers)
(Cook Is. も管轄)

現地スタッフ Training Officer (Julie) 1名+コントラクト・スタッフ (ローカル講師陣) 7名, 隊員 (派遣中) 2名

現在21名の訓練実施中 (11月~1月), SWORN-IN (宣誓式) 90年1月
ドロップアウト率 2/30 (1988) 理由: 病気, 不適應

隊員の主な活動分野: 英語教師 (高校レベル)

現在全隊員数53名中42名が教師隊員

イ) 現地訓練

(a) 概 要

① 現地訓練期間

通常8週間 (Net) 今回 (11月~1月) 9週間

② 目 的

" Communication-skill " の向上

③ 講 師

サモア人講師及び先輩隊員 (第1週の週末自宅へ)

④ 宿 泊 所

オリエンテーション期間: 市内のホテル

ホームステイ期間: 2村 (Remote 村 2週間とアピアに近い村 5週間) で1回
毎に移動

ホームステイ・訓練センター (学校) の発探は Contract Staff が行なう。

∴ Contract Staff は訓練開始前4週間準備 ∴ 3カ月 employment

(b) 訓練内容の特徴

教授法

① ◦ Oral rather than Written → コミュニケーション重視

◦ Oral ベースの授業方針で, 当初 Text を使わなかったが, 隊員が Text (メモのようなもの) がないとフラストレーション。

⑥ 第1週 サバイバル・ラングエジ； 6 situationals

第2週目から Teaching Practice 等を入れてゆく。

⑦ 講義形式の授業は午前中4時間のみ，午後はプラクティス＋culture

(c) ブラッシュアップ訓練

H I L T (High Intensive Language Training)

5月と8月の Holiday 時期に実施，約10日間（正味一週間）

外部参加者 120 名

場所：村・毎回移動（ホームステイ＋学校使用）

② オーストラリア・ボランティア (Australian Volunteers Abroad)

（組織母体：Overseas Service Bureau，半官半民）

現在派遣中：11名（6名英語教師，他5名職訓関係）

派遣前訓練：メルボルンにて9日間

2グループ（太平洋地域とその他地域）

訓練内容：教授法学習，医療事情，文化等

Teaching Plan の作成，教師のマナー

講師：OB 隊員他

教材：ビデオ他

現地訓練：現在5日間程度（サモア語2時間他）

先輩隊員が指導（通関，銀行，受け入れ省庁との交渉）

将来は2週間にしたい（語学を重視して）

海外手当：120タラ/週（USPC 並）（約240 USドル/月）

現地のカウンターパートと同等の給与を要求

NGO で勤める部分は OSB が支給。

(3) 提 言

JOCV 訓練実施にあたって今後留意すべき事項

① 現地訓練全体の概要説明を作成。（オリエンテーション時配布）

② 語学訓練のシラバスを作る。

③ 授業の継続性を図るために“NOTE”（前の講師から次へ引継ぎメモ）を作る。

④ 文化等一般講義には必要最少限度のメモ（Hand-out）が必要。

3. フィジー

(1) JOCVの現地訓練内容

① 63ノ2次隊から英語研修を導入(追加)し、1週間延長

第1,2週 : オリエンテーション3日間

語学訓練 英語24時間, ヒンディー語6時間, フィジー語6時間

第3週 : ホームステイ(インド人家庭)

第4週 : ホームステイ(フィジー人家庭)

② 現行訓練についての事務所(調整員)としての考え方

ア) 現在派遣中の殆どの隊員は、業務・生活について英語が必要。

(英語が出来れば、国内のどこへ行っても不自由はない。)

イ) したがって、現地語は、あいさつ程度の語学学習のみ実施し、それに加え、多少インド人とフィジー人の文化の講義を混えている。

③ 検討すべき事項

ア) 3種類の語学を同時に勉強させるのは無理。

イ) ホームステイの前にヒンディー語とフィジー語について基礎的な文法・構文等の知識がないとホームステイに求められる「学習語学の応用」という効果は期待出来ない。

(ホームステイの目的の明確な提示)

④ 今後の方針

ア) 3種類の語学訓練が必要としても、学習内容の整理を行なう。

(a) 英語学習は、文法等の学習を省き、会話(コミュニケーション)能力向上を目的とする。

(b) ヒンディー語及びフィジー語は、文法・構文等の基礎をきちんと体系的に学習させる。

(c) ホームステイ期間を③,イ)の考え方に立ち、現行の計2週間から1週間あるいは10日間程度に短縮し、節約した時間を語学訓練に充てる。(第3週目はヒンディー語、フィジー語学習の時間を英語より多くしてはどうか。)

イ) ホームステイ先を可能な限り、地方に探す。

現在、大多数の隊員は、いわゆるオーストラリアやアメリカの影響を受けた「近代化した部分のフィジー」に住み、2年間の滞在中、貧しい伝統的な部分のフィジー人との接点を持っていない。

ウ) 更なる検討事項

上記④,ア)の今後の方針では、英語を現地の英語に慣れるための(特に予復習のロードを課さない)会話練習中心としても、まだヒンディー語、フィジー語等の新規の

2カ国語の基礎を限られた時間で効果的に学習させることには無理がある。アメリカ平和部隊は隊員の任地における生活に必要ないずれかの現地語一種類を10週間学習させ効果を挙げているが、協力隊も重点学習の現地語を絞る方向で検討する必要がある。（現在、協力隊員で現地語で自由にコミュニケーションできる隊員はいない。）

(2) アメリカ平和部隊

① 概 要

職 員 数 : 12名(シニアスタッフ7名, 内3名米国人, 及び, サポートスタッフ5名)ツバルを兼轄

隊 員 数 : 66名(主要分野:理数科教師)

訓練担当職員 : 2名(米国人, フィジー人各1名)その他, 訓練実施時に講師等として, 10~15人の非常勤スタッフを採用。

② 現地訓練時期, 期間等

ア) 新隊員着任 : 12月, 及び, 6月

イ) 訓練期間 : 10週間

(a) 最初の2~3日間, フィジーにおける平和部隊の概要, 当国の医療事情等を講義。

(b) 語学訓練 : フィジー語あるいは, ヒンディー語。隊員の任地で使用されている言語を選ぶ。

プログラム ;

午前(8~12:30AM)集中学語訓練

午後(2~5PM)訓練サイトの村の中学校で教育実習を行ったり, その他, 異文化学習, 村民とのコミュニケーションの時間に充てて, 午前中の学習の応用編として位置付けている。

* フィジー語の語学訓練を受けた隊員は, ヒンディー語についてはあいさつ程度の表現を学ぶ。

* なお, 教員以外の隊員用の TECHNICAL VOCABURARY のテキストを作成中。(来年2~3月に上記テキスト作成の為に専門家2名の調査団が, 当地に派遣される予定。6月, 同テキスト完成予定)

授業方法他 : 文法等よりもコミュニケーション能力開発に重点をおいた語学訓練。ロールプレイ等を取り入れている。

ウ) 宿泊施設

最初の2週間, スバ市内のホテル(相部屋)その後, 語学訓練実施サイトの村に入りホームステイ。(但し, 将来は, 最初から村で訓練を実施したいと考えている。)

エ) 派遣後6カ月目に、IN-SERVICE TRAINING (約1週間)。

丁度、7、8月の現地学校の休み時期に当たり、村で特別クラスを開いて、隊員にはそこで再び教育実習をさせ、教授法のブラッシュアップを図る。(平和部隊の事務所の説明によると、平和部隊の教師隊員は、殆どが教員経験を有しない為、特に、こうした教育手法の訓練に力を入れているらしい。)

③ (参考) 派遣前訓練 P D O (PRE-DEPARTURE ORIENTATION)

ハワイにて、実質2.5日間のプログラムで実施。

内容 : 平和部隊事業概要

隊員としての参加動機の確認、意識の明確化のための討論

隊員の心構え

任国事情(医療、交通安全、政治、文化)

現地訓練の説明

(3) V S O

① 概 要

職 員 数 : 4名(英国人3名; Director, Assist Director, Field Officer, 及び、ローカル秘書1名)

* 大洋州諸国を兼轄 : パヌアツ、トンガ、ソロモン、キリバス、ツバル

隊員派遣数 : 53名(在フィジー4名)

訓練スタッフ : Director を中心に職員全員で担当。特に専任はいない。

② 現地訓練時期、期間等

隊員着任時期 : 1月及び9月

新隊員着任時、N A D I に Director が出向き、一日かけて大洋州派遣隊員全員共通のオリエンテーション(General Information) を実施。

フィジー隊員は、その後、スバにてヒンディー及びフィジー語を各1週間語学訓練を受ける。(1日平均5時間語学学習、但し、職種の必要に応じて隊員と相談しつつ、数日間の追加を行なうこともある。)

宿 泊 施 設 : フィジー派遣の隊員数が少ないので、職員の自宅に宿泊させている。

語 学 講 師 : アメリカ平和部隊の語学講師に依頼している。

(ヒンディー及びフィジー語、各1名)

4. フィリピン

(1) JOCVの訓練内容

第1週, 第2週	第3週	第4週, 第5週
オリエンテーション + 語学訓練 6.5 hrs /日 夜, 自習2 hrs	隊員めいめいの 任地訪問 所属長へ挨拶	語学訓練

語学訓練時間数 6.5時間×5日×4週間=130時間

隊員の現地訓練の満足感(充実感)が高い理由の検討。

- ① 語学講師陣が非常に熱心な人がそろっている。そして、講師の性格が快活で親切。

語学訓練開始後も、夕食後講師は毎日その日の反省会を行ない、そして翌日の準備(教材作成)を殆ど毎日8~9時頃まで、時には深夜に及んで行なっている。→ 隊員が講師のその姿を見て自分達の気持ちを奮い起こさせている。

- ② 訓練全体のプログラムがよく練って作成されている。

訓練目的(到達目標を明確に設定)

……語学学習の目的を初級から上級まで4レベルに区分し、協力隊は最低第2レベルまで到達させることを目標としている。(別添1参考)

- ③ 教授法および教材の吟味をよく研究している。

ア) 隊員が独り立ちするために必要なボキャブラリーから指導し、常に生徒の関心のあ
るテーマを講義の素材として取り入れている。(別添2参考)

イ) 授業を先生と生徒の対話(Dialogue)を中心に進め、一方通行的講義形式を行な
っていない。→ この方法は隊員に大変好評。

ウ) シミュレーションのゲームを多く取り入れ、体で覚えさせるので、隊員が退屈した
り授業に飽きたりする余地がない。さらに教室内で教材が不足すると近くの市場等に
生徒を連れ出し、新しい表現・単語を覚えさせる。

- ④ 現地訓練5週間の丁度中間1週間に隊員の任地訪問を取り入れ、隊員の気持ちをリフ
レッシュさせ、さらに後半の語学訓練に意欲的に取り組む動機づけを与えている。

- ⑤ 訓練施設が地方の村(ロスバニヨス)に位置し、都会の喧噪から離れ落ち着いて勉強
できる環境にある。同時に、その村で散歩、買い物をすればタガログ語の実習ができる。

ポイント ; ARMDEVへの語学訓練の委託。

ARMDEVの体制, 組織, 運営システム。

ARMDEVとは

- 1) アメリカ平和部隊の語学訓練に訓練期間中のみ雇われていた講師達が、不定期の仕事の体制から脱却するために語学教育や経営能力開発を目的とする会社を自分達で興した。(1980年)
- 2) 従って、語学教育の教授法はアメリカ平和部隊が活用している Silent Method を基調とし、それを実用的な教授法に発展させる工夫をしている。

(2) 他国のボランティアの現地訓練概要

① アメリカ平和部隊

ア) 概要

- スタッフ：60名(サポーティングスタッフを含む)内アメリカ人7名
隊員総数：365名(89年10月現在)、語種32種
訓練専任スタッフ：4名；Assistant Director, Training Officer(米国人)他3名
担当；語学訓練、技術訓練、総務
訓練時備上総スタッフ(語学講師他)：計80~90名(殆ど訓練生数に同数)
新隊員着任：12月および7月

イ) 現地訓練内容

- (a) P S T (Pre-Service Training)：計約10週間 於ヌエバエリア
最初の4日間：オリエンテーション
8週間：語学訓練(午前中4時間)+その他の課業(Community Visit とグループ討論)(午後)
1週間：任地訪問
- (b) Regional Conference の実施
着任語3カ月目、5日間、いくつかの地域毎で業務の進捗状況・問題点・任地変更の必要性等について会議。
- (c) I S T (In-Service Training) 着任後6カ月目
2週間 目的：① 語学のブラッシュアップ
② 業務の進捗状況確認及び最終的任地確定
③ その他必要なカウンセリング
内容：語学(3時間/日)
討論
他の隊員の任地訪問

ウ) 参 考

派遣前訓練 P D O (Pre-Departure Orientation)，3日間、サンフランシスコにて

内容：平和部隊の概要説明
医療事情，予防接種，OB体験談

現地訓練期間中の宿泊施設

最初の約3週間：訓練所付属宿泊施設に合宿

その後約7週間：ホームステイ

② オランダSNV (Stichting Netherland Volunteers)

ア) 概要

スタッフ：8名 (Director 他フィールドスタッフ5名)

隊員数：現在12名 (今後20名目標)

主要分野：農業，適応技術開発 (土木・鉄工他)，水産

隊員派遣時期：随時

イ) 現地訓練内容

(a) 期間：約9週間

1週間 オリエンテーション

6週間 語学訓練 4時間/日 (午前)，午後は自習

2週間 ホームステイ

(b) リフレッシュコース：語学ブラッシュアップ訓練

着任後1年目，2週間実施

現地訓練施設

語学研修：各隊員配属先により検討

タガログ語；マニラのユニオン教会

セブアノ語；ダバオのマリオ・クノール・ファザース

宿泊施設：マニラに専用宿泊所。他の地は適宜検討。

(参考)

① 派遣前訓練 オランダにて2週間

内容：英語，適応技術学習，医療事情等

② SNVの特徴

隊員派遣期間3年間 (当初2年間であったが，協力効果を考慮し延長)

(分 析)

(1) 現地訓練内容の比較検討

今回の現地調査で、他国のボランティア派遣機関とし、アメリカ平和部隊、V S O、C U S O、オーストラリア・ボランティア、オランダ・ボランティアを調査した。

日本（協力隊）との違いは、派遣前訓練において他国は、3日～2週間程度の期間で、事業概要、哲学、適応技術学習等を学ぶが、オランダ・ボランティアを除いて、語学学習を一切行わず、語学学習は全て、現地訓練で行なっていることである。

現地訓練の内容で比較すれば、インドネシアにおけるV S O、C U S O共に、大変体系的で、かつ、きめ細かいプログラムを実施している。C U S Oは、V S Oの訓練を基礎にして、独自のプログラムをより精密に作っている。V S Oは、宿泊施設として、借り上げ住宅に隊員を共同生活させているが、C U S Oは、Director が、「共同生活はどうしても英語を使ってしまう為、現地訓練の効果が薄れるので、ホームステイ方式にしている」と説明するほど、宿泊施設と現地訓練効果との関係を明確に捉えている。

同じV S Oでも、フィジーのV S Oは、2週間（フィジー語、ヒンディー語、各1週間）程度の、ごく入門的語学訓練を実施しているのみである。両国のV S Oを比較すると、派遣数と歴史（経験）において、インドネシアに大規模に活動している様子が窺える。その国についての経験の差が、現地訓練の内容の違いに反映しているといえる。

西サモアで調査したオーストラリア・ボランティアは、現地事務所も無く、隊員が（先輩が後輩を指導しながら）すべて自分の手で、現地に定着して行くシステムだから、いわゆる他国が現地訓練と呼ぶものは、実施していない。

インドネシアにおけるV S OとC U S Oは、民間の語学研修所と契約し、語学訓練を実施している。その内容は、いわゆる語学学習でTechnical Languageの授業以外は、外部の第三者の生徒と一緒に受講している。但し、V S OとC U S Oが研修所として使っている所は、V S O等の語学学習の考え方（コミュニケーション重視、実用的な語学）を採用している。

一方、西サモア、フィジーで見たアメリカ平和部隊の語学訓練は、訓練専任の経験のあるスタッフが、現地の契約ベースの訓練スタッフ及び現地の語学講師を採用して（生徒5～6人／講師1人）、彼らに独自のテキスト開発をさせる等の平和部隊に必要な訓練を、常に積極的に探っている様子が窺われた。こうした訓練専任のローカル職員や語学講師は訓練期間（2カ月）の1カ月前から備上し、訓練プログラムの作成、テキスト整備、訓練サイト（村）や、ホームステイ家族探し、教育実習を行なう学校等の交渉を行なわせている。

(2) ホームステイ

ホームステイは、隊員が現地の文化を直接体で学び、さらに語学のプラクティスを通し、コミュニケーションへの自信をつけ、あるいは自分の弱点等に気付く素晴らしい機会である。中流レベルの家庭にホームステイ先を確保することが出来れば、隊員が以後2年間、最も接触する標準的な家庭の様子、人々の生活・考え方を知ることが出来る現地訓練に非常に有効なプログラムである。

もし、ホームステイが不可能な場合は、現地の中流レベルの家庭を日中に訪問し、家庭生活を体験させる「ホーム・ビジット」を企画すれば、ある程度ホームステイと同様の効果を期待することができる。

ホームステイを実施する場合に、注意を要する点は、冒頭に触れた通り「正式な語学訓練」のプログラムと組み合わせた場合に、相乗的効果が現われる。従って、何の事前準備も与えず、隊員をホームステイさせたとすれば、現在までの隊員報告等からの経験に基づくと、約5日間程経つと、一応の身の回りの事、日常生活に慣れてしまい、その後の期間の効果は減じる。隊員は「もう充分と感じる」と報告を寄せている。

従って、ホームステイを実施する場合、次の点の工夫が必要である。

- ① 日中、「正式な語学訓練」を行ない、夜、ホームステイさせる。
- ② 現地訓練期間中の最初の2週間程度は「正式な語学訓練」を実施した後に、ホームステイを実施する。
- ③ 異文化適応の過程の一つの「ショック療法」としてホームステイを現地訓練の冒頭に実施する場合は、現地訓練全体のプログラムをはっきり隊員に示し、ホームステイの目的をよく理解させておく。

(3) ま と め

(現地語学訓練の成果を決定づける要素)

- ① 現地訓練の運営体制
マネージメント・ラインおよび指導ライン
- ② 講師の選定
年齢、資格、経験、性格
- ③ 教授法の研究
受講者のレベルに合わせた教授法
- ④ 教 材
ア) テキストの選択
イ) 図、写真、ロールプレイ、ゲーム、シミュレーション等を利用して受講者の気分を常にリフレッシュさせる工夫。

- ⑤ カリキュラム
語学訓練全体のシラバスの整備
- ⑥ 語学学習の進捗状況のモニタリング方法
毎日のアセスメント、毎週のフィードバック
- ⑦ 訓練施設のあるサイト、環境
- ⑧ 宿泊施設

JOCV LANGUAGE-CULTURE TRAINING PROGRAM
BATCH NO. 81

(別添1)

THE PROGRAM AND ITS GOALS

This is a highly intensive four-week training program that is designed to provide maximum development of the capabilities of individuals in different target languages through a real-life learning environment that offers opportunities for growth, contributes to the self-esteem of the individuals, and promotes positive inter-personal relationships among persons of different cultures with respect to their dissimilar ideas and values. The program that the individuals undergo regard communication skills and cross-cultural processes as dependent upon one another.

Specifically, the program aims to provide the Japan Overseas Program Volunteers with opportunities to:

1. develop the skills and spontaneity in using the target languages in a manner that encourages self-direction and self-reliance;
2. acquire skills and confidence in speaking the target languages on survival, social and basic job-related topics;
3. learn more HOW to learn the target languages;
4. know more of the Philippines as a country, and the Filipinos as a people;
5. compare the similarities and dissimilarities of the Japanese and Filipino cultures;
6. discover means and ways of bridging the gaps that may weaken or destroy the present bond of brotherhood existing between the Japanese and the Filipinos; and,
7. be able to respond to opportunities and cope with cultural stresses.

THE PROGRAM CONTENT

The language proficiency goal for all volunteers is LEVEL 2, however, for the fast learners, they can move to the higher levels as indicated.

The following levels comprise the whole program content:

LEVEL 1. BASIC SURVIVAL LEVEL

This is aimed at enabling one to carry out minimal routine activities of daily living, using the target language.

- Greetings and Leavetakings
- Expressions of Courtesy
- Introductions (Individuals; Groups)
- Making Requests, Granting Favors
- Expressions for Mealtime/Snacktime, including Filipino Dishes
- Expressions of Time, Money, Dates, Measurements and Distance

- Asking and Giving of Directions
- Modes of Transportation, Geographical Expressions
- Occupations, Nationalities
- Social Conversation Patterns Including Telephone Conversation
- Routine Questions and Answers

LEVEL 2. SOCIAL LEVEL

This is aimed at enabling one to interact with people in social situations and for limited work requirements.

- Discussions on current events, family, people, weather, etc.
- Social Situations (extending, accepting, refusing invitations within cultural patterns and expressing appreciation, etc.)

LEVEL 3. JOB-RELATED LEVEL

This is aimed at enabling one to speak the language with sufficient structural accuracy and vocabulary to meet limited needs on job-related topics.

- Discussion on one's job and its requirements
- Deeper description and discussions on day-to-day situations with stress on grammatical structures and speech patterns
- Description of a process, giving instructions
- Other work-related topics

LEVEL 4. PROFESSIONAL (ADVANCED) LEVEL

This is aimed at enabling one to be able to use the target language fluently and accurately with a vocabulary that is extensive and precise, enough to enable one to convey the exact meaning.

- Professional subjects
- Language puns and adlibs

APPROACHES AND METHODOLOGIES

A combination of methodologies which are action-oriented and which approximate real-life situations will be used. Emphasis will be given on developing the volunteers' skills in listening and speaking their respective target languages. Individual or group follow-ups during-and-off program hours will be done by the facilitators, as needed. Field trips and community immersion activities in rural as well as urban-cosmopolitan areas will be included.

JOCV Language Course Outline

Lesson Plan No.	Title	Competencies	CO
1	Greetings and Leavetakings	Greet and take leave in the TL/cultural context	Filipino ways of greetings and leavetakings both verbal and non-verbal
2	Introducing Oneself	Use polite expressions	Filipino way of establishing rapport and showing concern: "SIR" - Smooth Interpersonal Relationship
3	Asking and Telling Time	Ask and tell time	Filipino concept of time: Cyclical
4	Ordering a Simple Meal	Make requests; grant favors Express likes and dislikes Use mealtime expressions Identify at least five popular Filipino dishes	Filipino favorite dishes on particular occasion Mealtime "rituals"/practices at home and in eateries
5	Taking a Public Transportation	Ask and give directions Express location of things Use geographic expressions Identify and take rural and urban means of transportation Describe places	Filipino peculiar way of giving direction* verbal/nonverbal uses
6	Buying and Bargaining	Identify and use Philippine currency Identify common market items/ necessities Buy and haggle items	Haggling - the Filipino way
7	Talking About One's Family	Identify members of the family Identify and use kinship terms Describe people	Filipino concept and practices on Love, Courtship and Marriage
8	Extending and Accepting Invitation	Describe events Describe the weather Express appreciation Make an appointment	Filipino Value: "Utang na loob"
9	Extending and Refusing an Invitation	Make an apology Express discomforts	Filipino ways of showing/making apologies The Filipino Value: "Hiya"
10	Talking About One's Job	Identify jobs, duties, tasks and responsibilities that go with a certain job Explain one's job	The Filipino Value: "Pakikisama" in the work set up
11	Explaining a Process	Follow and give technical instructions	
12	Cumulative Review/ Simulations		

現地訓練強化拡充計画調査に係る現地調査報告

2. 出張先 : バングラデシュ・マレーシア

出張者 : 駒ヶ根訓練所 大塚 正 明

期 間 : 平成元年12月10日～12月20日

1. バングラデシュ

(1) 日 程

月 日	時 間	
12月9日(土)	17:50	ダッカ着
10日(日)	8:00	JICAバングラデシュ事務所訪問
	10:00	CONCERN訪問 Director Mr. Wiliam Carlos
	11:00	HEED Language Centre
	15:00	AETI訪問
11日(月)	10:00	VSO訪問 Program Director Mr. Max Webb
	12:00	平成元年度2次隊々員との懇談
	15:00	BRDB隊員活動先(ダッカ)視察
12日(火)	9:00	VERC訪問
	11:00	農業省食用作物課配属隊員任地視察
	15:00	IVS訪問
	19:00	隊員との懇談会
13日(水)	11:30	ダッカ発

(2) 現地訓練の現状

- ① 日程：別添のとおり
- ② 内容について

元年度2次隊に対する現地訓練は、12月1日より1月17日まで、休日も含めて48日間に亘っている。

訓練内容は以下のとおり。

- ア) 諸手続き、表敬訪問等・・・4日
- イ) 語学学習・・・・・・・・・・26日
- ウ) ホームステイ・・・・・・・・・・8日
- エ) 任国事情等・・・・・・・・・・2日
- オ) その他移動及び休日・・・・・・・・8日

※語学学習

ダッカ郊外のA.E.T.I. 学生用宿舎に住ませ（1部屋3人）、劣悪な環境での生活体験をさせている。

語学学習は、午前と午後に分かれ、午前は8時より12時まで市内のHeed Language Centreで、午後はA.E.T.I. で15時より17時まで実施されている。

Heed Language CentreへはA.E.T.I. の宿舎から力車で通うことができ、Centreの周辺的环境も住宅街でよい条件である。このCentreは、1975年に設立されダッカ在住外国人に対して基礎的なベンガル語とともに、バングラデシュの文化、政治、生活習慣なども教えているバングラデシュ唯一の学校で、ほかにこのような外国人にベンガル語を教える学校はない。校長以下10人の教師が教えており、全員大学出で、2年から13年の経験がある。生徒は協力隊員も含め約60人が通っているが、協力隊員は既に基礎ができていてレベルが違いため協力隊員だけのクラス（2クラス）編成となっている。

午後15時より17時までは、ダッカ大学の学生（Institute of Modern Language）2名が2クラスに分れて日常会話を中心にした授業を実施している。また、生きた会話力を身につけるため、実際にダッカ市内のマーケットや博物館、国会議事堂などの見学も行なって変化を持たせている。

※ホームステイ

ホームステイは、現地訓練の丁度中間に計画されており、バングラデシュ到着後3週間目にあっている。移動日を除くと実際のホームステイは8日間だが、男子は農村部に、女子は比較的良い条件の地方都市部内に入っている。ホームステイ先は同職種の先輩隊員が選び、ホームステイ中随時必要な世話をしている。

※任国事情

現地訓練の総仕上げとして訓練最後に、ダッカ郊外（サバール）で1泊2日のプログラムにより、Village Education Resource Centreに委託し実施している。内容はバングラデシュの政府組織、農村開発の現状や諸問題、農村生活などについての講義が中心で、ベンガル語で行なわれる。

③ 海外援助団体

※CONCERN

現在20人のボランティアがおり、農村部での婦人活動の普及、栄養や衛生知識の啓蒙などのほか、洪水の被災者に対する救済活動など幅広く活動をしている。ボランティアに対する現地訓練は、到着後2カ月間Heed Language Centreでベンガル

語を全く基礎から学ばせている。派遣前には任国の一般事情、および任務内容のガイダンスを1週間ほど実施するだけで、語学研修はやっていない。しかしHeed Language Centreでは、教科書を中心とした学校教育方法のみを目的として考えているため、独自の担当者(ベンガル人)を備え、会話力を中心としたカリキュラムを開発中である。Heedに対しては教授方法のまずさ、内容の悪さをあげ、全く信頼していない。今後自らのカリキュラムにより、赴任時2カ月間の訓練のほか、6カ月後のBrush upも計画中である。

※V S O

現在20人のボランティアが活動中。活動分野は、主に保健衛生関係が多く Bangladesh の NGO 団体を通しての活動がほとんどである。CONCERNと同じく派遣前の語学訓練は全く行なわれていない。任国事情等のオリエンテーションを1週間ほど実施しているのみである。

ベンガル語については CONCERN と同じくコミュニケーションとしての必要性だけをとらえているため、基礎的な会話力を目的としている。赴任後2カ月間の、Heed Language Centreでの語学学習を実施しているが、CONCERNと同じ理由により独自の語学訓練を考えている。

※I V S

Bangladesh の NGO 団体に対する協力を主目的としており、海外ボランティアは現在4人しかいない。農村部で様々なプロジェクトを実施しているが、海外ボランティアは実際に活動している Bangladesh のボランティアのリーダーに対する協力が多いため、英語で通している。したがって、海外ボランティアに対するベンガル語訓練は、特に実施されていない。また任国の事情等についても着任後2週間ほど、I V S 現地スタッフが行なっているのみである。

④ 今後の検討事項

ア) 期間について

48日間の現地訓練に対し、長過ぎるとの意見が多い。

意気揚々と任国に着いて、早く任地に着きたい気持ちが長すぎる訓練のため逆効果となっている面がある。

イ) A E T I での合宿について

劣悪な生活環境での経験は、隊員どうしでの生活であり、日本語での生活で語学学習上は良い環境とは言えない。生活体験と語学学習の2つの目標を同時に追求するには無理があり、ホームステイ(ダッカの中流クラス家庭)をしながら、Heedに通学の方が語学学習上、生きた言語の体得、及び実際のベンガル人家庭での体験が得ら

れ、効果があると思われる。

ウ) Heed Language Centre での授業について

- K T I からの語学訓練結果が、Heed 側に渡されていないため、K T I との連携がとれていない。
- 現地訓練開始時、及び終了時の評価を、個々に把握する事が必要。
- 会話よりも教科書に基づいた授業であり、K T I と同じような内容になっており、現地訓練として特色ある内容を開発し、Heed 側に依頼する必要がある。

エ) ホームステイについて

ホームステイ制による現地訓練は、隊員にとって任国の理解を深め、生きた日常会話が身につくだけでなく、親密な家庭を得る事は、隊員生活の大きな拠所となる。隊員の語学訓練の点からも、できるだけ正確なベンガル語を話すダッカ市内（Heedに通学可能な）の中流程度の家庭に入れる事は、休日等も無駄にする事もなく、又訓練期間諸効果を高めて、短縮化する上で検討すべきと考える。

しかし、ダッカに生活する隊員にとって、地方でのホームステイもバングラデシュの実情を理解する上では必要とも考えられるため、期間を短くして導入訓練として計画するか、もしくは、Brush up Course を6カ月から1年後に計画するか、今後の検討を要する。

オ) 午後の会話練習について

ダッカ大学の日本語学科の学生2人で担当しているが、全く内容についてはいきあたりぼったりで、系統だったカリキュラム編成がなされていない。隊員に対し、事前に会話のテーマや授業内容を知らせる事により、単語の予習をさせたりする事ができ、効果をあげることができる。隊員からもこの時間帯の工夫を望む声大きい。

2. マレーシア

(1) 日 程

月 日	時 間	
12月14日(木)	11:50	クアラルンプール着
	14:00	JICA事務所訪問 ・JOCVスタッフとの打ち合わせ
	15:30	クアラルンプール発
	17:00	マラッカ着
	19:30	間宵隊員(元ノ1, 養護)懇談会
15日(金)	8:00	ホテル発
	10:00	坪川紅美隊員任地訪問(Felda Palong)
	14:00	同地出発
	17:00	クアラルンプール着
16日(土)	9:00	元年2次隊語学訓練授業見学(マレー語)
	11:00	元年2次隊語学訓練授業見学(英語)
	16:00	ホームステイ先訪問(4家庭)
	20:00	現地語学訓練講師との打ち合わせ
17日(日)	11:10	クアラルンプール発

(2) 現地訓練の現況

- ① 日程 : 別添のとおり
- ② 内容について

元年度1次隊については、11月29日より12月29日まで31日間で実施している。

- ア) 諸手続き, オリエンテーション等・・・2日
- イ) 語学学習・・・・・・・・・・・・・21日
- ウ) 表敬及び赴任準備・・・・・・・・・・・・・4日
- エ) 休 日・・・・・・・・・・・・・4日

※語学学習

マレー語は、クアラルンプール郊外（KG. SELAYANG BARU）に対象隊員10人をホームステイさせ、その地域内にある公民館及び民家を借りて、8時30分より12時まで授業を行なっている。講師は教師を退職した3人の専任講師により行なわれ、協力隊員用に作成された49ページのプリントを使用している。

講師3人とも高齢ではあるが（60才位）、経験豊かで、熱心であり、K T Iの復習をして、パターンプラクティスを中心に行なっている。

英語訓練に関しては、クアラルンプール市内の日本マレーシア協会の日本語教室を借用して、インド人女性（現役の中学校英語教師）1人を常任に実施されている。Oxford UNIVで開発されたK T Iでも使用している教科書を使用しているが、電話で不動産会社に借家について問い合わせさせるなどより実践的な会話能力の向上に努めている。

※ホームステイ

クアラルンプールの郊外の中流家庭であり、10人がかたまった町内に住んでいる。マレー人家庭からは完全に家族の一員として扱われ、会話能力の向上だけでなく、マレー人の生活習慣を理解できる良い方法といえる。

(3) 今後の検討事項

① 語学学習について

K T Iとの連携については、K T I講師が、時にマレーシア訪問時に現地講師と意見交換しているため、かなり情報交換はなされているものの、体系的なシステムがないため、現地講師よりのより詳しいK T I訓練結果を望む声がある。今後現地訓練内容をも考慮した指導要領等の開発が必要であろう。又、午後の時間は、ホームステイ先で自由な日が殆どであり、会話、任国事情や名所訪問等、工夫できる時間であると思われる。又、教室は全くの民家で授業に集中しにくい環境であるため次回は場所の選考に努力が必要であろう。

② ホームステイについて

理想的なレベルの家庭が選別されているが、おたがいのホームステイ先が近すぎるため、隊員相互の訪問が日本語を使わしめ、又隊員どうしの依存心も生じている。又、ホームステイ先の家庭どうしの競争心も生じたりして、過剰サービス気味ともなっており、少々負担をかけすぎているとも思えるため、できればもう少し拡散させられればより良い。

(総合所見)

現地訓練全般について、2カ国を中心に視察したが、以下にその総合所見を述べる。

(1) 現地事務所のスタッフ不足

いずれの事務所でも問題となっている事であるが、日常業務に追われ、現地訓練に対するきめ細かい配慮がなされていない。

マレーシアでは、担当者が以時K T Iで語学講師をやっていたため、かなり綿密に現地語学訓練の中身についてもタッチしているが、バングラデシュについては全く語学学校に任せきりと成っている。

今後現地訓練のみならず、Brush upなどの隊員活動期間に係る隊員語学指導を目的としたスタッフ確保が必要であろう。

現地での有能な人材を、その任務のため備上する事も考えられるべきだと思う。

(2) ホームステイについて

任国での語学学習として、任国ならではの条件を整えるには、ホームステイは良い方法といえる。

マレーシアでのホームステイは、

- ① 日常会話の向上
- ② 任国の本当の家庭を経験できる
- ③ 任国に第2の家庭がもてる事により、任国に対する愛着が増大する

などの効果があり、良い結果を生じていると評価できる。

しかし、バングラデシュのように、生活体験そのものを厳しい中において、隊員の不屈の精神を養う事を目的とする国もあるが、それぞれの派遣国の実情をふまえつつ、今後、更にその受け入れ家庭のレベルについては、検討を要する。

(3) K T Iとの連携について

まず、国内での語学訓練の中身の吟味、指導要領等の整備について、「語学訓練強化計画検討部会」(仮称)において、国内訓練及び任国でのそれぞれの訓練内容を吟味する必要がある。

現地訓練としての語学訓練からは、より現地での生活上、仕事上必要な会話力の最終Brush upに主点をおく方向が良いと思われる。

例えば、各隊員の任務をシュミレーションとしたTechnical Class、会議のデモンストラーション、公用文の書き方など、内容について今後更に検討を要する。特に評価方法に

については、協力隊側から、現地教育機関に対し強く指導する必要がある、K T I 訓練から始まる「語学個人カルテ」なるものも考案して、継続的な隊員の語学力アップを計っていく必要がある。

資 料 編

1. 現地訓練の強化・拡充について（発信；昭和63年5月12日）…………… 69
2. 現地訓練調査（実施状況の推移）（平成元年10月9日現在）…………… 70
3. 現地訓練実施状況一覧表：英文（平成元年10月30日現在）…………… 71
4. 協力隊の現地訓練の現状（各国毎の資料；現地訓練プログラム概要等）… 74
（平成元年8月～9月現在）
5. 他国のボランティアの現地訓練の現状 …………… 121

本年度はこれらの状況と提言を踏まえ、派遣前訓練の見直しをおこなうこととし、訓練期間を従前の90日(3次隊は89日)に比べて2週間短縮の77日(76日)とした。訓練の基本目的を損うことなく、内容の濃密化に努め、殊に語学については時間致の維持および訓練終了後の早期出発を念頭に日程の作成にあたる。

従来、現地語学訓練は任国の事情に応じ、国内旅行や下宿方式、夜間学校通学等様々な方法や形態、期間で実施してきた。しかし、本邦派遣前訓練の見直しに合わせ、一貫性、継続性の観点から現地訓練の在り方を再検討することが必要であり、当面の指針として、全体的な傾向にあり、且つ必要性の高い語学習得を第一の目的とすることに統一し実施することとしたい。

ついては、本年度赴任国において現地語学訓練を実施するにあたり、

1. 語学習得に重点をおく
(語学研修所への委託、語学講師の確保)
2. 期間を1ヶ月とする。

以上2点を指針に赴任国における現地訓練実施計画を検討願いたい。参考までに各国の現地語学訓練について隊員の報告書をもとに作成した実施状況一覧を添付する。

なお、本件につき在外事務所長会議もしくは職員の出張等により貴職と協議を図りたいところ、事前に貴見あれば回報願いたい。また、仏語、西語圏については本件対象外とするので念のため申し添える。

昭和63年5月11日
(省)第05061号
(令)第62-015号

協力隊派遣国事務所長
全 調 整 員 殿



青年海外協力隊事務局長

現地語学訓練の強化 拡充について

昭和48年度から実施している現地語学訓練は、任国において言葉の運用能力を高め、風俗習慣を学び、協力活動への心構えを醸成させることを目的としている。

しかし、昭和49年度のグアテマラ西語研修、57年度からのウイシ一における仏語研修、それに続くメキシコの西語研修、アジアにおいてはスリランカ、フィリピン、タイ、中国等の現地語学研修と語学習得を重視する傾向を認めしてきた。

また、先の協力隊運営委員会においては、語学訓練の効率を高めるために、国内での訓練を基礎的なものととどめ、国、地域あるいは語学別の訓練態勢を整備し、現地において訓練する方がよいと提言がなされている。

現地訓練調査(実施状況の推移)

国名	良い	改善 要望	総数	現況
バンングラアデシュ	3 5	7 6	10 14	第1回目調査(63/1)では「授業スケジュールがハードで、更に英語によるベンガル語の授業はレベルが高すぎて理解出来ない」という隊員のコメントが圧倒的に多かったが、今回調査(63/2以降)では授業スケジュールのハードさについてのコメントは急減した。一方、「ホームステイが大変良かったので、講義形式語学訓練の期間(現行4週間)を短くしてもホームステイ期間をもっと取って欲しい」と言う要望が出ている。
ブータン	1 2	0 0	1 2	63/1以降、語学訓練期間を徐々に延長している:63/1次・2週間、63/2次・3週間、63/3次・4週間、現在、現地事務所は望ましい現地訓練の内容を模索中と思われ、今後しばらくの間、事務局から適宜、助言を行なう必要がある。
中国	1 0	7 3	8 3	第1回目調査(63/1)時の隊員コメント「(1) 汇报した内容のテキスト2冊を使っているが、1冊にまとめた方がよい。(2) テキスト、文法中心の授業だが、自由会話を多く取り入れる様にしたい。(3) ホテルの集団生活は日本語を話すので勉強の為に良くない。」 今回調査(63/3)時の隊員コメント「(1) 中国語による中国語の説明を理解できず、1カ月の語学訓練は長すぎる。(2) 教材の分量が多すぎる。一日の授業時間が長すぎる。」
インドネシア	0 0	2 2	2 2	共通した隊員コメント「一コマ2時間の授業は長すぎ、集中力が続かない。文法、読解等の授業が多く、会話が少なく、講義内容に重複があり、講師間で調整をして欲しい。ホームステイは良い。但し、家族の方言をよく選んで欲しい。」
マレーシア	4 12	13 1	18 18	63/1以降、ホームステイの期間を徐々に延長している:63/1次・3日間、63/2次・3次・3次・1週間、1/1次・3週間、一般的に隊員に好評。青年団体との交流を取り入れるなど、現地事務所はいろいろ工夫をしている。現地事務所より今後の現地語学訓練内容の改善(駒ヶ根訓練と現地訓練とのカリキュラムの連携等)について助言する専門家の派遣を要請してきている。
モルディブ	1 1	1	3 7	基本的な訓練フレームワークはできている。事務所はホームステイ家族の確保に苦労している。
ネパール	1 3	9	10 9	訓練プログラムが大幅に改善された。第1回目調査(63/1)で隊員に不評だった3週間のホームステイを1週間の導入期間のみとして短縮。 第1回目調査(63/1)の際、多くの隊員が指摘した「講師の指導の無計画性・技術不足」が、今回調査(63/3)では認められない。この点も解決されたのだろうか。今後は、駒ヶ根訓練と現地訓練との連携緊密化が課題。渡部崎ヶ根訓練所長出張。
フィリピン	5 5	2 1	7 9	現行訓練は概して好評。隊員コメント「文化・習慣のプログラムのあり、フィリピン人の物の考え方を学ぶことができて良かった。第4週目の授業はインタビュアー練習の繰り返しと自習だったので、改善の余地がある。」
スリランカ	1	4 3	6 7	二回の調査を通じて、講師の指導方法に関する不満が目立つ。隊員コメント「授業の計画性が無く、思い付きで授業をやっているような印象。ホームステイは良かった。」業務上、英語を使う機会が多いので、英語研修を希望する声がある。
タイ	2 3	2	4 5	特に問題ない。
ジョルダン	0 1	1 0	1 2	元年度1次隊までシリア派遣隊員の現地訓練に合流していたが、2次隊から独自の訓練を実施予定。現在準備中。
シリア	0 4	6 1	6 7	第1回目調査(63/1)時、の隊員の不満の理由は教室や宿舎が暑かった事。 第2回目調査(63/2)時には、上記の類の隊員コメントは無い。基本的に、現行訓練で問題ない。
エチオピア	1 3	1 1	2 4	基本的に、現行訓練で問題ない。

国名	良い	改善 要望	総数	現況
ガーナ	9 13	4 1	15 15	基本的に、現行訓練で問題ない。
ケニア	4 8	1 5	8 21	基本的に、現行訓練で問題ない。 高橋広尾訓練所長出張
リベリア	4 5	0	6 12	基本的に、現行訓練で問題ない。
タンザニア	1 7	3 2	7 15	現在、現地事務所では現地訓練プログラムの改善に積極的に取り組んでいる。第1回目調査(63/1)時、語学訓練はなく、現地体験旅行10日間のみであったが、63/2次隊より語学訓練2週間に現地訓練の内容を大幅に改善した。 高橋広尾訓練所長出張
ザンビア	5 7	4 7	11 17	実用的な訓練プログラムが立てられており、概して好評である。語学訓練の期間も5日間(63/1)から2週間(63/2)に拡充・改善した。 今後の課題は、訓練期間中の底金を勉強し易い環境への改善、高橋広尾訓練所長出張
フィジー	2 1	4 2	6 4	第1回目調査(63/1)時と比較して、訓練内容が大幅に改善されつつある。語学訓練期間：3日間(63/1)から2週間(63/3)に。 しかしながら、隊員コメントに次の指摘があり、今後の改善努力を要す。「講義内容について講師間の重複があり、調整をして欲しい。広尾訓練との訓練内容の重複を図って欲しい」。
PNG	0 2	3 0	5 6	第1回目調査(63/1)時と比較して、訓練内容が大幅に改善されつつある。63/1次隊以前はホームステイ6日間のみで、語学訓練は無かった。 63/2次以降、語学訓練を実施している。(63/2:2週間、63/3:3週間) 大峯広尾訓練所代理出張
トンガ	1 3	5 1	6 4	語学訓練およびホームステイを各2週間実施。現地訓練の基本的システムは出来ている。 一方、隊員は「一日5時間の語学授業はハード過ぎる」とこぼしており、今後隊員をいかに学習意欲をもたせてゆくかが現地事務所の課題。
西サモア	1 1		2 5	現地事務所はニュージーランドにおける英語特別訓練の可能性調査を行っているが、先ずその方向性の可否について検討を要す。
ソロモン諸島	0 5	0 1	2 7	基本的に、現行訓練で問題ない。 大峯広尾訓練所代理出張
ヴァヌアツ	2 2	0	2 3	現在、ホームステイを実施しているのみで、系統だった語学訓練は実施していない。今後、訓練内容(訓練形式、講師選取)を充実させて行く必要がある。 現地事務所は現地語に加えて、英語、フランス語の研修をも考えているようだが、隊員にとって消化不良になる可能性もあり、慎重に検討をすすめる必要がある。

(注) 左欄3列の数字は隊員報告書に基づいて、現地語学訓練の感想アンケートを整理したものである。各国毎、上段は63/1次隊の隊員報告書分析結果、下段は最新の報告書の分析結果であるが、各国の報告書の集まり状況により、63/2、63/3、あるいは元/1のいずれれかを使った。また、「良い」と「改善要望」を加えた数が総数に満たない場合は、「コメントなし」及び「報告書未着」の数を表に載せていないことによる。

J.O.C.V. IN-COUNTRY TRAINING AS OF 30TH OCT. 1989

COUNTRY	PRE-ASSIGN. LANGUAGE TRAINING	IN-COUNTRY LANGUAGE TRAINING	TRAINING SITE IN HOST COUNTRY	PERIOD OF			
				WHOLE TRAINING	LANGUAGE TRAINING	HOME STAY	FIELD TRIP
BANGLADESH	Bengali	Bengali	J.I.C.A. Bangladesh Office	42 days	4 weeks	5 days	
BHUTAN	English	English Dzongkha	Thimphu	4 weeks	4 weeks		3 days
CHINA	Chinese	Chinese	Peking 55th Sec.School	1 month	1 month		
INDONESIA	Indonesian	Indonesian	Universitas Padjadjarang	1 month	1 month (HS)	1 month	
MALAYSIA	Malaysian	Malaysian	Malaysia Youth Association	1 month	1 month (HS)	19 days	
MALDIVES	English	Divehi	Various parts of Maldives	28 days	22 days	6 days	
NEPAL	Nepali	Nepali	Godawari area	36 days	1 month (HS)	25 days	6 days
PHILI-PPINES	English	Tagalog Cebuano Bikol Ilongo	Lake View Hotel in Los Banos	5 weeks	4 weeks		5 days
SRI LANKA	Sinhalese	Sinhalese	Colombo	4 weeks	2 weeks (HS)		5 days
THAILAND	Thai	Thai	Srinakharinwirot University	5 weeks	3 weeks	2 weeks	
SYRIA	English	Arabic	J.I.C.A. Syria Office	1 month	1 month		5 days
JORDAN							
ETHIOPIA	English	Amuhalic	J.I.C.A. Ethiopia Office	25 days	18 days		1 week
GHANA	English	English	Ghana University	1 month	17 days		10 days
KENYA	English	English	Nairobi	29 days	2 weeks	3 days	10 days
LIBERIA	English	English	Monrovia	1 month	1 month (HS)		
MALAWI	English	English Chichewa	University of Malawi	28 days	24 days		4 days
TANZANIA	Swahili	Swahili	J.O.C.V. Dormitory	4 weeks	2 weeks		2 weeks
ZAMBIA	English	English	Zambia University	5 weeks	2 weeks	1 week	1 week
ZIMBABWE	English	English	Speciss College	4 weeks	20 days		
MOROCCO	French	French	Centre Audio-visual of Modern Languages in Vichy, France	6 weeks	6 weeks		
TUNISIE							
NIGER							
RWANDA							
SENEGAL							
BOLIVIA							
COLOMBIA	Spanish	Spanish	Instituto Colectivo de Lengua Y Cultura A.C. in Mexico and others.	6 weeks	6 weeks (HS)		
PARAGUAI							
DOMINICANA							
PERU							

J.O.C.V. IN-COUNTRY TRAINING AS OF 30TH OCT. 1989

COUNTRY	PRE-ASSIGN. LANGUAGE TRAINING	IN-COUNTRY LANGUAGE TRAINING	TRAINING SITE IN HOST COUNTRY	PERIOD OF			
				WHOLE TRAINING	LANGUAGE TRAINING	HOME STAY	FIELD TRIP
GUATEMALA	Spanish	Spanish	Proyect Linguistico "Francisco Narroquin" in Guatemala	6 weeks	6 weeks (HS)		
HONDURAS							
COSTA RICA							
FIJI	English	Fijian	Suva	1 month	2 weeks	2 weeks	
P.N.G.	English	Pidgin	Wau	3 weeks	3 weeks		
TONGA	English	Tongan	Vavau	4 weeks	2 weeks	2 weeks	
W.SAMOA	English	Samoan	J.I.C.A. Office	3 weeks		3 weeks	
SOLOMON IS	English	Pidgin	Honiara	4 weeks	2 weeks	2 weeks	
VANUATU	English	Bislama		3 weeks	3 weeks (HS)	3 weeks	

Note: (HS) including Home Stay Program

各国の現地訓練
①現状と今後の課題、②現地訓練プログラム概要

1. バングラデシュ	P 75
2. ブータン	P 78
3. 中国	P 80
4. インドネシア	P 81
5. マレーシア	P 83
6. モルディブ	P 85
7. ネパール	P 87
8. フィリピン	P 89
9. スリ・ランカ	P 91
10. タイ	P 93
11. シリア	P 96
12. ジョルダン	P 98
13. エチオピア	P 100
14. ガーナ	P 101
15. ケニア	P 102
16. リベリア	P 103
17. ザンビア	P 105
18. ジンバブエ	P 107
19. フィジー	P 109
20. P. N. G.	P 111
21. トンガ	P 113
22. 西サモア	P 115
23. ノロモン諸島	P 117
24. ヴァヌアツ	P 119

	現状	問題点	改善案
<p>訓練場所・施設</p>	<p>語学訓練: A T I (農業研究所) に宿泊させてもらい HEED Language School ホームステイ: 各地のバングラデシュ人家庭 バガワツカ・初エチ・ジョフ: V E R C 研修センター</p>	<p>* 語学訓練中の4週間は、以前より協力隊の良き理解者であるA T Iの校長のご好意によりA T I宿泊施設、1グカ、約400円)にA T Iが移転するので、代替宿泊施設を探しているもの、その宿泊代は高額であり(1泊、1名、500 ユカ、約2000円) 現行の経費予想されている。 * 訓練内容とは関係ないが、語学およびコミュニケーション能力が伸び悩む隊員もいる。</p>	<p>* 1年を経過した隊員を対象として希望者にBrush Up Trainingを受講させる。 期間: 1週間程度 場所: HEED Language School</p>
<p>訓練期間</p>	<p>語学訓練: 4週間 (HEED Language Schoolおよび補習) ホームステイ: 10日間 バガワツカ・初エチ・ジョフ: 2日間 (Village Education Resource Centre)</p>		
<p>訓練内容</p>	<p>修得語学: ベンガル語 語学訓練: 午前中 HEED Language School (外国人のための語学学校) における授業。昼学中心、午後、タッカ大学日本語専攻学生による授業。より実践的な会話力向上を目標に、Roll Play および、Situational Training を盛り込む。また博物館、国会議事堂、ハザール等へ小旅行。 ホームステイ: 各地のバングラデシュ人家庭にホームステイし現地の人と生活を共にしなから生活、文化、言語を知る。 バガワツカ・初エチ・ジョフ: 現地語訓練の仕上段階として、ベンガル語でバングラデシュ事情を聞く。</p>		
<p>経費</p>	<p>US\$ 200 × 40人 × ¥ 123 = 984千円 (平成元年度予算)</p>		<p>* 経費増額を申請予定</p>

現地訓練プログラム概要

(国名：バングラデシュ 63/1)

週	6	7	8
カリキュラム	8/18 *-A374 準備 8/19~8/26 *-A374	8/27~8/28 *-A374 8/29~8/30 VERC (Village Education Resource Center) 訪問 任国事情	9/3 ~9/4 配属先挨拶 大使館表敬 協力隊受入窓口表敬 9/4 赴任前健康管理諸注意 9/5 赴任開始 (配属先によっては1週間程度の初期研修を兼ねて行う場合がある)
	8/19~8/26 *-A374	8/27~8/28 *-A374 8/28 現地集合 8/29~8/30 VERC (Village Education Resource Center) 訪問 任国事情	9/5 交通安全研修 交通安全研修 交通事情視察、故六師隊員事故現場献花
講師 (氏名及び略歴)	Mr. Karim. Mr. Haque. Mr. Bari. (Heed Language School)		
テスト内容			

記入日 (1989年8月28日)

記入者 (土井弘行)

現地訓練の現状と今後の課題

派遣第二課 (国名:ブータン)

	現状	問題点	改善案
訓練場所・施設	<p>語学訓練: ティンブー (英語) 語学教師事務所 (ソソカ語) 協力隊事務所</p> <p>オリエンテーション: 協力隊事務所</p>	<p>* ソソカ語 (6ヶ月) 以外の語学教室は無い * 在住外国人は多いが英語を母国語とするだけでなく、教授法を修得しているものは少ない。また、殆どどの教授法を修得している。 * このため教室、教師の確保が非常に難しい。</p>	<p>* 現状どおり。</p>
訓練期間	<p>全日程: 26日間 (英語) 1、5時間×13日間 語学訓練: (ソソカ語) 2時間×14日間 語学旅行: 2泊3日</p>	<p>* ソソカ語教師は学校教員、英語教師は主婦であるため、時間調整が難しい。 * クラス担当の語学学習時間の限度は人数にもよるが2時間程度と考えられ、その他の時間の活用が難しい。 * オリエンテーションは1週間程度で充分。</p>	<p>* ホームステイ (ソソカ語対象) 1週間程度を含め、訓練期間を1ヶ月とする。</p>
訓練内容	<p>修得言語: 英語、ソソカ語 在(留)外国人で教授法を修得しているもの(ソソカ語)を特別に委託。 学校のソソカ語教師を勤務時間外に特別委託して特別に委託。 事務所オリエンテーション: ブータン一般事情、活動上の留意事項、健康維持、安全対策、衛生の状況、急遽連絡員ハットアップの補足説明、その他。 関係機関オリエンテーション: 官庁、RCSC、外務省経済その他: 観光ビザ (ブータン、インド)、外人登録、銀行口座開設、テナカン等引取り、他</p>	<p>語学訓練: 教師の確保が不安定かつ困難。 (英語) * 各々のレベルの語学クラス分けは教室、教師の確保に非常に難しい。 * ソソカ語も流石前訓練で使われているものがクラス上非流石前訓練によるものが多い。レベルの差が大きい。 * 個々のレベルが着任まで分からないうちから、事前準備が難しい。また、派遣前訓練の内容で客観的、総合的、体系的判断材料とはなりにくい。 (ソソカ語) * 文法的研究、確立が滞っており、学習は一般的に丸暗記方式となる。 * 法、初心者向けの適当な教材が不足している。 * 学習から到達まで1ヶ月程度の学習により到達する必要があるため、個々の英語力により成果に差が生じる。</p>	<p>* 教授法を修得している語学教師の発掘、安定確保に努める。 * 訓練対象言語は基本言語としての英語 (隊員の英語力による)。 (英語) * 事務所としての在記の問題に対応する改善策を立てるのは難しい。 * 環境、設備、教師共に整い、学習に専念できる派遣前訓練で出来るだけ修得すること。 * 事前準備、及び体系的授業、レベルの向上を促す。 (ソソカ語) * 昨年8月の今年度、ソソカ語で10月より授業開始。12月まで授業予定。生活目標は簡単な日常会話とし、生活体験も兼ねて、ホームステイを実施する。 (場所: ソソカ語圏としてパロ県)</p>
経費	<p>US\$ 100 × 14人 × 123 = 148千円 (平成元年度予算) 英語: @Nu100/1.5H × 13 = Nu1300 ソソカ語: @Nu 810/1H × 2H × 14 = Nu2240</p>	<p>* 個人授業は非常に授業料が高くなる。</p>	<p>英語: (@Nu100/H/人) × 2H × 15日 ソソカ語: (@Nu80/H) × 2H × 15日 ホームステイ: (@Nu70/日/人) × 7日</p>

情報源 () 記入日 (1989年 8月08日) 記入者 (佐々木健一)

現地訓練プログラム概要

(国名:ブータン 元/1)

週	1.	2	3	4	5
カリキュラム	<p>7/21 12:00 加宿、飛行機移動 7/22~7/26 9:00~13:00 初エテ-ツョ、隊員会議、ヤカ ツカ根種 7/23 休日 7/27 9:00~10:30 英語学習 11:00~13:00 諸手続き、初エテ-ツョ</p>	<p>7/31~8/4 9:00~10:30 英語学習 (南川隊員のみ) 10:30~13:00 初エテ-ツョ 諸手続き 配属先挨拶</p>	<p>8/7 ~8/9 9:00~10:30 英語学習 (南川隊員のみ) 9:00~12:00 配属先初エテ-ツョ(嶺山隊員) 8/10~8/12 語学研修旅行 (ブツツツ)</p>	<p>8/14~8/15 9:00 ~10:30 英語学習 (南川隊員のみ) 9:00~12:00 配属先業務 (嶺山隊員) 8/16 9:00 ~12:00 最終初エテ-ツョ 8/17 住居引越し</p>	
	<p>7/24 14:00~16:30 任国事情 7/25~7/28 15:00~17:00 ツカ語学習</p>	<p>7/31~8/4 15:00 ~17:00 ツカ語学習 (土日休講)</p>	<p>8/7 ~8/9 14:00 ~15:00 初エテ-ツョ、諸手続き 15:00 ~17:00 ツカ語学習 (土日休講)</p>	<p>8/14~8/15 15:00~17:00 ツカ語学習 8/16 14:00~17:00 身辺整理 8/17 身辺整理、住居引越し 8/18 配属先着任</p>	
講師 (氏名及び略歴)	<p>英語: Mrs. Minerva Manandhar (日本人、元英語教師) ツカ語: Ms. Choney Doma (小学校 ツカ語教師)</p>				
テキスト 主な内容	<p>英語: English Grammar in use, On the way - Book2, 等の中から教師が抜粋 ツカ語: NSO作成テキスト 初エテ-ツョ: 日程説明、現地訓練の 考え方 任国事情: ブータンの社会文化</p>				
	同左	同左	同左	同左	
	<p>注: 同左 初エテ-ツョ: 要請背景、配属先状況 他 諸手続き: ビザ、外人登録、銀行口 座開設、他 配属先着任挨拶: 算業説明、業務 説明</p>	<p>初エテ-ツョ: 一般事情、行動上の諸 注意、各種安全対策、 緊急連絡、他 語学研修旅行: (2泊3日、ブツツツ) 諸手続き: 隊員初エテ-ツョ補足説明、 住居手配、同下見</p>	<p>初エテ-ツョ: 活動上の諸注意、ブータン 協力隊の方針、各種手 続き最終確認</p>		

(記入日1989年08月08日) 記入者 (佐々木健一)

現地訓練プログラム概要

(国名：中国 63/2)

週	1	2	3	4	5
カリキュラム	月～土 8:55～9:40 語学 10:05～10:55 語学 11:05～11:50 語学 (7/7/7)	同左	同左	同左 (金曜日に語学最終テスト)	赴任前初エディション (1日) 諸手続きについて
	PM 13:30～14:15 語学 14:15～15:25 語学	同左	同左	同左 (金曜日に語学最終テスト)	中国におけるJICA事情
講師 (氏名及び略歴)	北京市第55中学 *北京の日本人学校は、中学課程までで、それ以上の北京在留邦人の子弟は全て、この中学に通って、中国人学生と同じ授業を受けている。 何 浩平 王 増儀 社 宝葵 略歴等不明				
テキスト名 主な内容	「初級口語」 「講笑話 学漢語」 「漢語速成 (第2冊)」	同左 治政対策	同左	同左	*中国隊員の紹介

記入日 (1989年9月18日) 記入者 (中国系事務所)

現地訓練の現状と今後の課題

訓練場所・施設	現状	問題点	改善案
<p>バジャラン市内の家庭にホームステイ</p>	<p>ハジャラン市内の家庭にホームステイ</p>	<p>* 以前は先住、大卒に依頼していたが、当初は日本語の学生が来た。しかし、元平1次隊からは一般家庭になり、かなり上層クラスの家(ベント)を3台所有している(か)に変わった。また、いかに上流社会に適応するかの訓練になった。</p>	<p>* ホームステイは、基本的にごく一般クラスの学生の家が望ましい。現地訓練実施前オリエンテーションにて、医食上の注意を徹底する。 * 日本語学生の家庭ではなく、インドネシア語科の学生がある、隊員と同一分野専攻の学生にホストをお願いする。</p>
<p>1カ月間 (土日を除く)</p>	<p>1カ月間 (土日を除く)</p>	<p>* 個別語学能力の到達度にもよるが、駒ヶ根と現地訓練の反復が多くあり、隊員によっては早く任地に赴き、休暇を取りたいという進捗が遅れる。 * 派遣時期により、配属先の業務の閑閑で訓練期間を短縮せざるを得ない場合がある。</p>	<p>* 駒ヶ根との訓練内容の調整をはかる。</p>
<p>訓練内容</p>	<p>* インドネシア語 (講師: インドネシア語教授5名) 時間数: 80時間 内容: 会話 (含、発音練習)、文法、語彙、形態、動詞、疑問詞、前置詞、慣用語句、語彙他) * 任国事情 (講師5名、通訳2名) 時間数: 20時間 内容: 歴史 (4時間)、文化 (4時間)、政治 (4時間)、社会 (4時間) * ホームステイ (30日間) 課題: 1) 家族構成、極みは何か 2) 子供の遊び、若者の歴史的背景を深める。 3) 食生活について 4) 日本とインドネシアの習慣上の違いについて 5) 日本とインドネシアの社会活動、各種行事、催し物への参加</p>	<p>* 駒ヶ根での語学訓練経験評価は、現地訓練半ば頃送り出すので、現地の参考として活用できない。 * 講師も隊員訓練の進度がわからず、駒ヶ根での結局、現地訓練のやりかたがわからない。 * 内容が多岐にわたるため、5人の指導で負担を担うことが、講師同士の重複が多くなる。 * 配属先については、一刻も早く現地訓練を開始し、現地訓練の代りに現地訓練の仕事を早くこなすという意向が強い。 * 指導する方が1カ月早く現場に慣れるという意見も出ている。 * ホーム・ワークが多すぎる。</p>	<p>* インドネシア語については、駒ヶ根の語学訓練最終段階で、現地語にたいする引き継ぎが早くと、在外事務所へ送付、あるいは隊員に携行させる。 * 駒ヶ根の語学訓練カリキュラムを在外事務所へ送付し、それを元に現地語を調整を仕かせることにより、役所にカリキュラムの調整を仕かせることにより、役所にカリキュラムの調整を仕かせることにより、役所業務の調整を仕かせる。指導する側にも必要であり、5分~10分の休息を間にはさむ。</p>
<p>経費</p>	<p>RP 3,932,000 (含、交通費) 但し、ホストファミリーへの下宿代 (RP200,000) は、隊員が負担。</p>	<p>ホストファミリーへの下宿代は隊員に大きく負担。</p>	<p>現地語学訓練費から支出すべく検討中。</p>

現地訓練プログラム概要

(国名：インドネシア 元/月)

週		1	2	3	4	5
カリキュラム	AM	7/18 (火) ホームステイ先に移動 7/19 (水) 語学訓練 7/20 (木) 7:30~11:45 7/21 (金)	7/24 (月) 7/25 (火) 語学訓練 7/26 (水) 7:30~11:45 7/27 (木) 7/28 (金)	7/31 (月) 語学訓練 8/1 (火) 7:30~11:45 8/2 (水) 8/4 (金)	8/7 (月) 8/8 (火) 語学訓練 8/9 (水) 7:30~11:45 8/10 (木) 8/11 (金)	8/14 (月) 語学訓練 7/15 (火) 7:30~11:45 7/16 (水)
	PM	7/18 (火) ホームステイ先に移動 7/19 (水) 任国事情 7/20 (木) 13:00~14:00 7/21 (金)	7/24 (月) 7/25 (火) 任国事情 7/26 (水) 13:00~14:00 7/27 (木) 7/28 (金)	7/31 (月) 任国事情 8/1 (火) 13:00~14:00 8/2 (水) 8/4 (金)	8/7 (月) 8/8 (火) 任国事情 8/9 (水) 13:00~14:00 8/10 (木) 8/11 (金)	8/14 (月) 任国事情 7/15 (火) 13:00~14:00
講師 (氏名及び略歴)	*インドネシア語：パジャジャラン大学文学部教授 5名 *任国事情：講師 5名、通訳 2名					
テスト名 主要内容						

記入日 (1989年9月16日)

記入者 (インドネシア 事務所)

現地訓練プログラム概要

(国名: マレーシア 63/2)

週	1	2	3	4	5	
カリキュラム	<p>7/13 9:00 ~ 12:30 初エフ-ツヨク</p> <p>7/14 9:00 ~ 10:00 初エフ-ツヨク</p> <p>10:00 ~ 12:30 語学講師紹介</p> <p>7/15 9:00 ~ 12:00 初エフ-ツヨク</p>	<p>7/17 ~ 7/22</p> <p>8:00 ~ 12:00 語学 (7/17/18)</p> <p>9:00 ~ 12:30 語学 (英語) (7/19/20、英語、HSと並行)</p> <p>7/22 語学試験</p> <p>7/23 村人の結婚式参加</p>	<p>7/24 ~ 7/29</p> <p>8:00 ~ 12:00 語学 (7/24/25)</p> <p>9:00 ~ 12:30 語学 (英語) (7/26/27、英語、HSと並行)</p> <p>7/30 家族とすごす</p>	<p>7/31 ~ 8/5</p> <p>8:00 ~ 12:00 語学 (7/31/1)</p> <p>9:00 ~ 12:30 語学 (英語) (7/32/3、英語、HSと並行)</p> <p>8/6 家族とすごす</p>	<p>8/7 ~ 8/8 第2週と同じ</p> <p>8/9 ~ 8/11</p> <p>8:00 ~ 12:00 語学 (7/1/2)</p> <p>9:00 ~ 12:30 語学 (英語)</p> <p>8/13 赴任準備</p> <p>8/14 赴任</p>	
	<p>7/12 15:00 現地 (KL) 到着</p> <p>18:30 ~ 19:00 初エフ-ツヨク</p> <p>7/13 14:00 ~ 18:00 初エフ-ツヨク</p> <p>7/14 14:00 ~ 17:00 接種</p> <p>15:30 JICA 事務所長挨拶</p> <p>16:00 ~ 18:00 駐在員訓話</p> <p>7/15 15:00 本-エフ-ツヨク 開始</p>	<p>7/17 ~ 7/22 第2週と同じ</p> <p>12:00 ~ 19:00 親睦会説明会 (幹事会)</p> <p>交通安全講習会 (交通安全委員会)</p> <p>19:30 ~ 親睦会主催歓迎会</p> <p>7/30 家族とすごす</p>	<p>7/31 ~ 8/5</p> <p>12:00 ~ 18:00 先んじて自由行動</p> <p>夕方: 青年団との1対1交流</p> <p>夜: 青年団との文化交流 (自由参加)</p> <p>8/6 15:00 ~ 18:00 お別れ会 (村にて)</p>	<p>8/8 17:00 ~ 本-エフ-ツヨク 終了、移動</p> <p>18:00 ~ 初エフ-ツヨク</p> <p>8/9 ~ 8/11 各省、大使館表敬</p> <p>8/12 14:00 ~ 語学</p> <p>16:00 ~ 終了本-エフ-ツヨク</p> <p>17:30 ~ 茶話会</p> <p>8/13 赴任準備</p>		
講師 (氏名及び略歴)	<p>Mr. ABDUL RAHMAN BIN SALEH (57才)</p> <p>7/1- 語教育学士 1974</p> <p>Maktab Perguruan (教員養成校) 等にて、</p> <p>7/1- 語教育経験29年</p>	<p>Mr. WAN MANSOR BIN WAN DEWA (61才)</p> <p>元 言語教員養成校講師</p> <p>Maktab Perguruan (教員養成校) 等にて、</p> <p>7/1- 語教育経験28年</p>	<p>Mr. HASAN BIN MURAHAD ALI (60才)</p> <p>元 7/1- 科学大学の理事</p> <p>7/1- 語教育経験48年</p>	<p>Mr. MOHD. NADZAR BIN MOHD. SHARIFF</p> <p>語教育学士</p> <p>7/1- 語教育経験36年</p> <p>Mrs. RAJESWARY MANOHARAN (46才)</p> <p>高校英語教師</p> <p>英語教育経験25年</p>		
テキスト名	7/1- 語	英語				
主な内容	<p>現地語学講師作成教材</p> <p>7/1 柱 63-066</p> <p>元-034</p> <p>元-042</p> <p>(別添参照 元/1分)</p>	左に同じ				

現地訓練の現状と今後の課題

派遣第二課 (国名：モルディブ)

	現状	問題点	改善案
訓練場所・施設	<p>語学訓練：事務所 ホームステイ：各地方島のモルディブ家庭</p>	<p>*事務所は狭く、連絡所も兼ねているので、人の出入りも多く集中できない時もある。</p>	<p>*連絡所が移動するので、今後は空いた部屋を教室(会議室)として使える見込。</p>
訓練期間	<p>語学訓練：20日間 ホームステイ：5日間</p>	<p>*受け入れ家族が、回数が増えるたびに日本人慣れしてきて、新鮮味がなくなってきているが、近隣に人の住む島が少ないので、新しい島の開拓に苦慮している。</p>	<p>*現在ボートで3時間以内の島だけを対象にしているのが、予算が増えればスゴードボートで首都マレ島からボートで7～8時間以内の範囲まで島探しができるようになる。</p>
訓練内容	<p>修得語学：ダイヴィヒ語 語学訓練：現地人講師によるダイヴィヒ語、文法 ホームステイ：各地のモルディブ家庭にホームステイし、現地の人と生活をともにしながら、生活、文化、言語等を知る</p>	<p>語学訓練：英語の重要性を感じる (森本)</p>	<p>語学訓練：英語によるレタターの書き方、プレゼンテーションの方法など実務に沿った授業を時間外でよいから設けて頂きたい (森本)</p>
経費	<p>US\$245×17人×¥123=513千円 (平成元年度計画)</p>	<p>*スピードボートの料金が1日貸し切り(2.4時間)でUS\$1200もするため、小人数の隊次では遠い地方島のホームステイができない。</p>	

情報源 (隊員報告書 63/2次隊 & 在外事務所、平成元年度実行計画 & 現地事務所からの回答) 記入日 (1989年 8月22日) 記入者 (山上慎吾)

現地訓練プログラム概要

(国名：モルディブ63/1)

週		1	2	3	4	5
カリキュラム	AM	9:30～10:30 初級マラヤー、他 10:30～12:30 ディグヒ語訓練	10:30～12:30 ディグヒ語訓練	ホームステイ 5日間地方島に1～2名ずつ分 散して滞在する	10:00～12:00 ディグヒ語訓練	
	PM	14:00～16:00 初級マラヤー 16:00～18:00 ディグヒ語訓練	16:00～18:00 ディグヒ語訓練	ホームステイ	16:00～18:00 ディグヒ語訓練	
講師 (氏名及び略歴)		Mr. Ahmed Faliial (ユースタ、会話) Mrs. Faiyasu (ユースタ、文法) 日本語が話せる ので、講義は日本語で行なう。				
テキスト名 主な内容		JICA事務所作成テキスト (隊員OB作成) および、モルディブ製ディグヒ語 テキスト	同左	同左	同左	

記入日 (1989年8月22日)

記入者 (

現地訓練プログラム概要

(国名：ネパール)

週		1	2	3	4	5
カリキュラム	AM	カトマンドゥ近郊の村ゴゴワリ におけるホームステイ	(現地語学訓練) * 駒ヶ根で学んだ文法事項の復習・強化及び応用 * 会話訓練	(現地語学訓練) * 駒ヶ根で学んだ文法事項の復習・強化及び応用 * 会話訓練	(フィールドトリップ) * 当事務所が指定した大まかな旅行日程に従い、同業種の先輩社員や関連施設を訪ねる * 単独行、バス旅行を原則とする	(最終語学訓練) * より高度な文法事項の習得 * 手紙、公文書の書き方
	PM	同上	(現地語学訓練) * 会話訓練 * 簡易なネパールの本の読解 * ネパールの文化、社会についての紹介	(現地語学訓練) * 会話訓練 * 簡易なネパールの本の読解 * ネパールの文化、社会についての紹介	(フィールドトリップ) * 当事務所が指定した大まかな旅行日程に従い、同業種の先輩社員や関連施設を訪ねる * 単独行、バス旅行を原則とする	* VTR上映による聞き取り、会話練習 * 各隊員の会話上の弱点の補強
講師 (氏名及び略歴)		ホームステイ・ファミリー (1家庭に1家族)	Ms. リナ・サキ Ms. マチ・サキ Mr. マチ・サキ (3人とも日本語ができる)	Ms. リナ・サキ Ms. マチ・サキ Mr. マチ・サキ (3人とも日本語ができる)		Ms. リナ・サキ Ms. マチ・サキ Mr. マチ・サキ (3人とも日本語ができる)
テキスト 主な内容			* 駒ヶ根訓練所作成のネパール語テキスト * ネパールの昔話の本 * ネパールの歌(テープと歌詞)	* 駒ヶ根訓練所作成のネパール語テキスト * ネパールの昔話の本 * ネパールの歌(テープと歌詞)		* 第2週のものに加え、ネパールテレビのVTR等

記入日 (1989年8月4日)

記入者 (佐藤ゆり子)

現地訓練の現状と今後の課題

派遣第二課 (団名: フィリピン 63/3)

	現状	問題点	改善案
訓練場所・施設	<p>語学訓練: ロムニオン市、レイクビュー・ホテル 任地訪問: 各隊員任地</p>		
訓練期間	<p>修得語学: 隊員の赴任先別の語学 (クワダ語、セバ語 (セバ語)、ミナナ、ヒラ語、ヤラ語 (ヒラ語) 語学) 語学訓練: 隊員の赴任先別に分かれ、現地人講師による各語学について授業およびフィリピンの文化を学ぶ。 任地訪問: 5日間の日程で、各自、自分の任地を訪問する。</p>		<p>* 63年度1次隊から、現行の5週間 (含5日間の任地訪問) で実施している。</p>
訓練内容			<p>* 63年度1次隊の後半から、居室に電気スタンドを備え、環境改善を行なった。 * 字習室を夜間使用できるようにして、自習室に利用できるようにになった。</p>
経費	<p>US\$606×9人×¥145=790千円</p>		

情報源 (

) 記入日 (1989年 9月 1日)

記入者 (掃 葉 泰 所員)

現地訓練プログラム概要

(国名：フィリピン 63/3)

週	1	2	3	4	5
カリキュラム	<p>AM</p> <p>4/7-8: 8:00 - 10:00 . 10:30 - 12:00 語学</p> <p>4/10 - 15: 8:00 - 10:00, 10:30 - 12:00 語学 (隊員の在地別の言語)</p>	<p>4/16 身辺整理</p> <p>4/17 8:00 - 10:00 語学</p> <p>4/18 10:30 - 12:00 語学 (隊員の在地別の言語)</p> <p>4/19 13:30 - 15:30 移動</p> <p>4/20 16:00 - 17:00 語学</p> <p>4/21 13:30 - 14:00 TBA</p> <p>4/22 14:00 - 15:00 移動</p>	<p>4/23 身辺整理</p> <p>4/24-28 在地訪問</p> <p>4/29 身辺整理</p>	<p>5/1-3 8:00 - 10:00 語学</p> <p>10:30 - 12:00 語学</p> <p>5/6 8:00 - 10:00 語学</p> <p>10:30 - 12:00 移動</p>	<p>5/7 身辺整理</p> <p>5/8-11 8:00 - 10:00 語学</p> <p>10:30 - 12:00 語学</p> <p>5/12 8:00 - 10:00 語学</p> <p>5/13 9:00 - 11:00 終了式</p> <p>11:00 - 12:00 移動</p>
	<p>PM</p> <p>4/6 13:00 - 14:00 移動</p> <p>14:00 - 16:00 移動</p> <p>4/7 13:30 - 15:30 語学</p> <p>16:00 - 17:00 語学</p> <p>4/8 13:30 - 14:00 Town Building Activity (TBA)</p> <p>4/10 13:30 - 14:00 TBA</p> <p>4/11-13 13:30 - 14:00 TBA</p> <p>14:00 - 15:30 移動</p> <p>4/14-15 16:00 - 17:00 語学</p> <p>14:00 - 15:30 語学</p> <p>16:00 - 17:00 語学</p>	<p>4/17-18 13:30 - 15:30 移動</p> <p>16:00 - 17:00 語学</p> <p>13:30 - 15:30 移動</p> <p>16:00 - 17:00 語学</p> <p>4/20-21 13:30 - 14:00 TBA</p> <p>14:00 - 15:30 語学</p> <p>16:00 - 17:00 移動</p>	<p>4/30 14:00 - 15:00 移動</p> <p>15:00 - 17:00 報告会</p> <p>5/1 13:30 - 14:00 TBA</p> <p>14:00 - 15:30 語学</p> <p>15:00 - 17:00 移動</p> <p>5/2 13:30 - 14:00 TBA</p> <p>5/3 14:00 - 15:30 語学</p> <p>5/5 16:00 - 17:00 移動</p> <p>5/4 13:30 - 14:00 TBA</p> <p>14:00 - 15:30 語学</p> <p>16:00 - 17:00 語学</p>	<p>4/30 14:00 - 15:00 移動</p> <p>15:00 - 17:00 報告会</p> <p>5/1 13:30 - 14:00 TBA</p> <p>14:00 - 15:30 語学</p> <p>15:00 - 17:00 移動</p> <p>5/2 13:30 - 14:00 TBA</p> <p>5/3 14:00 - 15:30 語学</p> <p>5/5 16:00 - 17:00 移動</p> <p>5/4 13:30 - 14:00 TBA</p> <p>14:00 - 15:30 語学</p> <p>16:00 - 17:00 語学</p>	<p>5/8 13:30 - 14:00 TBA</p> <p>14:00 - 15:30 語学</p> <p>16:00 - 17:00 語学</p> <p>5/11 13:30 - 14:00 TBA</p> <p>5/9 14:00 - 15:30 語学</p> <p>16:00 - 17:00 移動</p> <p>5/10 13:30 - 14:00 TBA</p> <p>14:00 - 15:30 模擬試験</p> <p>16:00 - 17:00 語学</p> <p>5/12 13:30 - 16:00 試験</p>
講師 (氏名及び略歴)	<p>試験官:</p> <p>タガログ語: Dr. Emma F. Bernabe</p> <p>セブ語: Ms. Elda M. Montero</p> <p>イロイロ語: Ms. Lourdes B. Stevens</p>				
テキスト名 主な内容	<p>記入日 (1989年9月1日) 記入者 (稲葉 泰所良)</p>				

現地訓練プログラム概要

(国名：スリ・ランカ元/1)

週	1	2	3	4	5
カリキュラム	<p>7/20 外人登録 在ス日本大使館表敬訪問</p> <p>7/21 配属先本省表敬訪問</p> <p>7/24 配属先赴任前事前調査 現地訓練（語学）前初エフ ツヤ</p> <p>7/25 語学訓練開始</p>	<p>7/27～8/3 語学訓練 (カワトレンツツカ)</p> <p>5:30 起床</p> <p>6:00 朝礼</p> <p>7:00 朝食</p> <p>8:00～11:00 7～11ツツカ(セツカ)内</p> <p>12:00 昼食</p>	<p>8/4～8/11 語学訓練 (カワトレンツツカ)</p> <p>8/3 スツツカ (奉仕活動) *</p> <p>8/9, 8/10 旅行計画作成 (行先 通知)</p> <p>8/11 語学旅行、初エフ ツヤ</p>	<p>8/12～8/19 語学旅行</p> <p>* 8/12, 8/13, 8/14, 8/15, 8/16, 8/17, 8/18, 8/19 の各地域を7泊8日の日程で旅行する</p>	<p>8/20 赴任準備、赴任前調査</p> <p>8/21 赴任前初エフ ツヤ</p> <p>8/22 赴任開始</p>
	<p>7/19 現地若 対外援助局表敬訪問</p> <p>7/20 対外援助局表敬訪問 初エフ ツヤ</p> <p>7/21 配属先本省表敬訪問</p> <p>7/24 配属先赴任前事前調査</p>	<p>7/27～8/3 語学訓練</p> <p>13:00～15:00 * : 技術講義</p> <p>* : 現地語訓練</p> <p>15:30～ミ ツツカ</p> <p>18:00 夕礼</p> <p>19:00 夕食</p> <p>20:00 消食</p>	<p>8/4～8/11 語学訓練</p> <p>8/5 新隊員歓迎会 *</p> <p>(JOCVツツカ)</p> <p>8/9, 8/10 旅行計画作成</p>	<p>8/12～8/19 語学旅行</p> <p>8/19 午後6:00以前に帰 ツツカ 員は、戻り次第ツツカに運 絡を入れ確認をとって も らう</p> <p>* 8/5 予定であった新隊員歓迎 会は8/19ツツカにて行なわれ た。</p>	<p>8/20 赴任準備、赴任前調査</p>
講師 (氏名及び略歴)	<p>* : Mr. Abeysighe 先任隊員のツツカ、研修員経 験有</p> <p>Mr. Premaratna 農業のツツカ、日本語も教え ている詳細不明</p>				
テキスト名 主な内容	<p>7/20 初エフ ツヤ 時必要書類、物 品の配布または回収を行な う</p> <p>* : ツツカ 各自2回づつ派遣 業務に関連した講義を行なう</p> <p>* : ツツカ、日本語教師の2名 のみ、基礎ツツカを上記講師 のもと受講</p> <p>* : 教材は現地事務所作成ツツカ 付</p>				
テキスト名 主な内容	<p>* 別途ツツカ 地図参照</p> <p>赴任後1か月以内に必要書類、ア ンケート等を提出</p>				

記入日 (1989年8月22日)

記入者 (渡辺佳彦)

現地訓練の現状と今後の課題

派遣第二課 (国名：タイ)

	現状	問題点	改善案
訓練場所・施設	<p>語学訓練：チョンブリー県バンセン市スリナカリンクワンイロート大学バンセン校内理学部海洋博物館</p> <p>ホームステイ：各地のタイ人家庭</p>	<p>語学訓練：宿泊施設の環境が悪く、睡眠不足で授業が頭に入らない (門脇)</p>	<p>語学訓練：この際次の際には通りに面した部屋を確保したためうるさかったが、以後隣の部屋を確保している。主人が大変面倒臭いながらもよく暖かな交流がきている。(現地事務所)</p>
訓練期間	<p>語学訓練：3週間 (平成元年度計画、1ヶ月)</p> <p>ホームステイ：1ヶ月間</p>		
訓練内容	<p>修得語学：タイ語</p> <p>語学訓練：教室、宿泊施設借上による合宿方式で、隊員2～3名に現地人講師1名の割合で、多言語の口語、公文書用語を中心の授業</p> <p>ホームステイ：各地のタイ家庭にホームステイし、現地の人と生活をともにしながら生活、文化、言語等を知る</p>	<p>ホームステイ：ホームステイ終了時に相手に宿泊費を受け取ってくれなかった (梶田)</p>	<p>ホームステイ：これはタイ人の好意であるから、何らかの形で後でおかえしすれば良いと思われる。(現地事務所)</p>
経費	<p>US\$526×20人×¥123=1294千円 (平成元年度計画)</p>		

情報源 (隊員報告書63/1次隊&在外事務所、平成元年度実行計画&「協力隊現地訓練強化拡充計画調査」についての現地事務所からの回答) 記入日 (1989年8月21日) 記入者 (山上慎吾)

現地訓練プログラム概要

(国名: タイ 元/1)

週	1	2	3	4	5
カリキュラム	AM 7/12 現地看 7/13~7/14 赴任時初級タイ語	7/18~7/24 8:30~9:50 宿題チェック 9:50~10:10 コーヒー 10:10 ~12:00 公用語、音回し、 文法 (土日は語学講師を交えて小旅 行を行なった)	7/25~7/31 8:30~9:50 宿題チェック 9:50~10:10 コーヒー 10:10 ~12:00 公用語、音回し、 文法 (土日は語学講師を交えて小旅 行を行なった)	8/1 ~8/7 8:30~9:50 宿題チェック 9:50~10:10 コーヒー 10:10 ~12:00 公用語、音回し、 文法 (土日は語学講師を交えて小旅 行を行なった)	8/8 ~8/14 8:30~9:50 宿題チェック 9:50~10:10 コーヒー 10:10 ~12:00 公用語、音回し、 文法 8/14 大使館表敬
	PM 7/13~7/14 赴任時初級タイ語	7/18~7/24 13:00 ~14:20 討論、模擬講義 14:00 ~14:40 コーヒー 14:40 ~16:00 ティム、討論(ヒック) (土日は語学講師を交えて小旅 行を行なった)	7/25~7/31 13:00 ~14:20 討論、模擬講義 14:00 ~14:40 コーヒー 14:40 ~16:00 ティム、討論(ヒック) (土日は語学講師を交えて小旅 行を行なった)	8/1 ~8/7 13:00 ~14:20 討論、模擬講義 14:00 ~14:40 コーヒー 14:40 ~16:00 ティム、討論(ヒック) (土日は語学講師を交えて小旅 行を行なった)	8/8 ~8/14 13:00 ~14:20 討論、模擬講義 14:00 ~14:40 コーヒー 14:40 ~16:00 ティム、討論(ヒック) 8/14 初級タイ語 (土日は語学講師を交えて小旅 行を行なった)
講師 (氏名及び略歴)		Ms. Buapan (タイ、タイ語講師としての経験豊富) Ms. Sucha (タイ語講師として2回目) Ms. Gun (タイ語講師として初めてJOCV隊員に教える)	同左	同左	同左
テキスト名 主な内容					

記入日 (1989年8月 日) 記入番 ()

現地訓練プログラム概要

(国名: タイ 元/1)

週	6	7	8	9	10
カリキュラム	AM 8/16 引渡式	1ヶ月間ホームステイしながら職場に通う	同左	同左	同左
	PM 8/16 赴任開始	1ヶ月間ホームステイしながら職場に通う 1年後ブラッシュアップ (10日間)	同左	同左	同左
講師 (氏名及び略歴)					
テスト名 主な内容					

記入日 (1989年8月 日) 記入者 ()

現地訓練の現状と今後の課題

派遣第二課 (国名：シリア)

	現状	問題点	改善案
訓練場所・施設	<p>語学訓練：ダマスカスJICA事務所 語学旅行：シリア国内</p>	<p>語学訓練：隣が小学校のため、非常にうるさい。ドミニトリを宿泊場所としているので、静かに自習する場所がない。</p>	<p>語学訓練：冷房を今年6月に入れたので、多少改善されている。</p>
訓練期間	<p>語学訓練：1日3時間×1ヶ月間 語学旅行：2泊3日</p>		
訓練内容	<p>取得語学：アラビア語、シリア方言 語学訓練：シリア人講師による、午前3時間、スライド、市内見学等を含めた英語によるアラビア語の授業 語学旅行：各自計画を立て、公共交通機関を利用してシリア国内を旅行する</p>	<p>語学訓練：英語で講義がされるのだが、隊員の英語力不足のため、内容が理解できない。特に63/2次隊以降、シヨルダン隊員との合同訓練のため、人数が増え、能率的な授業運営ができない。</p>	<p>語学訓練：冷房を今年6月に入れたので、多少改善されている。</p>
経費	<p>US\$ 250 × 32人 × 月123 = 984千円 (平成元年度計画、シリア隊員19名、シヨルダン隊員13名分)</p>		

情報源 (事務所長との打合せ)

() 記入日 (1989年 7月17日) 記入者 (辻岡政男)

現地訓練プログラム概要

(国名：シリア 63/3)

週	1	2	3	4	5
カリキュラム	<p>4/3 10:00 ~13:00 初上級(初級)</p> <p>4/4 ~4/8 10:00 ~13:00 語学(初級)</p> <p>1時間に一回10分位のフリクあり</p>	<p>4/10~4/15 10:00 ~13:00 語学(初級)</p> <p>1時間に一回10分位のフリクあり</p>	<p>4/17 休日</p> <p>4/18~4/22 10:00 ~13:00 語学(初級)</p> <p>1時間に一回10分位のフリクあり</p>	<p>4/29語学研修旅行(2泊3日)</p> <p>4/24~4/28 10:00 ~13:00 語学(初級)</p> <p>1時間に一回10分位のフリクあり</p>	<p>4/30~5/1 語学研修旅行</p> <p>5/2 ~5/3 語学試験</p> <p>5/4 大使致敬</p>
	<p>4/1 現地到着</p> <p>4/2 市内見学 (事務所員が指導)</p> <p>4/8 12:00 ~14:00(*)フリク</p>	<p>4/13 12:00~14:00 フリク</p>	<p>4/20 12:00~14:00 フリク</p>	<p>4/24 12:00~14:00 フリク</p> <p>4/28 12:00~14:00 フリク</p>	
講師 (氏名及び略歴)	<p>フリク語：Ms. Maria Bahoul (1960 生) 大英文科1986卒 別添</p>				
テキスト 主な内容	<p>* スク および商店街、郵便局、博物館、山見学</p>				
		同左	同左	同左	同左

現地訓練の現状と今後の課題

派遣第二課 (国名：ジョルダン)

	現状	問題点	改善案
訓練場所・施設	<p>語学訓練：調整員事務所 (調整員自宅の一室)</p>	<p>*場所が狭くなった。</p>	<p>* 隊員連絡所兼調整員事務所の新設を申請中。</p>
訓練期間	<p>語学訓練：8日間 (集団訓練、アラビア語 2H × 8日 = 16H 英語 2H × 2日 = 4H) 2ヶ月半～3ヶ月半 (個別研修、アラビア語あるいは英語) 6日間 (中期アラビア語訓練 (希望者のみ) 年一回) 語学旅行：3日間</p>	<p>* 集団アラビア語の充実</p>	<p>* 10日間集団訓練 (アラビア語 3H × 10日 = 30H、英語 2H × 3日 = 6H)</p>
訓練内容	<p>修得語学：アラビア語、英語</p> <p>語学訓練：* ビスララ (JOCV依頼) テキストを使用して日本語が中心。講師作成の自由会話、ジョルダンの自由会話は、ジョルダンのアクセントに慣れたため、個人研修に使用したため。 * 語学訓練施設をセクターあるいは、プリティウィッシュ、カウシム、あるいはアラビア語を受講する希望者のアラビア語研修による集団訓練。後半の応用編に役立てる。</p>	<p>* 現地訓練として、英語か、アラビア語かという基本的課題がある。多くの隊員は職場で英語を使用する。しかし生活にはアラビア語が欠かせない。現地の訓練として、アラビア語の初歩の手ほどきが適当かと思わない隊員が多い。一方個別研修では、仕事に必要ない英語を取る隊員が多い。 * 個別研修 (語学施設利用) の際、自宅から通う交通費 (タクシー代) がかさむ。 * 近くに適切な語学施設がない場合もある。</p>	<p>* 8日間集団アラビア語研修を10日間に充てさせ、後には、従来通り仕事をしながらの個別研修で、本人にアラビア語から英語を選択させるのが効果的で、かつ隊員の希望に合っている。個別研修期間を長くするなどして、個別に对应する。 * 個別研修の交通費についても一部あるいは全額を補助する方向で検討する。</p>
経費	<p>* 講師礼金 230ドル (2時間 × 8日間アラビア語集団訓練)</p>		<p>* 講師礼金 430ドル (3時間 × 10日間集団訓練)</p>

記入者 (調整員)

記入日 (1989年8月20日)

情報源 (

現地訓練プログラム概要

(国名：ジョルダン 元/2～)

週	1	2	3		
カリキュラム	<p>* アラビア語基礎編：5日間 9:00～10:15 10:45～12:00 アラビア語基礎会話</p>	<p>語学旅行 (3日間)</p>	<p>* アラビア語応用編：5日間 9:00～10:15 10:45～12:00 アラビア語会話応用編 アラビア語の読み方、書き方</p>	<p>隊員活動</p>	<p>隊員活動</p>
	<p>PM</p> <p>* 初級アラビア語 * 関係機関、配属先への挨拶</p>	<p>語学旅行 (3日間)</p>	<p>* 初級アラビア語 * 英語、自由会話 (3日間) 16:30～18:30</p>	<p>* 個別研修 (7/17/18/19/20/21/22の場合) 2カ月半～3カ月 80分×3回/週×10週=40時間 レベルに合わせて、レベル～10回である。 (7/24で選ばれる)</p>	<p>* 中期アラビア語研修 (6日間) 17:00～19:00 6カ月以上の隊員を対象に応用編の続き</p>
講師 (氏名及び略歴)	<p>* アラビア語 人と結婚している日本人 婦人 (予定)</p>		<p>* アラビア語：日本人婦人 * 英語：アラビア語人</p>	<p>* 英国人講師</p>	<p>* アラビア語 人と結婚している日本人 婦人</p>
テキスト名 主な内容	<p>* 日本語のアラビア中心 * アラビア事務所で使用しているアラビア語 アラビア語利用も検討</p>		<p>* Spoken Arabic (Midad J. Goussous Ph. D. Oriental Studies)</p>		<p>* Spoken Arabic (Midad J. Goussous Ph. D. Oriental Studies)</p>

記入日 (1989年 8月20日)

記入者 (調整員)

現地訓練の現状と今後の課題

派遣第二課 (国名：エチオピア)

	現状	問題点	改善案
訓練場所・施設	語学訓練：JOCVDミトリ 語学訓練：18日間 語学旅行：1週間 (平成元年度計画、54日間)	アムハラ語のみであれば期間としては妥当であるが、文部省関係等(教室型)隊員に現地語学訓練として英語を加えるならば、別途調整が必要(但し、各隊次に常に教官型隊員がいるとは限らないため、表現が難しい)(国担コメント)	
訓練期間	修得語学：アムハラ語 現地人講師により、アムハラ語の会話、文字の読み方等についての授業および市内見学2回 語学旅行：1週間の日程で各自計画を立て、公共交通機関を利用して国内を旅行する	語学訓練：限られた期間の中で訓練だったので、会話の練習が減ってしまっている(中途半端になってしまった)(西屋) 寮で集団生活をしながらの訓練であるため授業が終われば日本語で話すため、上達しない(野田)	現地訓練：寮での集団生活ではなく、ホームステイ方式にしてはどうか(野田) [外国人のホームステイは、法律により禁止されているため、現在のところ実現は困難である。(事務所コメント)]
訓練内容		日程が調整できるのであれば、文部省関係等(教室型)隊員については、現地語学訓練として英語を加えられないものか(60/3次隊までは実施した)(国担コメント) [現地において、3週間の英語訓練を実施しても、それ程効果が期待できない。必要となるアムハラ語を少しでも修得しておく方が、より効果的であると思慮する。(事務所コメント)]	
経費	US\$130.26 × 20人 × ¥123 = 321千円 (平成元年度計画)		

情報源 (隊員報告書63/1次隊&在外事務所、平成元年度実行計画&国担コメント&現地事務所からの回答) 記入日 (1989年8月22日) 記入者 (山上慎吾)

現地訓練プログラム概要

(国名: ガーナ 元/1)

週	1	2	3	4	5
カリキュラム	AM 7/20 (木) 語学訓練 8:00 ~10:00 10:30 ~12:30 7/21 (金)	7/24 (月) 7/25 (火) 語学訓練 8:00 ~10:00 10:30 ~12:30 7/27 (木) 7/28 (金)	7/31 (月) 8/ 1 (火) 語学訓練 8:00 ~10:00 10:30 ~12:30 8/ 2 (水) 8/ 3 (木) 8/ 4 (金)	8/10 (木) 語学研修旅行 8/11 (金) " 8/12 (土) " 8/13 (日) 語学研修旅行 8/14 (月) " 8/15 (火) " 8/16 (水) " 8/17 (木) " 8/18 (金)	
講師 (氏名及び略歴)	ガーナ大学教授				
テキスト名 主要内容	語学訓練およびガーナの歴史、行政、経済、地理、文化、教育、保険衛生、農業についての講義				

記入日 (1989年8月25日) 記入者 (ガーナ 事務所)

現地訓練プログラム概要

(国名: ケニア 元/1)

週	1	2	3	4	5
カリキュラム	<p>7/18 (火) 挨拶・初打ち合わせ 7/19 (水) 大使館表敬 7/20 (木) 大蔵省表敬 7/21 (金) M.O.T.T.A.T. 訪問 7/22 (土) 自由行動</p>	<p>7/23 (日) 交通安全講習会 7/24 (月) 自由行動 7/25 (火) 初打ち合わせ 7/26 (水) 語学研修 7/27 (木) 自由行動 7/28 (金) 自由行動 7/29 (土) 自由行動</p>	<p>7/30 (日) 自由行動 7/31 (月) 自由行動 8/1 (火) 語学研修 8/2 (水) 語学研修 8/3 (木) 自由行動 8/4 (金) 自由行動 8/5 (土) 語学研修</p>	<p>8/6 (日) 自由行動 8/7 (月) 自由行動 8/8 (火) 語学研修 8/9 (水) 語学研修 8/10 (木) 自由行動 8/11 (金) 現地訓練準備 8/12 (土) 現地訓練準備</p>	<p>8/13 (日) 現地訓練準備 8/14~25 現地訓練 8/26 (土) 赴任準備 8/27 (日) 赴任準備 8/28 (月) 初打ち合わせ</p>
	<p>7/18 (火) JICA事務所訪問 所長講話・所員紹介 初打ち合わせ(事務所概 要説明・事務手続き) 7/19 (水) 昼食会・銀行手続き Survey of Kenya 訪問 7/20 (木) 初打ち合わせ 7/21 (金) M.O.T.T.A.T. 訪問 7/22 (土) 新隊員歓迎会</p>	<p>7/24 (月) 初打ち合わせ 7/25 (火) 語学研修 7/26 (水) 語学研修 7/27 (木) 語学研修 7/28 (金) 自由行動 7/29 (土) 自由行動</p>	<p>7/30 (日) 自由行動 7/31 (月) 自由行動 8/1 (火) 語学研修 8/2 (水) 語学研修 8/3 (木) 自由行動 8/4 (金) 自由行動 8/5 (土) 初打ち合わせ</p>	<p>8/6 (日) 自由行動 8/7 (月) 自由行動 8/8 (火) 語学研修 8/9 (水) 語学研修 8/10 (木) 初打ち合わせ 8/11 (金) 現地訓練準備 8/12 (土) 現地訓練準備</p>	<p>8/13 (日) 現地訓練準備 8/14~25 現地訓練 8/26 (土) 赴任準備 8/27 (日) 赴任準備 8/28 (月) 個人面接(次長)</p>
講師 (氏名及び略歴)					
テキスト名 主要内容					

記入日(1989年7月17日) 記入者(ケニア事務所)

現地訓練の現状と今後の課題

派遣第二課 (国名：リベリア)

	現状	問題点	改善案
訓練場所・施設	<p>語学訓練：モロビ ホムガイ：ボニア・スカエラ地区のリアラ家庭</p>		
訓練期間	<p>語学訓練：1週間 ホムガイ：3日間 リアラ文化講座：2日間 国内旅行：10～14日間</p>		<p>* 学校開校時期が3月～12月のため、理数科教師隊員は、国内旅行が時間的に無理。</p>
訓練内容	<p>格得語学：英語 (ライビア/リビア) 語学訓練：現地人講師による、野外訓練を交えた授業 ホムガイ：ボニア地区のリアラ家庭にホムガイし、現地の人と生活を共にしながらリアラの生活、文化、言語を知る。 リアラ文化講座：リアラの歴史、文化、経済等を識者に開講。 リアラ文化講座：結核・エイズ、約12kmを歩く、途中の村でホムガイを取り戻している場所や、ホムガイに河を渡る場所がある。</p>	<p>* 隊員自身の語学力に合わせた内容にしないと理解度が低いものとなってしまふ。 * 乾期の間しか実施できない。</p>	<p>* 語学訓練：特微的なライビア/リビアを抜かし、語彙を作成すればもっと効果的に覚えられるのではないか。(大野) * 次回はリアラ外等の資料を用意し、事前に理解度を高める様手配する。</p>
経費	<p>US\$269×18人×¥123=595千円 (平成元年度計画)</p>		

情報源 () 記入日 (1989年 8月18日) 記入者 (リベリア 劉 巻 貞)

現地訓練プログラム概要

(国名：リベリア 1/1)

週	1	2	3	4	5
カリキュラム	7/15 (土) リベリア省・外務省・ 7/17 (月) 日本大使館・外務省・ 経済計画省表敬訪問 7/18 (火) 配属省庁表敬訪問 7/19 (水) リベリア省 7/20 (木) LIBERIAN ENGLISH 2	7/21 (金) LIBERIAN ENGLISH 4 7/23 (日) 隊員総会 7/25 (火) LIBERIAN ENGLISH 5 7/26 (水) 隊員総会打ち上げ 7/27 (木) LIBERIAN ENGLISH 6	7/28 (金) LIBERIAN ENGLISH 8 7/31 (月) LIBERIAN ENGLISH 9 8/1 (火) LIBERIAN ENGLISH 11 8/2 (水) リベリア文化講座 8/3 (木) リベリア文化講座	8/7 (月) ~10 (木) リベリア	8/11 (金) リベリア・国内旅行 8/12 (土) ~8/17 (木) 国内旅行
	7/14 (金) リベリア省 7/17 (月) リベリア省 7/18 (火) 配属省庁表敬訪問 7/19 (水) LIBERIAN ENGLISH 1 7/20 (木) LIBERIAN ENGLISH 3	7/22 (土) リベリア協力隊10周年記念 パーティ 7/23 (日) 隊員総会 7/26 (水) 隊員総会打ち上げ 7/27 (木) LIBERIAN ENGLISH 7	7/31 (月) LIBERIAN ENGLISH 10 8/1 (火) LIBERIAN ENGLISH 12 8/2 (水) リベリア文化講座 8/3 (木) リベリア文化講座	8/7 (月) ~10 (木) リベリア	8/11 (金) リベリア・国内旅行 8/12 (土) ~8/17 (木) 国内旅行
講師 (氏名及び略歴)	リベリア省: 吉村 稔 植田 靖彦 宮本 妙子	* LIBERIAN ENGLISH 1 - 12 Mrs. Zoe REYNOLDS Miss Lianon Doe		* リベリア リベリア省: 星野隊員 リベリア村: 佐藤隊員	国内旅行
テキスト 主な内容	一般注意事項	リベリア英語の基本 会話例 Field Trip (郵便局・大学・村々 ・買物・銀行口座開設等)		村の生活 (2泊3日)	2週間 (但し、学期の都合上、教師隊員はそのまま赴任し、休暇を利用して行なう。)

記入日 (1989年8月18日)

記入者 (リベリア編纂者)

現地訓練の現状と今後の課題

	現状	問題点	改善案
訓練場所・施設	<p>語学訓練: ルサカ・ザンビア大学教育学部 ホームステイ: 各地のザンビア人宅</p>	<p>* 大学内の教室は常にFロ11の為、学校の休み中に訓練日程を合わせているのが現状で、2週間以上は問題がある。</p>	
訓練期間	<p>語学訓練: 2週間 (10日間、土日を除く) ホームステイ: 8泊9日 (往復に2日を費やす)</p>		
訓練内容	<p>修得語学: 英語 語学訓練: ザンビア大学にてザンビア人講師による実践的な日常会話練習及び、レポートの書き方練習等。 ホームステイ: 各地のザンビア人家庭にホームステイし、現地の人と生活を共にしながら生活・文化・言語を知る。</p>	<p>(語学訓練) * ザンビアの場合、1回に17~20名の隊員を訓練しているが、講師の確保が困難な為隊員のレベル別クラス分けが難しく、訓練時間が少ないなどの課題がある。 * 語学に熱心な隊員より、訓練時間が少ないなどの意見もあられる。 * 現在は、隊員連絡所に宿泊、歩いて10分のザンビア大学に通学という形をとっているが、連絡所が手狭であり長期に渡りグループで生活する事はマイナスイメージがある。</p>	<p>(語学訓練) * ホームステイを現在の通り2週間とするなら、ルサカでは有量な寮を確保し、研修も兼ねられる。(要検討) * 現在は、大抵個人に委託しているが、大学当局を通じて委託する事により、大学の協力を得るといった方向に持っていきたい。</p>
経費	<p>US\$ 152 × 17人 × ¥ 123 = 318千円 (平成元年度計画) 元年1次隊実績17人 講師謝金 @ K 8000 × 3人 = K 24000 教室賃借料: K 1800 ホームステイ交通費: K 4526.70 ホームステイ謝金: @ K 150 / 1戸 × 16人 = K 2400 会議費 (懇親会) K 8520.90 計 K 41247.60</p>	<p>* 講師謝金の値上げ要求が強い。 * 講師の人材難。</p>	

情報源 (佐藤 啓子)

記入者 (佐藤 啓子)

記入日 (1989年 8月29日)

(網 登 真)

現地訓練プログラム概要

(国名：ザンビア 1/1)

週	1	2	3	4	5
カリキュラム	<p>AM</p> <p>7/15 現地到着オリエンテーション 7/14 銀行・Tax Clearance 手続 7/18 伊ソワ・ソワ (所長) 7/19 伊ソワ・ソワ (大芝) 7/20 英語語学研修 (1) 7/21 " (2)</p> <p>PM</p> <p>7/17 郵便局・買物 7/18 伊ソワ・ソワ (小嶋) 7/19 " (佐藤) 7/20 英語語学研修 (1) 7/21 " (2)</p>	<p>7/24 (3) 7/25 (4) 7/26 (5) 7/27 (6) 7/28 (7)</p> <p>英語語学研修 9:00 - 11:00 "</p>	<p>7/30 新隊員歓迎ワトホ大会 7/31 (8) 8/1 英語語学研修 (9) 8/2 (10) 9:00 - 11:00 各種手続き (I/D取得等) 8/3 " 8/4 "</p>	<p>8/7 ~ 8/13 現地訓練ホ・ムツィ</p>	<p>8/14 ~ 8/15 現地訓練ホ・ムツィ 8/16 仮免許手続き 8/17 初ソワ・ソワ (ワシバ人) 8/18 配属先H.O.挨拶 及び赴任開始</p>
講師 (氏名及び略歴)	<p>Dr. T. CHISANGA ワツ 大学教育学部講師</p> <p>Ms M. MACHILA ワツ 大学教育学部講師</p>	<p>Mr. J. LUANGALA ワツ 大学教育学部講師</p>			
テキスト名 主な内容	<p>語学研修 (1) ~ (5) においては、 各自の紹介、問題の解決に当たっ てのロ・ソワを中心に講義をしてい る。</p> <p>語学研修 (6) ~ (10) においては、 ワー・作成、レポートの作成を中心に講 義及び作成練習。 最終日に英文の練習レポートを作成発 表。</p> <p>注) 使用する資料は事務所の作成 したもので、講師が作成したもの ではないので念のため。</p>				

記入日 (1989年8月29日) 記入者 (佐藤 善子四郎氏)

	現状	問題点	改善案
訓練場所・施設	スベシス・カレッジ (秘書課・コンピュータ課・英語課等を有する専門学校)		
訓練期間	週5日 4週間 週20時間 計80時間 自習時間2時間/日	* 日本での訓練との連続性	* 試験問題、試験結果をJOCVE事務所へ送付。現地語学習訓練の担当講師の参考にする。
訓練内容	毎日、8:30~12:30まで4時間の集中講義 1クラス5名まで (JOCVEのみの場合)	* 受身の受講に陥る可能性大 * 座有数が少ない様次の場合、訓練形態を変える必要有り。	* グループレッスンにこだわらない。
経費	Z\$ 1,200/人 (Rate US\$=0.4496)		

情報源 (スベシス・カレッジ) 記入日 (1989年 9月10日) 記入者 (桶田 武司 調整員)

現地訓練プログラム概要

(国名：ジンバブエ)

週	1	2	3	4	5
カリキュラム	英語座学 8:30~12:30 SPECISS COLLEGE 入所時語学力判定テスト 週末向上度判定テスト 週20時間	同 左 向上度判定テスト	同 左 向上度判定テスト	同 左 総合テスト	達成度の低い者のみ訓練 個人教授形式またはそれに近い形式
	大使館表敬 任国事情 諸手続き 自習	自習	自習	配属先表敬 自習	
講師 (氏名及び略歴)	未定				
テスト名 主な内容	隊員の語学力に合わせ選択				

記入日 (1989年9月10日)

記入者 (稲田 武司 副班員)

現地訓練の現状と今後の課題

派遣第二課 (国名: フィジー)

		現状	問題点	改善案
訓練場所・施設		<p>語学訓練: JICA オフィス ホームステイ: フィジー各地のインド人家庭とフィジー人家庭</p>		
訓練期間		<p>語学訓練: 2週間 (英語: 24時間、現地語: 12時間) ホームステイ: インド人家庭1週間、フィジー人家庭1週間</p>	<p>語学訓練: 期間が短い (三次) ホームステイ: 1週間は長い (小野寺)</p>	<p>ホームステイ: 5日間程度でよいのではないか (小野寺)</p>
訓練内容		<p>修得言語: 英語、フィジー語、ヒンディー語 語学訓練: 英語、フィジー語、ヒンディー語、インド人、インドネシア文化とフィジー語6時間の講義 ホームステイ: インド人、フィジー人家庭に各1週間ずつホームステイし、現地の生活、文化、言語を知る</p>	<p>語学訓練: 広域との関係ができていない (三次) ホームステイ: 安全でホームステイ慣れしていない家庭を採すのはかなり困難 (調整員)</p>	<p>語学訓練: 英語訓練は、文法よりも会話中心にしたほうがいいのではないか (服部) フィジー語、ヒンディー語、インドネシア語の文字レベリングにより、講師がカリキュラムを決めて実施している (調整員) ホームステイ: 女性隊員もどんどん村の生活に入っていくべきだと思う (服部) 知人等をアレクサンダーに頼り、先住隊員で生活する人の家庭になる場合も多い (調整員)</p>
経費		<p>US \$650 × 17人 × ¥123 = 1,370千円 (平成元年度計画)</p>		

情報源 (隊員報告書 6.3 / 2次隊 & 在外事務所、平成元年度実行計画 & 「協力隊現地訓練強化補充計画調査」についての現地事務所からの回答) 記入日 (1989年8月21日) 記入者 (山上航喜)

現地訓練プログラム概要

(国名：フィジー 63/2)

週	1	2	3	4	5
カリキュラム	<p>現地訓練に先立ち、総合オリエンテーションを3日間行う</p> <p>午前中2時間英語講習 フィジー語講習</p>	<p>午前中2時間英語講習 ヒンディー語講習</p>	<p>ホームステイ (インド人家庭)</p>	<p>ホームステイ (フィジー人家庭)</p>	
	<p>午後2時間英語講習 フィジー語講習</p> <p>(英語：14時間 フィジー語：6時間)</p>	<p>午後2時間英語講習 ヒンディー語講習</p> <p>(英語：10時間 ヒンディー語：6時間)</p>	<p>ホームステイ (インド人家庭)</p>	<p>ホームステイ (フィジー人家庭)</p>	
講師 (氏名及び略歴)	<p>オーストラリア人(女性) (インターナショナルスクール教師)</p> <p>アメリカ人(男性) (インターナショナルスクール教師)</p>	<p>平成元年度1次隊からはフィジー人の女性に変更になった</p> <p>同左</p>			
テキスト 主な内容	<p>英語：講師が準備するプリント類、教材は隊員の語学レベルに応じて準備され、特定のテキストは使用していない。</p>				

記入日 (1989年08月08日)

記入者 (山上誠吾)

現地訓練の現状と今後の課題

(国名: PNG 01/1)

	現状	問題点	改善案
訓練場所・施設	モロベ州・ワウ、ワウ生態学研究所・レクチャールーム 小型飛行機でポートモレスビーから約1時間、標高1200 mに位置する。気候、環境とも語学訓練には最適で、治安も特に問題がない。宿泊も同研究所敷地内のホテルを使用、炊事場と食堂が共同でありホームステイの感もある。近所の村での生活体験も可能。		
訓練期間	語学訓練期間3週間 ワウには25日間滞在		
訓練内容	修得語学: ビザン語 ①ビザン語の基礎単語 ②ビザン語の基本構文 ③英文からビザン語への変換 ④会話練習 ⑤テーマ学習 「日本とPNGの文化の違い」等 ⑥野外研修 マーケットでの買い物、Mt. Kaindi 登山、現地料理調理、ワウ周辺探検(国立公園、動物園、製糖所見学等)、Kaiseni 村訪問、スポーツ ⑦自由作文 前半は市販のテキストにそって授業が進められ、後半はディスカッション、作文、野外研修に重点をおいての訓練。		
経費	US\$ 1 015 × 7人 × ￥ 123 = 874千円 K 150 交通費		

記入者 (JOCV調整員 丸田)

記入日 (1989年 8月15日)

)

情報源 (事務所調査、01/1隊員)

現地訓練プログラム概要

(国名: PNG 01/1)

週	1	2	3	4	5
カリキュラム AM	7/21 08:30~11:30 4/11/7/21/27	7/24~28 08:30~11:30 語学 (ビネ語) 29 野外出訓練 (マウナ)	7/31~8/4 08:30~11:30 語学 (ビネ語) 5 野外出訓練 (マウナ)	8/7 野外出訓練 (Mt. Kaindi) 8 野外出訓練 (Kaisemik村) 8/9~11 08:30~11:30 語学 (ビネ語) 12 野外出訓練 (マウナ)	8/14 11:25 木村由紀子君
	7/20 13:20 夕食 14:00~16:00 日程説明会 7/21 13:00~16:00 4/11/7/21/27	7/24~28 13:00~15:00 語学 (ビネ語) 29 野外出訓練 (マウナ)	7/31~8/4 13:00~15:00 語学 (ビネ語) 5 野外出訓練 (ウ高辺探検)	8/7 13:00~15:00 語学 (ビネ語) 8 野外出訓練 (Kaisemik村) 10 野外出訓練 (ウ高辺探検) 8/11 13:00~15:00 語学 (ビネ語)	
講師 (氏名及び職歴)	HELEN YAMU (現YMCA教師)				
テキスト名 主な内容	①A Programmed Course in New Guinea Pidgin (ビネ語) 2本付 単語、例文を英語と比較しながら簡単な文法を学ぶためのテキスト ②Dacaranda Dictionary and Grammar of Melanesia Pidgin 英語とビネ語の辞書				

記入日 (1989年 8月15日) 記入者 (JOCV副団員 丸田)

現地訓練の現状と今後の課題

派遣第二課 (国名: トンガ)

	現状	問題点	改善案
訓練場所・施設	<p>語学訓練: 連絡事務所 ホムアライ : 207名 (2名) / 407名 (3名)</p>		
訓練期間	<p>語学訓練: 15日間 ホムアライ : 11月12日</p>	<p>* 特になし。訓練期間については、正味活動期間・前任隊員との引き継ぎを考えると、現行で最大限である。</p>	
訓練内容	<p>修得言語: トンガ語 「Intensive Course in Tongan」と「Dictionary」2冊を教材として使用。現地訓練用・独習用として、連絡事務所各10冊常備。カ語修得読本としては唯一のものであり、独習者に評判が良い。130科中、訓練中にはほぼ3分の1を修得する。 ホムアライ: 隊員の知り合いを通して受入先を探している。トンガで比較的村落部・離島の生活を見聞・体験し、トンガ語の修得を目指す。</p>	<p>* 特になし。「Intensive」を全科独力で消化すると、約1年を要す(隊員談)。このことであり、現行の15日間で導入部の3割を修得させ、あとは必要に応じて独習とする。 * 余力のある者には派遣前訓練中に、トンガ語に触れさせてもらいたいので、訓練所資料室に教材2種各5部ずつ送付した。</p>	
経費	<p>T \$ 356.20 × 5人 = 193千円 (63/3次隊)</p>		

情報源 (

記入者 (安部 調整員) 記入日 (1989年 8月23日)

現地訓練プログラム概要

(国名: トンガ 63/3)

週	1	2	3	4	5
カリキュラム	AM 4/3 トンガ 若 4/4 事務所 (於事務所) 4/5 トンガ 語講習 4/6 } 8:30 ~12:30 4/7 } 終日自由 4/8 } 4/9 }	4/10 } 4/11 } トンガ 語講習 4/12 } 8:30 ~12:30 4/13 } 4/14 } 終日自由 4/15 } 4/16 }	4/17 } 4/18 } トンガ 語講習 4/19 } 8:30 ~12:30 4/20 } 4/21 } 終日自由 4/22 } 4/23 }	4/24 } トンガ 語講習 8:30 ~12:30 4/25 } 4/26 } トンガ 若 11 泊12日 4/27 } 島 2名 4/28 } 島 3名 4/29 } 4/30 }	5/1 ~5/8 トンガ 若 5/9 若任
	PM 4/5 } 4/6 } トンガ 語講習 4/7 } 13:30 ~14:30 4/8 } 農林水省表敬 4/9 } 終日自由 4/9 }	4/10 } 4/11 } トンガ 語講習 4/12 } 13:30 ~14:30 4/13 } 4/14 } 教育省表敬 4/15 } 終日自由 4/16 }	4/17 } 4/18 } トンガ 語講習 4/19 } 13:30 ~14:30 4/20 } 4/21 } 終日自由 4/22 } 4/23 }	4/24 } トンガ 語講習 13:30 ~14:30 4/25 } 4/26 } トンガ 若 11 泊12日 4/27 } 島 2名 4/28 } 島 3名 4/29 } 4/30 }	5/1 ~5/8 トンガ 若 5/9 若任
講師 (氏名及び職歴)	Mrs. Jackie FA'ANUNU (農林水省次官夫人, 米国人)				
テキスト名 主な内容	「INTENSIVE COURSE IN TONGAN」 「DICTIONARY TONGAN-ENGLISH, ENGLISH-JAPANESE」				

記入日 (1989年8月23日)

記入者 (安部 潤雄氏)

現地訓練の現状と今後の課題

派遣第二課 (国名: 西サモア)

	現状	問題点	改善案
訓練場所・施設	ホームステイ: 西サモア各地の現地人家庭	* 国内では英語教師、訓練施設等適切なものがない。 * ホームステイでも英語力の向上を目指すには適切でない。 * 任国で英語の訓練を強化するより、英語の学習に相応した場所で英語の訓練を強化するほうが望ましいと思う。	語学訓練: ニュージーランドでの英語特別訓練を検討している(事務所) * これまでも何年にもわたり国内での訓練の試行を実施してきたが、これまでも西サモアには適切な英語の訓練施設はない。英語の訓練は公文書や英語で作成する必要がある。かつ町では英語よりも英語が飛び交っており、またホームステイ先でも英語を話せる人が限られている。 * 将来ニュージーランドで日本での訓練カリキュラムと整合した訓練を行わない。現在 Auckland Technical Institute および Wellington Polytechnic と交渉中。 * 日本での訓練期間を短縮し、現地2か月間の訓練を実施することでも考えなく、その成果が期待できるのを見込んでおきたい。 * ニュージーランドで訓練カリキュラムをしっかりと作成した場合であると考えられる。 * 現在のホームステイ方式を行わないが、語学力の向上を自指すには、隊員の使用言語により英語、サモア語の教科書、教材の作成および隊員1人ひとりの人々と関わらなければならない。 * 西サモア国内で1か月の現地訓練で語学力の多様な向上を希望するに十分なレベルがあり、英語の訓練は、英語文化圏であるニュージーランドで集中訓練もしく、現地の訓練だけではない。 * 隊員の不断の努力も必ず必要となる。現地の訓練終了後の語学習得支援がますます重要になる。当事務所としては、関係機関と連携し、継続的な成果の出せざるを得ない。また、隊員には支援プログラムを検討したいと思っております。隊員には相応の努力と成果、支出を求めるとともに支援も考えたい。
訓練期間	ホームステイ: 3週間 (平成元年度計画、25日間)		
訓練内容	修得語学: 英語、サモア語 ホームステイ: サモア家庭にホームステイし、現地の生活、生活、文化、言語を知る	* ホームステイの方式は英語力の向上を目的とした訓練として24時間英語に集中する意味で望ましいと思われ、各手委員が勤務先で必要とされる通訳、会話、学校では難しいものを習得しており、隊員から英語の特色を生かした訓練として、又、隊員の活用に要求される責任のうちに、人・物・物の訓練という観点から今後共に継続したいと考えている。しかし、公用語は英語となっており、英語を話せるサモア人が少ない。	
経費	US\$120×19人×¥123=280千円 (平成元年度計画)		

情報源 () 記入日 (1989年 8月31日) 記入者 (西サモア事務所)

現地訓練プログラム概要

(国名：西サモワ)

週		1	2	3	4	5
カリキュラム	AM	外務省表敬 銀行口座開設 ホームステイ	ホームステイ	ホームステイ	任国事情オリエンテーション 事務手続 交通安全 ホームステイ 健康管理 所長オリエンテーション etc	
	PM	現地訓練オリエンテーション アナカン引取り説明 ホームステイ	ホームステイ	ホームステイ	イングリッシュ接種 ホームステイ	
講師 (氏名及び略歴)						
テキスト名 主な内容						

記入日 (1989年 8月30日)

記入者 (西サモワ事務所)

現地訓練の現状と今後の課題

派遣第二課 (国名：ソロモン諸島)

	現状	問題点	改善案
訓練場所・施設	<p>語学訓練：ホニアラ (JOCCV事務所) ホームステイ：ソロモン語島各地の現地人家庭</p>	<p>ホームステイ先の確保が多少難しくなってきた。同一部落に繰り返し依頼すると、部落の慣習等に影響を与えかねないので避けている。</p>	<p>当面、地方在住隊員、JICA研修員OBの協力を得てホームステイ先の確保に努める。</p>
訓練期間	<p>語学訓練：2週間 ホームステイ：2週間</p>	<p>任地で1ヶ月間の訓練を行なうには時間が長すぎる。配属先および前任隊員から早期業務の開始を希望する声がある。</p>	<p>ケースに応じてホームステイの期間を短縮する等で対応している。隊員の任国内での任期の一律1ヶ月間の延長は不可か。</p>
訓練内容	<p>修得言語：ビジン英語 語学訓練：ホニアラにて2週間のビジン語の研修 利用インターン(調整員)： <ul style="list-style-type: none"> ： 任国内事情と要請背景 ： 業務内容と報告義務 ： 隊員の援助のしくみ ： 日本のその他 </p> <p>ホームステイ：ソロモン人家庭でホームステイし、現地の人と生活をともにしながら生活、文化、言語を知る <ul style="list-style-type: none"> ： ソロモンの伝統社会、文化の習得 ： ソロモンの実生活の体験 ： 地方の報道 </p>	<p>1、 隊員としての心構えができていないまま派遣されてくる者が多く、二週間の準備期間となつていく。少なからずとも隊員の守るべきこと(報告・生活態度)は徹底願いたい。</p> <p>2、 多額な金品、不要な贅沢品を所持してくる隊員が目につく。ホームステイに持っていきたくないものに配慮して制限し、伝統社会に影響を与えないように配慮しているが、派遣前訓練で周知徹底してほしい。</p> <p>3、 国際情勢、開墾協力、文化伝承、南北問題、時事問題等に著しく無知無関心な隊員が多い。訓練以前の問題かもしれないが困った風潮である。</p>	<p>派遣前訓練と現地での訓練により一貫性を持たせる必要がある。現地での訓練は、即戦的なものにしていくので隊員としての心構えさえ出来ていればかなりの効果が期待できる。</p>
経費	<p>US\$200×14人×¥123=345千円 (平成元年度計画) ホームステイのみ支給 交通費 US\$100 + 弁当 US\$5 + 教材費 US\$10 =US\$115</p>		

情報源 (「協力隊現地訓練強化拡充計画調査」についての現地事務所からの回答)

記入日 (1989年08月08日) 記入者 (中村正明)

現地訓練プログラム概要

(国名：ソロモン)

週	1	2	3	4	5
カリキュラム	<p>初日は調整員によるオリエンテーション</p> <p>8:30～12:00 EFL英語講習</p>	<p>8:30～12:00 EFL英語講習</p>	<p>ホームステイ</p>	<p>ホームステイ</p>	
	<p>13:00～15:00 EFL英語講習</p> <p>15:00より必要に応じて上記オリエンテーションの予備時間にあてている。</p>	<p>13:00～15:00 EFL英語講習</p> <p>(EFL英語研修中にJICA研修員OBと懇談会)</p>	<p>ホームステイ</p>	<p>ホームステイ</p>	
講師 (氏名及び略歴)	<p>Mr. Dixon NALO JOCV現地職員 元77期カベスコのEFL英語講師</p>	<p>同左</p>			
テキスト 主な内容	<p>JICA事務所作成テキスト 現在印刷製本中</p> <p>オリエンテーションの内容</p> <ul style="list-style-type: none"> ・協力の心構え ・業務内容と要請背景 ・隊員の報告義務 ・日本の援助 				

記入日(1989年08月08日)

記入者(中村正明)

現地訓練の現状と今後の課題

派遣第二課 (国名: ヴァヌアツ)

	現状	問題点	改善案
訓練場所・施設	ホームステイ (含語学訓練): ヴァヌアツ各地の現地人家庭	* ホームステイ家庭により、講師としての質のばらつきがある。	* 南太平洋大学のエクステンションコースのビスマラマ語の講師による集中講座を受講させ、その後ホームステイ形式の訓練を実施する方向で、現地訓練を考慮中。
訓練期間	ホームステイ (含語学訓練): 3週間	* ビスマラマ語だけでなく3週間で充分であるが、これに英語を入れると不十分と思われる。	語学訓練: 3週間 (ビスマラマ語) ホームステイ: 1週間
訓練内容	修得語学: ビスマラマ語 ホームステイ (含語学訓練): ヴァヌアツ人家庭でホームステイし、現地の人々から生活、文化、言語を知る オリエンテーション: 着任後3日間は、オリエンテーションを実施 (配属先受入窓口への表敬訪問、交通安全講座、任国オリエンテーション等)	* ビスマラマ語の集中講座だけでなく、配属先によっては、英語または仏語が必要になってくる可能性がある	* ビスマラマ語と並行して、英語と仏語の講座を実施することが可能か、検討中。
経費	US\$250 × 2人 × 123 = 61千円 (平成元年年度計画)		

情報源 () 記入日 (1989年8月31日) 記入者 (谷口世志子)

現地訓練プログラム概要

(国名：ヴァヌアツ 63/1)

週	1	2	3	4	5
カリキュラム	AM 着任後3日間は、配属先、受入窓口機関表敬訪問、任国初インフォ、交通安全講座 ホームステイ (含語学訓練)	PM ホームステイ (含語学訓練)	AM ホームステイ (含語学訓練)	PM ホームステイ (含語学訓練)	
講師 (氏名及び略歴)	ホームステイ先家族より、ビスラマ語を習いながら、ヴァヌアの生活文化を知る ホームステイ (含語学訓練)	ホームステイ先家族より、ビスラマ語を習いながら、ヴァヌアの生活文化を知る ホームステイ (含語学訓練)	ホームステイ先家族より、ビスラマ語を習いながら、ヴァヌアの生活文化を知る ホームステイ (含語学訓練)		
テキスト名 主な内容	「BISLAMAMA」 An introduction to the national language of Vanuatu.				

記入日 (1989年 8月31日)

記入者 (谷口世志子)

他のボランティア現地訓練
(①現状、②経緯、③将来計画)

1. バングラデシュ	P 122
2. ブータン	P 122
3. 中国	P 122
4. インドネシア	P 123
5. マレーシア	P 123
6. モルディブ	P 123
7. ネパール	P 123
8. フィリピン	P 124
9. スリ・ランカ	P 124
10. タイ	P 124
11. シリア	P 125
12. モロッコ	P 125
13. チュニジア	P 125
14. ガーナ	P 125
15. ケニア	P 125
16. リベリア	P 126
17. マラウイ	P 126
18. ニジェール	P 126
19. セネガル	P 126
20. ルワンダ	P 127
21. タンザニア	P 127
22. ザンビア	P 127
23. ジンバブエ	P 128
24. ボリヴァ	P 128
25. コスタリカ	P 128
26. トミニカ	P 129
27. ベルー	P 129
28. ジャマイカ	P 129
29. パラグアイ	P 130
30. グアテマラ	P 130
31. フィジー	P 130
32. P. N. G.	P 131
33. 西サモア	P 131
34. ノロモン諸島	P 131
35. ヴァヌアツ	P 132
36. ミクロネシア連邦	P 132

他国のボランティアイ派遣機関の現地訓練の実施調査

国名・派遣機関名	訓練時期	訓練期間	訓練場所及び施設概要	訓練プログラム	訓練スタッフ数
ベトナム・VSO	赴任の都度	10～12週間	ヒート語学センター。外国人のためにベトナム語を教えている学校	目的：現地語の習得と現地生活への適応 内容：着任1週間後からベトナム語訓練8～10週間 着任後1週間は、市内見学や買い物等のオリエンテーション	1名
	CONCERN 希望があれば実施	特定なし	共同生活をしている施設	原則として現地訓練は行っていない。希望者には、共同生活をしていく施設で午後4時から、現地人スタッフがベトナム語を教えている。	1名
アメリカ・VSO	年3～4回	4週間	SNV宿泊所及び事務所、または語学講師宅	語学訓練：3週間。任地に依りてゾンカ語、シャーン語、英語等を午前、午後各3時間。 任国事情：6～8週間。一般事情及び行動上の諸注意 *タリ：1週間。語学訓練及び生活体験。	駐在員1名 語学別に講師を委託
	年4～5回	5週間	事務所または語学講師宅	語学訓練：5週間。任地に依りてゾンカ語、ネパール語、シャーン語、英語等を午前、午後各5時間。 任国事情：10～12時間。一般事情、政府機構、行動上の諸注意。	駐在員1名 *タリ1名、語学別に講師を委託
中国・VSO	年2回（8月・2月）	3～4週間	北京経済管理学院	文化系隊員：日常中国語会話3～4週間、専門用語中理科系隊員：日常中国語会話3～4週間、専門用語中国語会話6～7週間 本国で出発直前に2～3週間中国語会話の訓練を受ける。	生徒8名1グループにたいし2名の講師を配
	随時	随時	自主訓練	200USD現地事務所より支給し、各自が自主訓練を行う。	なし

他国のボラチニア派遣機関の現地訓練の実施調査

国名・派遣機関名	訓練時期	訓練期間	訓練場所及び施設概要	訓練プログラム	訓練スタッフ数
インドネシア	赴任の都度	6—8週間	Realia Indonesia Language Course, Yogyakarta	1日6時間、6週間、計180時間の講義を行う。インドネシア語の訓練の他、ボラチニア活動を行う。インドネシア語(商業・エンジニアリング・医療・農業)のプログラムも組まれている。	担当スタッフ1名 語学講師10名
	赴任の都度	8週間	Realia Indonesia Language Course, Yogyakarta	カナダでの10日間のガイダンスを経て、8週間上記VSOと同じ語学学校でのインドネシア語訓練をホームステイを組み合わせている。着任後、1年以内に更に2週間の補修を本人が作成したプログラムに従って行う。方言が業務上必要な場合は、個人的に講師を探し学習するシステムもある。	スタッフ1名
マラカ	年2回派遣直後	10週間	マラカの民家を改造した宿舍	目的：マラカ語の習得と任事情の紹介 内容：マラカ語8週間(240時間)、オリエンテーション1週間、村落でのホームステイ1週間。任事情ではマラカ語の経済開発、配属先の状況、各民族の文化紹介等を行っている。(経済計画局、大学等の外部講師による講義形式)	スタッフ2名 語学講師3名
ボラチニア	派遣直後	約2週間	VSO事務所	現地語の習得を目的とし、1日1時間半の講義を2コマ行う。	語学講師1～2名
ボラチニア	年2回	12週間	最初の1カ月：カトマントゥワ外でホームステイ 残りの2カ月：ネパール政府の関連省庁の施設	目的：①ネパール語の習得、②技術訓練(技術用語、現地技術レベルの把握、現地関連機関の把握) ③Living Skillの習得 (隊員4名に1人の割合で講師を配属)	事務スタッフ3名 契約スタッフ45名

他国のボランティア派遣機関の現地訓練の実施調査

国名・派遣機関名	訓練時期	訓練期間	訓練場所以及施設概要	訓練プログラム	訓練スタッフ数
ネパール	年3回	3カ月間	最初の2カ月間は、カトマンドゥ近郊でホームステイをしながらの訓練。残りの1カ月は赴任する地域別グループに分かれ、各地域の農村でホームステイをしながらの訓練。	語学学校より講師を派遣（隊員5人に講師1人） 目的：ネパール語の習得と文化、社会状況に関するオリエンテーション。仕事をする際の心得等。	語学学校より講師を派遣
フィリピン	派遣直後	6～7週間	Philippine Rural Reconstruction Movement	目的：技術・文化・語学の習得 到着後7日間オリエンテーション、その後10日間現地訪問、5週間語学訓練 語学講師数は、概ね隊員2～3人に講師1人	スタッフ1名
スリランカ	年2回（4月と10月）	2カ月間	キャンディ、ゲストハウス	目的：シンハラ語訓練とスリランカの生活に慣れる 内容：シンハラ語訓練、文化、宗教、習慣等のオリエンテーション	スタッフ2名 講師数4名
	年2回（9月と1月）	5週間	特定の場所はない。キャンディでも行っている。普通住宅を借りている。	目的：語学訓練とスリランカ生活、習慣のオリエンテーション。	スタッフ1名 講師1名
タイ	年2回（1月と6月）	3カ月間	農業訓練センター、農業専門高等学校	Peace Corpsは、農業、教育関係が多いので、タイ語訓練、タイ農業事情等を農業関係施設を通し学ぶ。配属先も訓練中に決める。1回の訓練生は60人位。訓練生2～3人に講師1人の割合。	独自の講師と外部講師
	年2回（4月と9月）	42～49日間	4週間：ホフライン（レストハウス） 1週間：活動地訪問 2～3週間：ナコンサワン（研修センター）	目的：初級からのタイ語の習得、タイ文化理解、他のボランティア団体との交流 10～15人の生徒に講師1人の割合	JOCVと同じ 語学講師

他国のボラテンエア派遣機関の現地訓練の実施調査

国名・派遣機関名	訓練時期	訓練期間	訓練場所及び施設概要	訓練プログラム	訓練スタッフ数
タイ	VSA 要請に応じ随時	1カ月間	バンコク市内の語学学校・ホテル	語学学校にて1日中語学訓練(初級からのタイ語)	10人に1人の講師
シリア	UNV			特に現地訓練といったものは無く、UNDP事務所で英語のProficiency Testが実施される。	
モロッコ	USPC 赴任前	11週間	ラバト市内アッカリにあるTeachers Training Instituteを利用。財やAgriculture Extension Training Centre、青年センター等の施設も利用している	訓練対象者は、アラビア語73人、ベルベル語10人、フランス語2人の計85名。訓練内容は、①語学訓練、②異文化オリエンテーション、③技術、④個人の生活方法、⑤開発とは(事例解説)等である。また、赴任後、仕事開始から終了3カ月前まで各人に月20時間分の語学研修手当を支給。赴任後、上記科目の内2科目について先輩と合同で訓練する。	スタッフ20名 語学講師40名
チェンマイ	USPC 毎年6～8月	3カ月	チェンマイより南へ150Km、観光地スーサー近郊の語学訓練センター	アラブ語、チェンマイ語の訓練。村務開発、身体障害者介護職員は、簡単な実習をしている。	スタッフ2名 講師10名
ガーナ	USPC 着任時	10週間	ケープコースト大学の宿泊施設および教室を借用	目的：より早く早く現地に溶け込み、より良い活動ができるようにする。ガーナの、国を理解する。	1名 講師数名
	VSO 着任後	2週間	アフリートレニングカレッジ(教師を対象に再訓練をする大学校)	目的：ガーナを理解する。政治・経済・歴史・文化の講義とガーナ人の風俗、習慣を習得する。語学訓練は無い。	現役職員数名 講師数名
ケニア	USPC 赴任前	10週間	ナイロビにある独自の宿泊設備の整った研修所	スワヒリ語訓練、テクニカルトレーニング及びオリエンテーション。(新隊員用) 一般隊員に関しては、年2回の語学トレーニングを実施。	語学講師3名

他国のボランティア派遣機関の現地訓練の実施調査

国名・派遣機関名	訓練時期	訓練期間	訓練場所及び施設概要	訓練プログラム	訓練スタッフ数
ナイジェリア	赴任前	2カ月	語学研修：ナイロビ市内のKingsosi Language Centreを使用。	英語、スワヒリ語訓練及びオリエンテーション。語学学校は、7名の講師と3名の非常勤講師を有し、教室は4室、設備は黒板と机といった備品なものである。訓練期間には1週間のホームステイが含まれている。	語学講師3名
ナイジェリア	年2回	12週間	クレイにある訓練所	平和部隊の訓練の種目的は協力手法に置かれており、これは技術的に経験の無い者を派遣するために技術面での補完研修が必要である事がある。他にクロス・カントリー・トレーニング、交通安全講座、リベリア英語講座、自己表現トレーニング等訓練内容はよくまとめられ、現地事情に適したものである。	15名(語学講師を含む)
ナイジェリア	到着後	6週間	大学、赤十字トレーニングセンター、レストハウス等(寮生活)	6週間を通し、現地語の習得が主たる目的とされる。内1週間はビレッジに入り現地の家で生活を共にして適応力を養う。教師隊員は、訓練終了後約5週間、実際に教壇に立ち教鞭をふるう。現地訓練後、ボランティアとして不適合と判断された者は帰国が命ぜられる。	スタッフ2名 語学講師2名 臨時講師数名
ナイジェリア	到着後 赴任後	2週間 2週間	大学、赤十字トレーニングセンター、レストハウス等(寮生活)	2週間を通し、現地語の訓練が主たる目的とされる。赴任後の訓練では任地での問題点、心構え等が話し合われる。	スタッフ1名 語学講師1名
ナイジェリア	年2回	3カ月間	USPC研修センター(宿泊設備(50名収容)、研修室、食堂、スタッフルーム)	現地適応、異文化理解、語学習得を狙いとする。学習言語は、フランス語と各任地で必要とされる言語(ハウサ語、ジエマ語、タマシエック語等)	スタッフ4名 語学講師5名

他国のボランテイア派遣機関の現地訓練の実施調査

国名・派遣機関名	訓練時期	訓練期間	訓練場所及び施設概要	訓練プログラム	訓練スタッフ数
ニジェール	年4回	6週間	DED事務所(ニアメ)	目的：現地理解適応、語学学習 語学訓練はフランス語を中心とし、現地語の基礎を学習。	語学講師3名
セネガル	若任時 配属後2～3 カ月後	10～12週間 2週間	テイエス市にある75人収容の語学研修センター	目的：現地語の習得 1クラス3～5名による語学講義。任期延長者については技術訓練を行う。	スタッフ8名 語学講師 13名
ルワンダ		職種により2 ～3カ月	SVA事務所	医療関係者は3カ月間フランス語、ルワンダ語訓練。 その他の職種は2カ月間 オリエンテーション、ホームステイ6日間、国内旅行 の実施。	スタッフ6名 講師3名
			ブカブセントラル・デ・フォォーマーション (収容人員600名)	オリエンテーション、任国事情、語学訓練、ホームステイ1週間	
タンザニア	若任後	8週間	アリユニーシャ市内、タンザナイイトホテル	4週間・スワヒリ語集中講義、1週間・技術訓練 1週間・キスワヒ、1週間・スワヒリ語及び技術訓練	スタッフ5名 講師5名
		4週間半	ダルエスサラーム郊外約20Kmにあるムバ ガラ・センター(ミッシェン系)	3週間半・・・スワヒリ語集中講義 1週間・・・單車訓練	生徒32名 にたいし講 師7名
ザンビア	DVS派遣時 期	2週間	ザンビア大学内	目的はザンビアに関する一般的な知識の習得である。 伝統文化、政治経済、教育、医療、歴史、婦人問題等 の講義中心ではあるが、トビックスは盛沢山である。 他に、年2～3回現地語の研修コースを開催している このプログラムは、DVSが中心になり他の組織に呼	講師12名

他国のボランティア派遣機関の現地訓練の実施調査

国名・派遣機関名	訓練時期	訓練期間	訓練母所及び施設概要	訓練プログラム	訓練スタッフ数
ジンバブエ				<p>びかけているもので、ザンビアに派遣しているほとんどの組織が何らかの形でこの研修を利用している。研修閉鎖前に案内状がJOCVにも送付されるが、JOCVでは個人的に現地語訓練に参加したケースを除き利用していない。現在のところ、隊員の語学レベルでは参加しても無理がある。DVSのDirectorとの懇談では、訓練目的が大幅に異なるためJOCVのための特別メンバーを組む事も難しいとのことであった。当面ザンビアでは、独自の訓練を計画する必要がある。</p>	
ジンバブエ	年4回	2カ月弱	ハラレ市内、GVS事務所・連絡所	<p>現地語（シヨナ、ンデベル語）訓練。配属予定プロジェクト見学、ジンバブエ文化・政治・保健衛生AIDSについて。GVS隊員配置プロジェクト見学。</p>	講師9～10名
ボリビア	年4回	6週間	コチャバンバ市ハイメ・ルイス学校	<p>語学修得、任国事情オリエンテーション、政治・経済社会等</p>	調整員1名 講師3-4名
	年2回	3カ月間	コチャバンバ市マリック・ノル私立中学校	<p>語学（西語）の強化、社会事情</p>	調整員1名 助手2名 秘書1名 講師2-3名
エクアドル	年3回	4カ月	サンタ・アナにあるEL CENTRO PARA EL POTENCIAL HUMANO(CPH)	<p>スペイン語訓練を中心とした総合適応訓練。 内容：①実践的サブイバルなスペイン語、②異文化適応、③技術補充研修、④専門関係先訪問 語学講師は生徒4～5人にたいし1人。</p>	CPHのみ スタッフ約10人 技術指導員約10人

他国のボランティア派遣機関の現地訓練の実施調査

国名・派遣機関名	訓練時期	訓練期間	訓練場所及び施設概要	訓練プログラム	訓練スタッフ数
トミニカ トイ開発 奉仕事業 団 (DED)	赴任時	2カ月	D E D 事務所内の2教室	目的：①スペイン語の習得、②国内環境・状況把握、 ③地方における平均的家庭生活を知る、④現地 訪問 内容：午前中語学訓練、文化・交通事情、社会経済、 政治等についてのラーニング学習、5日間のホームステイ 5日間の現地訪問	責任者1名
U S P C	赴任時 年2回	14週間	セント・ニコ・郊外にあるトレーニングセンター「ENTRENA S. A.」と契約。国内各地区に5つの分野毎の 実習トレーニング場所有する。	内容：語学訓練、コアートレナーニング、技術トレーニ ング、補助訓練の4つのプログラムを持ち、到着週を 0として、1～8週目はトレーナーニングセンターにて集 中授業を受け、9～13週目は各地区の分野に分か れたの実習トレーナーニング、14週目に最終試験を行い 合格者が正式な平和部隊の隊員として認められること となる。尚、訓練期間中の宿泊場所はすべてトミニカ 家庭でのホームステイとなる。	分野別コーチ ャー（現 地人）
ペー SERVICIO ALEMAN DE COOPERA- CION SOCIAL- TECNICA	赴任時	2カ月間	リマの語学学校	内容：語学と任国事情。現地訓練は3コースに分かれ 語学訓練は生徒1～5人に講師1人の割合。	
ジャマイカ U S P C	赴任時 年4回	6週間	チニスコート、プール、庭付きの独自のトレ ーニングセンター	ジャマイカ文化、歴史、概要、パトワ語訓練30時間 安全対策、現地医療事情、受け入れ機関規程、公共バ ス利用法等	訓練所スタッフ 4名 訓練講師2 名

他国のボランティア派遣機関の現地訓練の実施調査

国名・派遣機関名	訓練時期	訓練期間	訓練場所及び施設概要	訓練プログラム	訓練スタッフ数
ジャマイカ CUSO				特別な訓練は行っていないが、赴任後、各受け入れ機関から2週間のオリエンテーションがある。内容は、ジャマイカ概要、配属先内容、市内バスルート説明、安全対策等である。	受け入れ機関の担当者 1名
パナマ USPC	年3回	約80日間	セントラル県アレグリア市内の語学研修施設。 (3年毎に首都近郊地へ移動する規則がある)	目的：語学習得、任国事情全般、専門職種 of 習得 内容：スペイン語、グアラニー語（赴任地、専門職種によって選択する）の習得。任国での生活術全般、専門職種の現地訓練、語学研修旅行 語学訓練は、生徒3人になんとして講師1人 宿泊施設は施設付近の現地人宅にホームステイ	隊員数により 随時対応
カナダ USPC	年3回	13～16週間	L.L.教室、視聴覚教室、講堂（小） 宿泊施設は、近隣住民の協力を得て寄宿	目的：現地語学力を高め、専門分野における技術レベルのアップ 内容：現地語学訓練、保健衛生、専門技術訓練	O.B.隊員約 15名
フィリピン USPC	派遣直後	10週間（職種による）	スバ市内のホテル（オリエンテーション） スバ郊外の村落（ホームステイ） スバ市内の中学校（授業技術訓練）	目的：現地語の修得。協力手法の修得。 内容：現地訓練は、100時間、座学とスバ郊外の村落でのホームステイを行う。技術訓練はスバ市内の中学校で2週間の授業実習を行う。配属先の長を交えて、配属後の活動内容についての討議。	技術・語学 コーディネーター 7名 講師8名 秘書等3名
VSO	派遣直後	2～3週間	スバ市内、近郊の村落	若任時2～3週間フィジー系、インド系の語学・文化訓練をホームステイ方式で行う。必要な者には6カ月間の限度で語学訓練経費を支給し、大学等で講義を受けさせる。	Training Officer 1 名 現地スタッフ2 名

他国のボラティア派遣機関の現地訓練の実施調査

国名・派遣機関名	訓練時期	訓練期間	訓練場所及び施設概要	訓練プログラム	訓練スタッフ数
PNG	年2回	6-8週間	初めの1週間：ポートモレスビー 残り：東ハイラインド州、聖書言語研究所	ビジン語、PNGの文化紹介、専門分野に関連したPNGの精度及び現状	隊員4-5人に講師1名 テクニカルスタッフ ダイレクター
			初めの4日間：ポートモレスビー 残り：セントラル州、マイオラ村	ビジン語、治安対策他	講師1名 ファイナルスタッフ 1名
西サモア	派遣直後	2カ月間	アピア市内、ピースコー専用トレーニングセンターおよび村務部の学校	一般事務的な講座、語学・クロスカルチャー訓練、技術訓練	スタッフ8名 他2名
			借上げ会議室	オリエンテーション、サモア語、文化講座	隊員により運営 ダイレクター
ツロモン諸島	年2回	2カ月間	数カ所の村落と契約。講師と共にホームステイし所定の訓練を行う。	目的：ボラティア活動に必要な知識、技術、語学、情報を提供する。 内容：語学（ビジン語）、クロスカルチャー、技術訓練（要請背景、業務内容の説明）、健康安全管理、開発におけるボラティアの役割。	巡回指導員（本部より3名）、語学講師（パートナー）8名、助手2名
			1週間	S I D T (Solomon Islands Development Trust)の支援している村落	目的：ビジン英語とソロモンの文化、生活様式の修得 内容：1週間のホームステイのみ
VSO	年3回	1週間			

他国のボランテニア派遣機関の現地訓練の実施調査

国名・派遣機関名	訓練時期	訓練期間	訓練場所及び施設概要	訓練プログラム	訓練スタッフ数
7777	CUSO 派遣毎	1週間	南太平洋大学ヴァヌアツセンター	ヒスラマ語の修得	スタッフ1名
ミクロネシア連邦	USPC 年1回	11週間	PHASE1:ホテルと事務所 PHASE2:住地の学校、教室	PHASE1:オリエンテーション、語学、任国一般概況、医療 PHASE2:語学、地域開発、異文化理解、技術移転手法 講師の講師は全て米国本土より招聘	スタッフ11名 語学講師1人 に隊員4-5人の別合

